

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第107集

上尾市

在
家

県営住宅丸山団地第II期工事関係埋蔵文化財発掘調査報告

1991

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

本書は、上尾市平方地内における県営丸山団地の第II期工事にともなう、在家遺跡の発掘調査報告書であります。

在家遺跡は、先に上尾市教育委員会によっても調査が実施されており、今回の調査地点は、隣接した台地の西端部にあたります。上尾市の調査では、旧石器時代から中・近世まで各種の遺構が検出されていたことから、同時代の遺跡の広がりが予想されておりました。

埋蔵文化財の取り扱いについては、建設工事に先立ち、関係機関と慎重に協議が重ねられた結果、当事業団が発掘調査を実施して、その記録を保存することになりました。

今回の発掘調査の結果、縄文時代前期末の住居跡や晩期末の土器などが検出されました。これらはともに埼玉県内でも類例が少なく、貴重な資料であります。

本書は、これらの成果をまとめたものでありますが、これが埋蔵文化財の保護に関する資料として、また学術研究の基礎資料として広く御活用いただければ幸いに存じます。

おわりに、発掘調査から本書の刊行に至るまで御協力いただきました埼玉県住宅都市部住宅建設課、上尾市教育委員会、並びに地元関係者各位に対し厚く御礼申し上げます。

平成3年7月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 荒井修二

例　　言

1. 本書は、埼玉県上尾市大字平方字在家3479に所在する在家遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査届に対する文化庁長官からの指示通知番号は、平成3年10月18日付け委保第5の0893号である。
2. 発掘調査は、県営住宅丸山団地の第II期工事に先立つ事前調査であり、埼玉県教育局指導部文化財保護課の調整を経て、埼玉県住宅都市部住宅建設課の委託により財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。整理・報告書作成作業も引き継ぎ財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
3. 発掘調査は、平成2年4月1日から平成2年7月31日まで実施し、整理・報告書作成作業は平成3年4月1日から平成3年7月31日まで実施した。遺構番号は、原則的には発掘調査時のものを使用した。
4. 遺構覆土の自然科学的分析は、株式会社パリノサーベイに委託した。
5. 本書の執筆は、第1章を県文化財保護課が、他を細田　勝が担当し、浜野美代子の協力を得た。
6. 発掘調査時の写真は浜野美代子、細田　勝が行った。出土品の整理および図の作成は細田が担当した。
7. 本書の編集は資料部資料整理課の細田が行った。
8. 本書にかかる資料は、平成3年度以降埼玉県埋蔵文化財センターが管理・保管する。
9. 本書を作成するあたり、下記の方々から御教示・御協力を賜った。(敬称略)
赤石　光資・青木　秀雄・奥野　麦生・金子　直行・金箱　文夫・斎藤　悟朗・鈴木　敏昭
田中　和之・西井　幸雄・橋本　勉・山崎　広幸
秋庭佐和子・泉　美智子・加茂野ひな子・小松　和子・栗原　朝子・斎藤　芳子・長谷川清美
吉田ちい子

凡　　例

1. 本書内の挿図における指示は次の通りである。

S J - 住居跡 SK - 土壌 FP - 炉穴 SD - 溝

2. 遺跡全測図におけるX・Yの数値は、平面直角座標第IX系(原点：北緯36度00分00秒、東経139度50分00秒)に基づく各座標値を示す。また、遺構図内の方位は全て座標北を示す。

3. 本書に掲載した挿図の縮尺は、以下を原則とし、それ以外は個別に示した。

遺構 住居跡・土壌・炉穴1/60 溝1/80

遺物 土器・打製石斧・拓本1/3 石錐等小型石器1/2

4. 遺構・遺物挿図における網部指示は以下のとおりである。

ローム地山 

炉跡および焼土 

土器彩色部 

5. 測量図内のドット指示は以下のとおりである。

●土器 □石器・礫

6. 文中の色彩表現は、農林省水産技術会議事務書監修「標準土色帳」1976による。

7. 出土土器の分類基準は以下のとおりである。

第I群 燃糸文系土器群 第VII群 中期初頭の土器群

第II群 沈線文系土器群 第VIII群 中期中葉の土器群

第III群 条痕文系土器群 第IX群 中期後半の土器群

第IV群 前期前半～中葉の土器群 第X群 安行式土器

第V群 前期終末の土器群

目 次

序

例 言

凡 例

I. 調査の概要.....	1
1. 発掘調査に至る経過.....	1
2. 発掘調査・整理作業の組織.....	2
3. 調査の経過.....	2
II. 遺跡の立地と環境.....	3
III. 遺跡の概観.....	6
IV. 縄文時代の遺構と遺物.....	8
1. 住居跡と出土遺物.....	8
2. 土壌と出土遺物.....	20
3. 炉穴.....	30
4. グリッド出土遺物.....	31
V. 中～近世の遺構と遺物.....	59
1. 土壌.....	59
2. 溝.....	59
VI. 分析結果.....	62
VII. 結語.....	69

挿図目次

第1図 遺跡の位置と周辺遺跡	4	第26図 グリッド出土土器(第V群1)	38
第2図 遺跡周辺の地形	6	第27図 グリッド出土土器(第V群2)	39
第3図 遺構全測図	7	第28図 グリッド出土土器(第V群3)	40
第4図 基本層序	7	第29図 グリッド出土土器(第V群4)	41
第5図 第1号住居跡	8	第30図 グリッド出土土器(第V群5)	43
第6図 第2号住居跡	9	第31図 グリッド出土土器(第V群6)	45
第7図 第3号住居跡	11	第32図 グリッド出土土器(第V群7)	47
第8図 第3号住居跡出土土器	11	第33図 グリッド出土土器(第V群8)	48
第9図 第4号住居跡	12	第34図 グリッド出土土器(第V群9)	49
第10図 第4号住居跡遺物分布図	13	第35図 グリッド出土土器(第V群10)	50
第11図 第4号住居跡土器接合関係図	13	第36図 グリッド出土土器(第VI・VII群)	51
第12図 第4号住居跡出土土器(1)	15	第37図 グリッド出土土器(第IX群)	52
第13図 第4号住居跡出土土器(2)	17	第38図 グリッド出土石器(1)	54
第14図 第4号住居跡出土土器(3)	18	第39図 グリッド出土石器(2)	55
第15図 第4号住居跡出土土器(4)・石器	19	第40図 グリッド出土石器(3)	56
第16図 土壌実測図(1)	22	第41図 グリッド出土石器(4)	57
第17図 土壌実測図(2)	24	第42図 中世土壤実測図	59
第18図 土壌出土土器・石器(1)	26	第43図 中世土壤出土古錢	59
第19図 土壌出土土器(2)	27	第44図 中世土壤出土陶器	60
第20図 土壌出土土器(3)	28	第45図 溝実測図(1)	60
第21図 炉穴実測図	30	第46図 溝実測図(2)	60
第22図 条痕文系土器分布図	32	第47図 植物珪酸体組成	65
第23図 グリッド出土土器(早前期1)	33	第48図 脂肪酸組成とステロール組成	68
第24図 グリッド出土土器(早前期2)	34	第49図 関東地方南西部における土器変遷	71
第25図 グリッド出土第V群土器分布図	36	第50図 北関東における土器変遷	75

表 目 次

第1表 土壌一覧表	29	第4表 植物珪酸体分析結果	65
第2表 炉穴一覧表	31	第5表 分類対象表	73
第3表 石器一覧表	58		

図版目次

図版 1	在家遺跡航空写真	図版 8	第20号土壤
	在家遺跡全景（東から）		第22号土壤遺物出土状況
図版 2	第1号住居跡（北から）		第1号炉穴
	第1号住居跡（西から）		第4号炉穴
図版 3	第2号住居跡（北から）	図版 9	遺構出土土器
	第2号住居跡（西から）	図版10	遺構・グリッド出土土器
図版 4	第3号住居跡（西から）	図版11	第1号住居跡出土土器(1)
	第3号住居跡（南から）		第1号住居跡出土土器(2)
図版 5	第4号住居跡（北から）	図版12	第1号住居跡出土土器(3)
	第4号住居跡（西から）		第1号住居跡出土土器(4)
図版 6	第1号土壤発出土状況	図版13	グリッド出土土器(1)
	第1号土壤		グリッド出土土器(2)
	第2号土壤発出土状況	図版14	グリッド出土土器(3)
	第2号土壤		グリッド出土土器(4)
	第4号土壤遺物出土状況	図版15	グリッド出土土器(5)
	第4号土壤		グリッド出土土器(6)
	第5号土壤	図版16	グリッド出土土器(7)
	第6号土壤		グリッド出土土器(8)
図版 7	第7号土壤	図版17	グリッド出土土器(9)
	第7号土壤遺物出土状況		グリッド出土土器(10)
	第8号土壤	図版18	グリッド出土土器(11)
	第9号土壤		グリッド出土土器(12)
	第11号土壤	図版19	グリッド出土土器(13)
	第12号土壤		グリッド出土土器(14)
	第13号土壤	図版20	グリッド出土土器(15)
	第14号土壤		グリッド出土石器(1)
図版 8	第15号土壤	図版21	グリッド出土石器(2)
	第16号土壤		グリッド出土石器(3)
	第17号土壤	図版22	植物珪酸体顕微鏡写真
	第19号土壤		

I. 調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

首都圏から20km～50km圏に位置する埼玉は、人口増加も著しく、県南を中心に住宅や住環境に対する不満も多い。このような状況への対応のため、埼玉県では各種の住宅政策、都市・土地政策を実施しており、住宅建設もその一環として行われている。こうした開発事業に対応しうるために、県教育局指導部文化財保護課では、開発関係局と事前協議を実施し、文化財の保護について遺漏のないように調整を進めているところである。

発掘調査に至る経過は、平成元年11月9日付け住建第1274号で住宅都市部住宅建設課から上尾丸山第2団地建設予定地における埋蔵文化財の所在及びその取り扱いについての照会があり、これに対して文化財保護課では平成2年1月30・31両日に遺跡の範囲確認調査を実施した。当該地域には埋蔵文化財包蔵地が多く分布し、丸山団地第I期建設に伴って上尾市遺跡調査会により発掘調査が実施され、旧石器～中・近世にわたる遺構が検出された。今回の試掘調査は遺跡範囲確認を目的として実施した。その結果に基づき、平成2年2月17日付け教文第1484号で概ね下記のとおり回答した。

1. 建設予定地内には旧石器、縄文、古墳時代の集落跡の在家遺跡が所在する。
2. これらの埋蔵文化財包蔵地の取り扱いは、現状保存することが望ましい。
3. 工事計画上止むを得ず現状を変更する場合は文化財保護法第57条の3の規定に従って、事前に記録保存の発掘調査を実施すること。
4. 発掘調査にあたっては、当課と協議すること。

その後、取り扱いについて文化財保護課と住宅建設課において協議を重ねたが、計画変更は不可能となったため、止むを得ず記録保存のための発掘調査を実施することになった。発掘調査の実施については、実施機関である財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と住宅建設課、文化財保護課の三者により、調査方法、調査期間、調査経費を中心に協議を行った。その結果、平成2年4月から平成2年7月31日まで調査を実施することが決定された。

財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団から文化財保護法57条第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査届が平成2年3月30日付け財埋文第615号で文化庁長官あて提出され、文化庁から平成3年10月18日付け委保第5-0893号で受理通知があった。

(文化財保護課)

2. 発掘調査・整理作業の組織

1. 発掘調査（平成2年度）

理 事 長 荒井 修二
副 事 長 早川 智明
常務理事兼管理部長 古市 芳之
理事兼調査部長 吉川 國男
庶務経理
庶 務 課 長 高田 弘義
主 査 松本 晋
主 事 長 滝美智子
経 理 課 長 関野 栄一
主 任 江田 和美
主 事 本庄 朗人
主 事 斎藤 勝秀

発掘

理 事 兼 調 査 部 長 吉川 國男
調 査 部 副 部 長 塩野 博
調 査 部 第 4 課 長 鈴木 敏昭
主 査 浜野 美代子
主 任 調 査 員 細田 勝

2. 整理（平成3年度）

理 事 長 荒井 修二
副 事 長 早川 智明
常務理事兼管理部長 倉持 悅夫
庶務經理
庶 務 課 長 高田 弘義
主 査 松本 晋
主 事 長 滝美智子
経 理 課 長 関野 栄一
主 査 江田 和美
主 事 福田 昭美
主 事 腹塚 雄二
主 事 菊池 久
整理
資 料 部 長 中島 利治
資 料 部 副 部 長 兼 資 料 整 理 第 1 課 長 増田 逸朗
主 任 調 査 員 細田 勝

3. 調査の経過

在家遺跡のII次調査は、県営住宅丸山団地の第II期工事に伴い、平成2年4月から同年7月にかけて実施された。

今回の調査地点は、馬の背状の台地西端部であり、地形的に急傾斜を呈している。また、第I期工事がほぼ完了しており、既に入居済みの状況であったために、重機による表土剥ぎが終了した後に安全対策上から囲柵工事を実施した。

台地は、地形に反して包含層の残存状況が良好であったために、重機による表土剥ぎを最小限にとどめ遺構確認面まで極力人力による調査を実施した。包含層の調査段階で千網式の遺物が纏まつて出土したため、慎重に調査を行った結果当該期の土壤と住居跡を検出した。何れも包含層中に掘り込みを有していたため、ローム面では住居跡の柱穴以外に遺構の痕跡を確認する事ができなかった。

確認作業と並行して、順次遺構の調査を行ない、7月中旬で遺構の精査・測量が終了した。同月下旬に航空写真測量を行い、機材を撤収し、在家遺跡のすべての調査を終了した。

II. 遺跡の立地と環境

在家遺跡は、上尾市大字平方字在家3479に所在する縄文時代前期と晩期終末を中心とした集落跡である。遺跡は、JR高崎線の上尾駅から直線距離にして約4km西側の、荒川左岸に開けた台地上に位置しており、遺跡からは富士山をはじめ秩父連山を遠望することができる。

遺跡は、広義大宮台地の一支台である指扇支台上に形成されている。大宮台地は、東西に荒川、古利根川の2大河川によって開析されているほかに、小河川による浸食が発達しており、樹枝状に開析された複雑な形状を示している。遺跡の位置する台地も、荒川に注ぐ小支谷により南北に開析された結果、舌状台地が形成されている。遺跡での台地標高は15m、水田面との比高差は4mを測る。

荒川本流沿いの台地には、旧石器時代を始め縄文時代の遺跡が数多く発見、調査されている。旧石器時代では、瀬戸内技法によるナイフ型石器が出土した殿山遺跡が調査され、殿山技法が提唱されている（織笠他1982）。

縄文時代早期には、海平面の上昇にともない荒川谷にも貝塚が形成され始めた。在家遺跡の下流約1.7kmに位置する平方西貝塚が早期の最奥の貝塚と言われている。このほかにも荒川谷に面した大宮台地には五味貝戸貝塚等の早期貝塚が点在しているが、貝塚形成に伴う遺跡の増加は前期前半期にしだいに顕著となり、関山式期に最盛期を迎える。荒川谷に面した大宮台地や武藏野台地の縁辺部に盛んに貝塚が形成されるのもこの頃からである。

荒川谷における貝塚形成は、後続する黒浜式以降に急速にその数が減少している。この背景には荒川谷の豊富な堆積により貝類の生棲に不適当な条件が急速に形成されたためであると考えられている。恐らく、海退に伴って縄文時代前期末頃には在家遺跡周辺の荒川谷は広い湿地帯へと化していたのであろう。

この地域における魚貝類の採捕が集落形成に必要不可欠な条件であったとは考えにくい。近年の調査事例からすれば、生活の最適地はむしろ背後に丘陵や山地をひかえた地域に積極的に展開されたとするほうが妥当とも言える。集落の形成には季節的な利用をも考慮される要因を含んでいると指摘する事もできよう。

在家遺跡の主体である縄文時代前期末には、埼玉県内でも遺跡数・出土遺物とともに極めて貧弱であり、関山式から黒浜式を経て諸磯a～bにいたる遺跡の充実した内容から比較すると、出土遺物のみならず、集落形成も殆ど行われていないようであり、まさに隔世の観がある。

この傾向は特に大宮台地において顕著に窺われるようであるが、関東地方全域に目を転じてみた場合は如何であろうか。近年、群馬県では関越自動車道路の建設に伴う発掘調査によって、諸磯C式の大規模な集落跡が報告されている（関根1986）。他にも同時期の集落跡が数多く存在するようである。一方多摩地域においても、多摩ニュータウンの建設に伴う発掘調査により、当概期の在り方が次第に明らかとなりつつある。諸磯C式集団は、今日までの報告例からすると、丘陵や山岳地帯を背後に控えた地域に積極的に生活の場を求めたのかもしれない。

しかしながら、貧弱と言われる大宮台地においても、まったく生活の痕跡がなかったわけではな



第1図 遺跡の位置と周辺遺跡

く、断片的ながらも小規模な遺跡の報告がある(青木1981)。遺跡の立地は、河川に面した台地の先端部に点在するようであり、丘陵・山岳地帯とは異なった生活形態が想起される。

しかし、以前から指摘されるように、諸磕b式からc式へはスムーズに移行するものではなく、両者の断絶も大きいものがある。環境等の急変により人々が点々と生活の場を移していた結果であるのかもしれない。このような条件のもとでは遺物にみられる在来の系統以上に、他地域からの強い影響を受容する傾向にあり、縄文社会においても相当な混乱が生じた(今村1981)ことが想起される。諸磕C式の住居跡は、在家遺跡以外に、寄居町南大塚遺跡で検出されている程度である。このような状況は、縄文時代前期末葉から中期初頭にかけて垣間見ることができる。

縄文時代中期一勝坂式から加曾利E式一にかけては遺跡数も多く、上尾市内でも秩父山遺跡、雨沼I遺跡等比較的大規模な遺跡が報告されている。秩父山遺跡(赤石他1978)では、住居内に貝塚を伴っている。縄文時代後期には、小林遺跡、東谷遺跡等の報告例がある。

在家遺跡では、縄文時代晩期末の千網式土器が出土している。埼玉県内の出土事例は、蓮田市関山貝塚(庄野他1974)、嵐山町花見堂遺跡(梅沢1976)、同町屋田遺跡(今井1984)等で報告例があるが、零細な資料である。器形の判明する資料では、日高町で発見された資料の報告例があるに過ぎない(鈴木1979)。また、時期的にやや下降すると思われる資料は、大宮台地においては浦和市白幡中学校校庭遺跡(青木他1977)、同馬場小室山遺跡での出土例が報告されている(岩井1990)程度であり、極めて断片的である。美里町如来堂C遺跡からは、大洞A'式以降のまとまった土器群が報告されている(増田1980)が、遺構に伴うものはない。縄文時代晩期末葉から初期弥生に至る間の状況は、今もって不明瞭な観が否めない。

参考文献

- 穢笠 明他 『殿山遺跡』 1982 石器文化研究会
関根慎二 『糸井宮前II』 1986 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
青木義経 『縄文時代前期終末から中期初頭の動向について』 1981 『埼玉考古』 第20号
今村啓爾 『施文順序からみた諸磕式土器の変遷』 1981 『考古学研究』 第27巻第4号
赤石光賀 『秩父山』 1978 上尾市教育委員会
庄野靖寿 『関山貝塚』 1974 埼玉県教育委員会
梅沢太久夫他 『埼玉県土器集成4』 1976 埼玉考古学会
今井 宏 『屋田・寺ノ台』 1984 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
鉢本徳雄 『日高町高麗公民館所蔵の千網式土器』 1979 『埼玉考古』 第18号
青木義経 『白幡中学校校庭内遺跡発掘調査報告書』 1979 浦和市遺跡調査会
岩井重雄 『馬場小室山(第21・24・25次)』 1990 浦和市教育委員会
増田逸朗 『如来堂C』 『甘粕山』 1980 埼玉県教育委員会

1. 在家遺跡 2. 砂ヶ谷戸I遺跡 3. 砂ヶ谷戸II遺跡 4. 楽上遺跡 5. 後山遺跡 6. 楽中遺跡
7. 熊野神社古墳 8. 領家遺跡 9. 石神遺跡 10. 山下遺跡 11. 小谷津遺跡 12. 下遺跡 13. 浅間台浅間塚 14. 柏屋遺跡 15. 雲雀遺跡 16. 殿山古墳 17. 殿山遺跡 18. 畦吉遺跡 19. 西通I遺跡
20. 小林遺跡 21. 小塚遺跡 22. 箕輪II遺跡 23. 宿北II遺跡 24. 宿北I遺跡 25. 箕輪I遺跡
26. 東谷遺跡 27. 雨沼I遺跡 28. 平方西貝塚 29. 稲荷台遺跡 31. 雨沼遺跡 32. 圃遺跡 33. 中町遺跡 34. 高野陣屋 35. 福田陣屋 36. 滝沼遺跡 37. 指扇小学校内遺跡 38. 西大宮バイパスNo.6
遺跡 39. 琵琶島遺跡 40. 琵琶島貝塚 41. 大丸山遺跡 42. 五味貝戸貝塚

III. 遺跡の概観

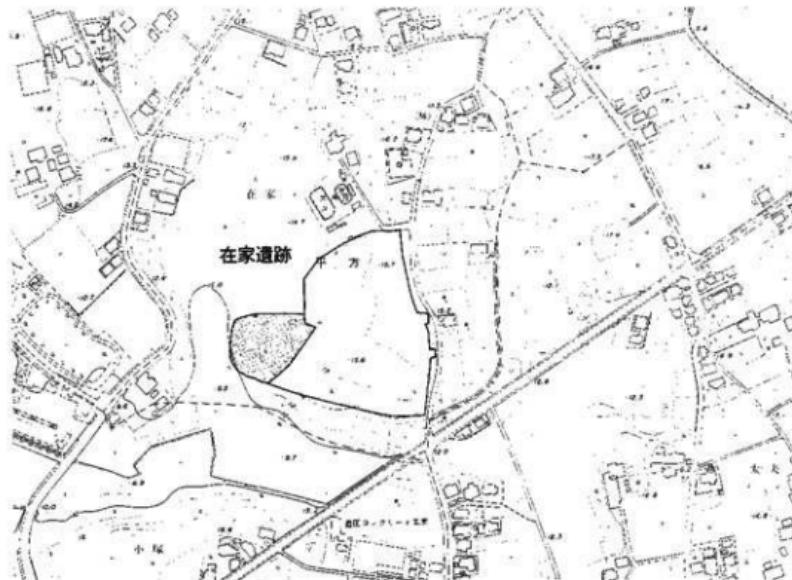
在家遺跡は、荒川谷に注ぐ3本の支谷によって樹枝状に開析された台地に形成された、旧石器時代から縄文時代早期～晚期、および中・近世の遺跡である。遺跡は、昭和63年度に上尾市教育委員会により第1次の発掘調査が実施されており、今回の調査地区は隣接する台地の先端部分が対象となつた。

前回の調査によって、旧石器時代のナイフ型石器・縄文時代早期の炉穴・前期～後期の住居跡及び中・近世の溝を中心とする遺構が検出されており、今回の調査地区においても同様の遺構の検出が想定された。今回の調査地区は、馬の背状を呈する台地西端部であるが、調査地区全体を概観すると、今回の調査地区は標高周囲に比べてやや高まりを示している。

調査地区は、地形図からも判別するように平坦な部分はほとんど認められない。従って前回の調査で検出された中・近世の遺構は、調査区境界あたりが事実上の境となっている。

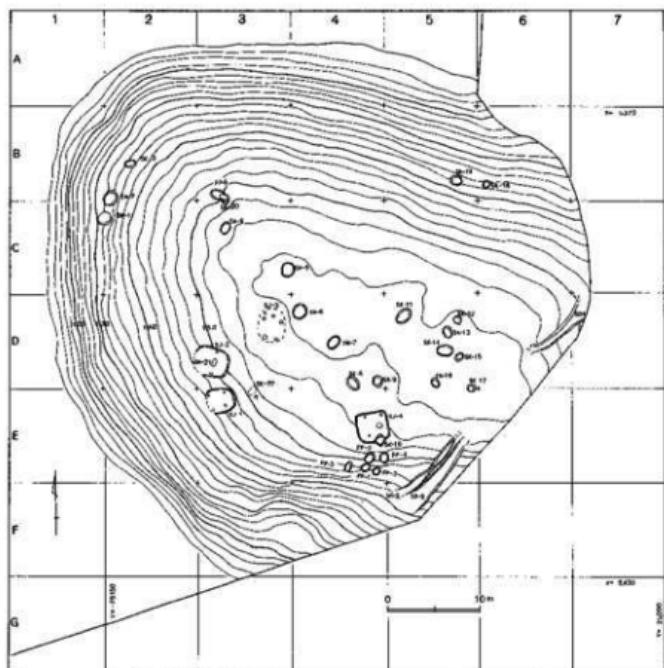
今回の調査では、旧石器時代の遺物は検出されなかった。縄文時代の遺構分布は台地の南～西側斜面と台地平坦部に限定されており、北斜面部にはほとんど遺構の分布が認められない。

検出された遺構は、縄文時代早期では炉穴6基、諸磯C式期では住居跡3軒・土壙2基、中期中葉では土壙1基が検出された。晩期では大洞Aないしは千網式の住居跡1軒・土壙1基が検出され

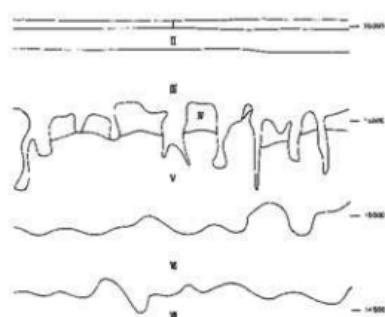


第2図 遺跡周辺の地形

た。その他の縄文時代の遺構では集石土壙5基がある。中世では片口鉢と錢を伴う土壙1基が検出された。その他、時期不明瞭の遺構では土壙13基・溝3条が検出されている。溝は前回、上尾市の調査で検出された中～近世遺構の末端に相当しよう。



第3図 遺構全測図



第4図 基本層序

- I. 黒色土 表土層。山林であったために、有機物の堆積が顕著である。
- II. 黒褐色土 ローム粒子を多く含む。全体にしまり・粘性が弱い。20～30cmの堆積である。縄文時代の包含層である。
- III. 楊色土 ソフトローム層で、II層との混土が著しく、明瞭な区分が困難である。
- IV. 黄褐色土 武藏野台地第IV層に比定される。白色粒子含見、しまりが強い。
- V. 暗黄褐色土 第I黒色帶に比定される。IV層がブロック状に堆在している。しまりが強く、ブロック状に剥落する。
- VI. 灰黒褐色土 第II黒色帶に比定される。スコリア・白色粒子を含み、しまりが強い。
- VII. 灰黃褐色土 スコリア・白色粒子を含み、粘性が強い。

IV. 繩文時代の遺構と遺物

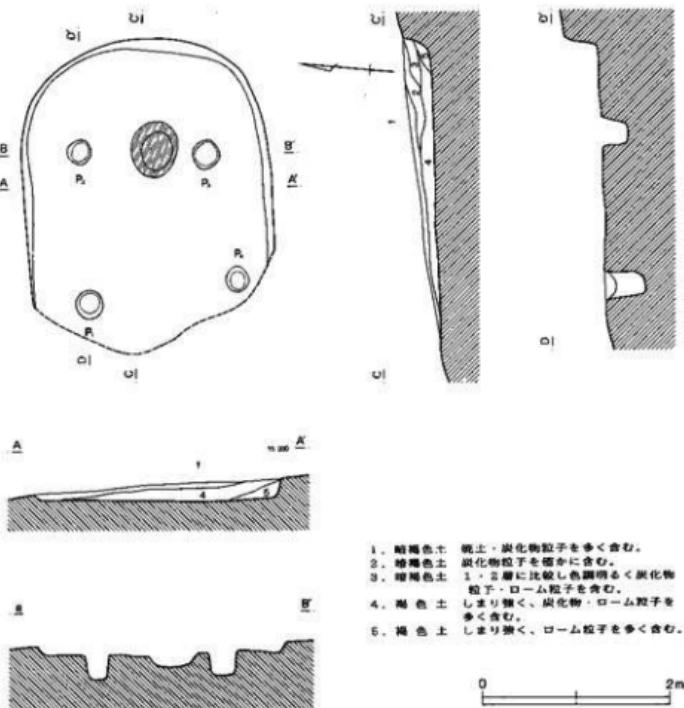
1. 住居跡と出土遺物

第1号住居跡（第5図）

第1号住居跡は、E-3グリッドで検出された。本住居跡の北側には、隣接して第2号住居跡が構築されている。遺構確認時において、火熱を受けた破碎砾と、少量の諸磯C式土器が確認されたため、礫の分布を確認するとともに、慎重に遺構確認作業を行った。

確認された住居跡は、台地南西側の斜面部に構築されており、長軸をほぼ南北にとっているために、床面と壁それぞれの西端部分が流失している。従って、覆土も東北から南西側への片流れの堆積状況を呈している。

住居跡を完掘した状態では、長径3.3m×短径2.7mを測る。流失した西壁を推定しても、長軸が



第5図 第1号住居跡

ほぼ3.5m程度と思われる。壁は住居東側の残存が良好であり、ローム面からほぼ直角に掘り込まれている。確認面から床面までの深さは、最深部で約30cmである。

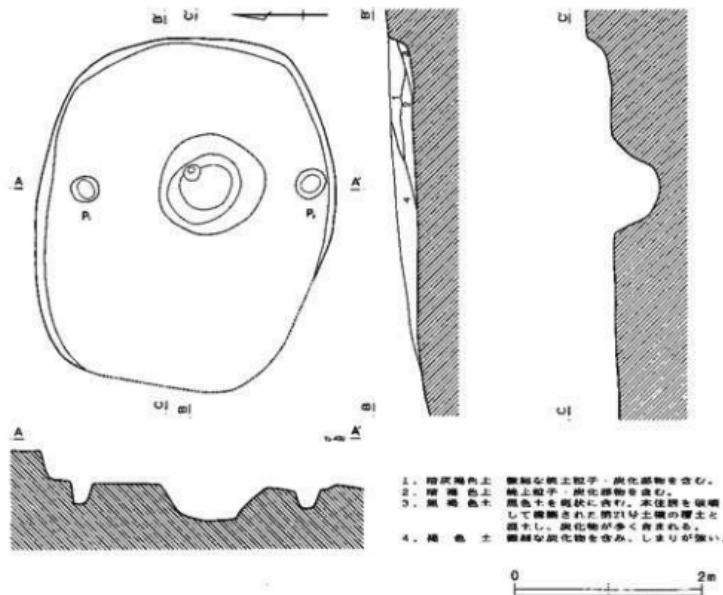
柱穴は4本が確認された。床面からの深さは、北壁側のP1、P2がそれぞれ44、32cm。P3、P4が2421cmを測り、北側柱穴がやや深く掘り込まれる傾向が窺える。

炉跡は、住居跡の主軸（長軸方位）上にあり、東壁寄りの柱穴との交点上に位置している。炉跡の位置は、後述する第2、第4号住居跡においても同様である。炉跡は、径が50～55cmの楕円形を呈し、床面から約14cmの皿状の掘り込みをもつ。覆土は1層のみで、住居跡第4層に類似し、炭化物・焼土粒子がやや多く含まれている。

出土遺物は、諸種C式土器と周辺の集石土壙から流失した小砾が覆土上部で少量出土した程度であり、住居跡に伴なう遺物の多くは谷部に流失したものと思われる。

第2号住居跡（第6図）

第2号住居跡は、D-2～3グリッドに位置し、第1号住居跡の北側に隣接して検出された。第1号住居跡と同様に、本住居跡も台地の西側斜面部に構築されており、床面および壁の西～南側の一部が流失している。住居跡は、現存部で長径3.7m×短径3.2mを測り、壁の南西コーナー部が擾乱を受けていたことから推定しても、隅丸方形を呈していたものと考えられる。



第6図 第2号住居跡

壁は、確認面からほぼ直角に掘り込まれ、最も遺存状態の良好な北壁側で確認面から23cmを測る。西壁から離れるに従い、しだいに浅くなり、東壁側では20cm前後、南壁側に移るに従い確認が困難となる。

本住居跡に属する柱穴は2本のみが検出された。住居跡南北中央軸線から東寄りに位置する。確認面からの深さは、P1が24cm、P2が21cmを測る。他には、柱穴の痕跡を確認することはできなかった。

本住居跡の廃絶後に集石土壌（第21号土壌）が構築されたため、炉跡が破壊されている。土壌は、炉跡の直上に位置しており、覆土の観察から、住居跡に後続することが確実である。土壌は、住居跡の廃絶後に覆土の堆積がある程度進み、窪地状になった地床炉を利用するように構築されたものと想定される。炉跡は、床面から約40cmの深さで掘り込まれている。なお、炉跡と土壌の詳細は第Ⅳ章第2節で触れることとする。

本住居跡は第1号住居跡と同様に、遺構内からは殆ど遺物が出土していない。第1号住居跡と同様に、遺物は流失したものと思われる。

第3号住居跡（第7図）

本住居跡は、D-3グリッド北東部に位置し、台地のほぼ頂部に構築されている。遺構は、縄文時代前期の包含層を調査中に、焼土粒子・炭化物を交えた暗褐色土の分布が認められたため、面的な広がりを確認し、さらにローム面まで掘り下げた結果、柱穴が確認されたため、住居跡と断定した。

焼土粒子・炭化物の広がりは3.4～4.0mの範囲に認められ、暗褐色土を掘り下げたところ、壁と思われる立ち上がりが北西および南東隅で確認された。本住居跡の覆土である暗褐色土は縄文時代の包含層である基本層序第II層に比較して褐色が強く、焼土粒子・炭化物を含んでいたため、明瞭に識別された。覆土の調査の後に、さらに確認作業を行ったところ、約10cm下部のローム面で柱穴が検出された。

柱穴は6本が確認された。P3、P4はローム面から40、30cmの掘り込みをもつが、他は20cm前後である。覆土調査中に、焼土の集中が確認されたが、再度の調査段階で、下部に柱穴P4が検出された。遺物は、本住居跡が縄文時代（特に諸磯C式土器が卓越している）の包含層中に構築されていたために、該期の資料も含まれているが、前期の遺構構築面よりも上層に位置していること、および大洞A式土器が覆土内から出土していたため、晩期末の住居跡と断定した。また、覆土内からは、チャートの剝片・チップが出土しているが、製品は確認されていない。

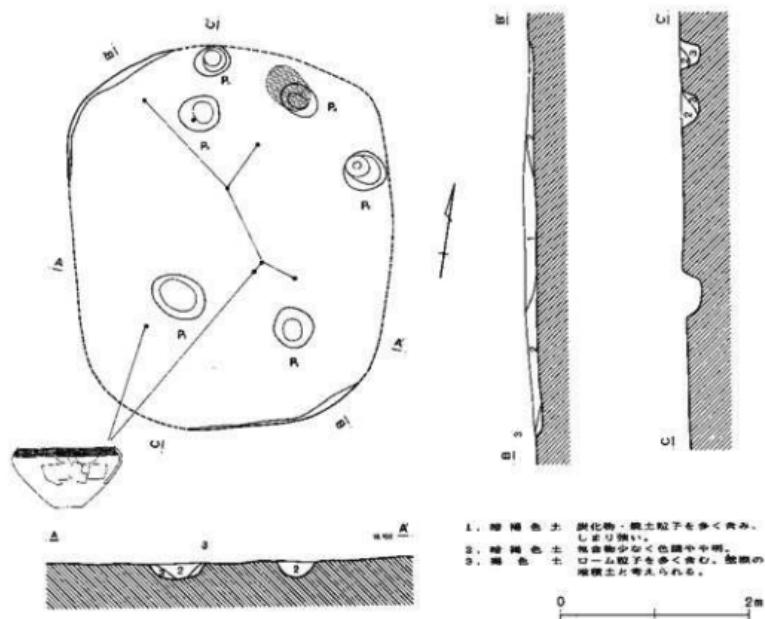
第3号住居跡出土土器（第8図）

本住居跡からは、器形復元が可能な大洞A式の鉢形土器が1点出土した。第7図で明らかなどおり出土状態は散漫であり、最終的に全ての破片が接合した。

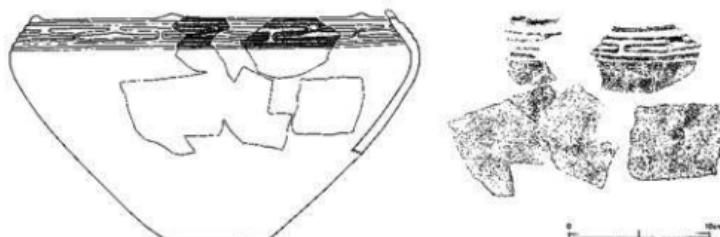
器形は胴上部が内折する鉢形土器であり、内折部上面に沈線で区画され、更に赤色塗彩された幅狭い文様帯を持つ。文様は、一単位毎に独立した工字文が沈線とヘラ状工具による印刻手法によっ

て作出され、各文様の連接部は低い突起となる。口唇は、2単位毎の文様間に小波状線を推定6単位に構成すると考えられる。整形は、外面が横～斜方向の丁寧なナデ、内面もナデ整形であるが外面に比較してやや粗い。色調は外面が灰黄褐色～灰褐色。内面が灰黄褐色で、黒斑をもつ。

法量は、口径26cm、最大径29cm、器高16cm、底径7cmと推定される。現存高は9.7cmである。



第7図 第3号住居跡



第8図 第3号住居跡出土土器

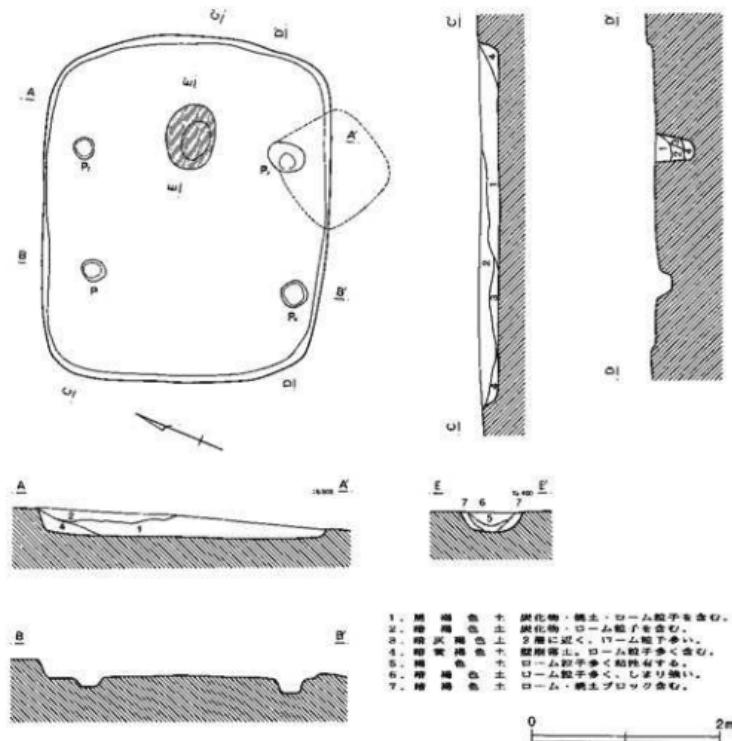
第4号住居跡（第9～11図）

本住居跡は、台地の南側E-4～5グリッドに位置し、台地の肩部から緩斜面部にかけて構築されている。長径3.6m×短径3.0mの隅丸長方形を呈し、南壁の一部が第10号土壌により破壊されている。

壁は垂直に近く掘り込まれ、北壁で19cm前後、東壁で最深部15cmを測るが、南～西壁にかけては壁が流失しているためか、検出状態が不良である。

柱穴はP1～P4まで、計4本が検出された。掘り込みはP3が確認面から約38cmを測るが、他はP1、P2、P4がそれぞれ6、7、12cmと浅く、必ずしも安定的とは言えない。先に述べた第1号住居跡とは逆の状況を呈している。また、P3は最下部に焼土がブロック状に堆積していたが、他にこのような状態は観察されない。

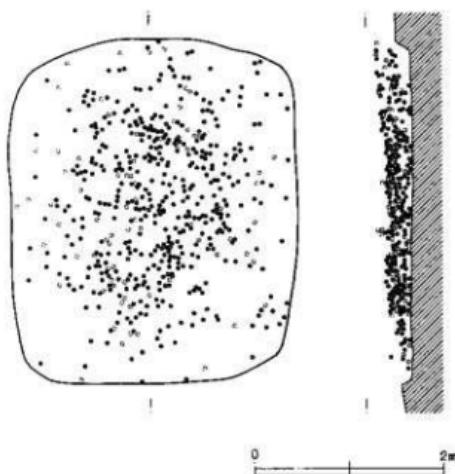
炉跡は第1・2号住居跡と同様に、主軸と東壁側の柱穴P2～P3を結ぶ交点上に構築されてい



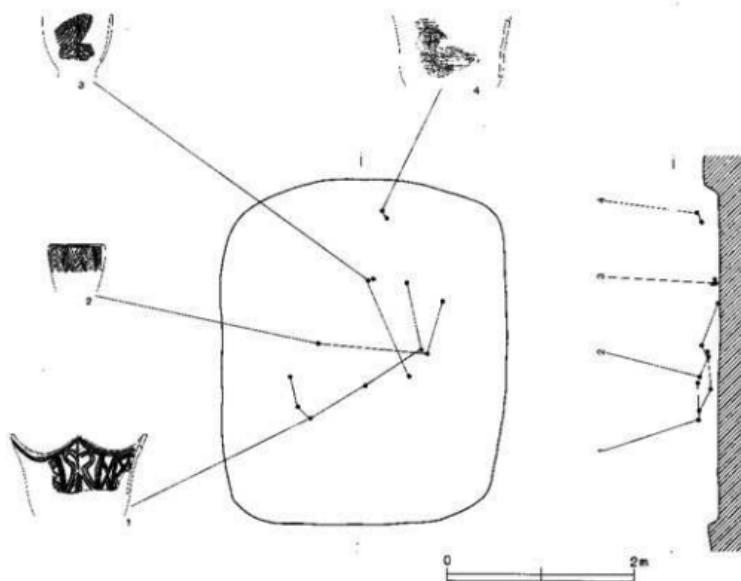
第9図 第4号住居跡

る。長径69cm×短径53cmの楕円形を呈し、深さは床面から23cmを測る。覆土は下部に焼土を主体とする堆積があり、底部近くで壁面が火熱を受け、一部が赤変している。

遺物は、火熱を受けた破碎礫を少量含み、多量の土器が出土している(第10図)。出土状態から遺物の多くは住居跡北～北東方向から流れ込むような出土状況を呈しており、中央部で集中し、壁際で散漫となっていることから、遺物の多くは、住居跡の廃絶後、周辺堆積がある程度進んだ状況で遺存したものと想定される。



第10図 第4号住居跡遺物分布図



第11図 第4号住居跡土器接合関係図

住居跡内からは器形復元可能な資料が4個体出土している(第11図)。いずれも遺物の分布が最も濃密な中央部から出土している。遺物の平面分布では、住居跡の中央部に集中する傾向が窺える垂直分布からは、遺物が住居跡の北～北東方向から流入したが多いことが窺える(第10図)。この傾向は器形復元された4個体の資料についても同様であると言えよう。

第4号住居跡出土土器(第12図～第15図)

本住居跡は検出された住居跡の中で最もまとまった資料が出土した。出土した資料は、縄文時代前期末に属する第V群土器であり、諸磯C式に比定される第1～2類土器にまとまりを持つ。

第V群1類(第13図5～36)

地文に条線文が施文される土器群である。施文の在り方によりさらにa～c種に文分類が可能である。

a種(第13図5～7、34)

器面横位に引かれた条線間に、鋸歯状の条線文が施文される土器群である。小破片のため、貼付文を有するか否か判断としないが、1を見る限りにおいては、鋸歯文との接点に半截竹管内面の刺突文が垂下しており、貼付文を有さないものと思われる。何れも文様帶は胴部一帯で、器形は口縁が弱い外反するものや、内湾する深鉢形土器である。施文構成は、諸磯b式の胴部文様そのものであるが、胎土・焼成・施工工具等の観察から、後述するb種との関連が強く窺えるため、本種を諸磯C式の範疇に含めた。

b種(第13図8)

地文に描出された矢羽状ないしは格子状の条線文上に、口唇部にハ状に、口唇下～胴部に縦位に細長い貼付文を有する資料である。本種に属する資料は1点のみで、他に検出例がない。貼付文の在り方は、後述する2類に近似する様相を示すといえる。

c種(第13図9～11、15)

口唇部横位の条線地上に、いわゆる結節浮線文(以下浮線文と記載)が縦位に貼付される土器群である。口唇部の浮線文は、地文の条線文の施文幅にほぼ等しい。口唇以下にも浮線文や刺突を有する円形貼付文が貼付される。口唇以下の地文が定かではないが、第13図35のような資料が想定されよう。

第13図13～14、16～33、35～36はc～d種に属する胴部破片である。浮線文は胴部中位辺りで、以下は地文のみである。胴部地文には、縦方向の綾杉状に施文されるものと、同一施文具を用いた同図35のように縦区画を有し、区画間に弧状等のモチーフが施文された2者がある。後者は本来の文様が地文に転化したものと考えられ、前者は、後者の区画線内に充填される要素が、単独で施文され、地文化したものと考えられ、系統変遷を異にしたものとも考えられる。後者の胴部文様は第2類土器に施文されることが多いようである。

第V群2類(第12図1、第13図37～第14図46～49)

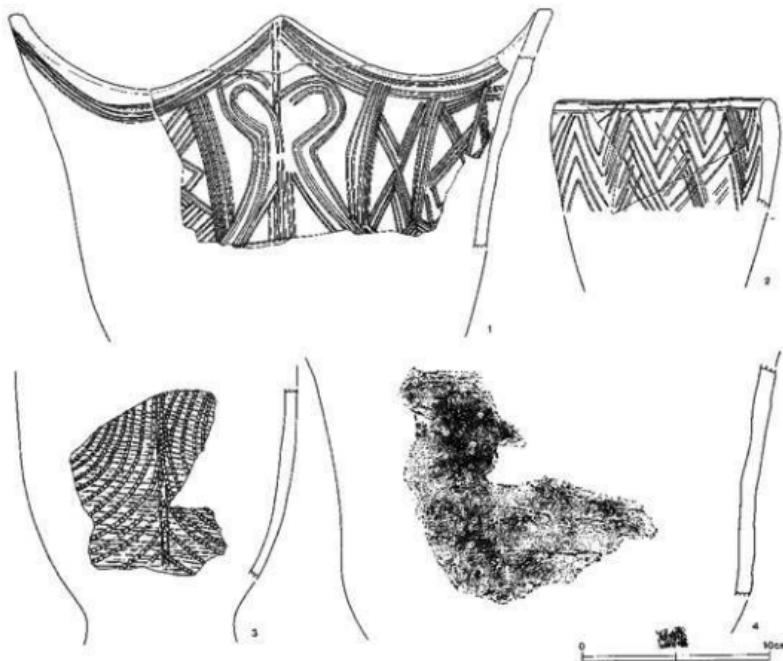
耳たぶ状あるいは棒状の貼付文を有する土器群である。本類は、口唇部及び口唇内面にかけて耳

たぶ状の比較的大きめな貼付文が、外面の口唇部から胴上半部にかけて断面三角ないしは蒲鉾状の棒状の貼付文が交互に位置している。胸部の詳細が不明瞭であるが、包含層出土土器（第26図2）には胴部に弱いくびれを有し、貼付文を有する資料がある。器形からみて、胴部がくびれるものと底部から外反気味に開くものとが存在するようである。口縁部には地文として半截ないしは多截竹管を用いた横位条線が施文される。胴部には第1類で指摘したようなモチーフが展開するものと思われるが、第14図47を例に取るまでもなく、第1類同様地文と文様との境界が微妙である。

第12図1は、本来胴部文様として描出される文様構成が、口縁部文様帶に描かれた資料である。第2群土器には、波状口縁が見られないのが通常である。本例は4単位の波状線であり、波頂部と波底部との差がさほど顕著ではなく、緩い波状線となっている。波状線は後述する第5類土器には顕著な特徴となり、口縁部・胴部文様帶に同種の意匠文（満巻文など）が展開する事例が知られている。本例も同様の経緯で成立した可能性が考慮され、第2類土器よりも時間的に後出の資料と考えられる。モチーフ描出に、部分的に結節沈線の手法が用いられており、あるいは、結節浮線文の要素を沈線で表現したためかと考えられる。推定口径29cm、現存高11cmを測る。

第V群4類（第12図2、第14図50）

格子目状あるいは縦位の矢羽状沈線文が施文された資料である。胎土・焼成は第V群2類と近似



第12図 第4号住居跡出土土器(1)

している比較的緻密な胎土で、接合跡が明瞭に残されている。施文具は、端部が鋭いヘラ状工具による単沈線で、やや細かな格子目文が施文されている。第12図2は器形復元された資料である。口唇が内湾する小型深鉢形土器である。描出されるモチーフは、第1類土器と同様であるが、沈線の描き方・胎土等から、第2類と同時期と考えられる。推定口径11cm、現存高6cmを測る。

第V群5類（第12図3）

結節浮線による渦巻状文を有する資料である。器形は口縁が強く開き、胴下部ですばり底部にいたる深鉢形土器である。地文には櫛状工具による条線を有する。文様の割り付けと思われる並行沈線が浮線文下に描かれている。

第V群8類（第14図51～67）

本類には、器形が波状縁と平縁を基調にしたものとに分類される。また両者では、胎土・色調めが異なる。前者をa種、後者をb種とした。

a種（第14図51～54）

推定4单位の波状口縁を呈する深鉢形土器である。51～53は同一個体であろう。口縁部文様帶には、波頂部を中心に円形ないしは渦巻状沈線文が対に描かれるものであろう。施文の中心部にはやや小ぶりな円形貼付文を有する。53には口縁部文様帶下端区画が描出されている。精選された胎土で、赤褐色を呈する。

b種（第14図55～67）

横位展開の矢羽状文や格子目状文が施文される資料である。胎土が緻密であり、金色を呈する雲母や石英粒を含み、1～4類とは明らかに異なる。55～57は同一個体と思われる。器形・文様帶区画の在り方が不明瞭だが、胴上部あるいは口縁部文様帶では横位展開の矢羽状文、胴下部あるいは胴部文様帶では細かな格子目状文が施文されるものと思われる。2個一対の円形貼付文を有するが第V群2類に比較して小ぶりである。型式学的に第V群1～2類よりも後出の様相を呈していると言えよう。55は折り返し口縁であり、半截竹管の連続押捺が加えられる。口唇形態・施文の在り方は、後述する第V群10類に近いものがある。

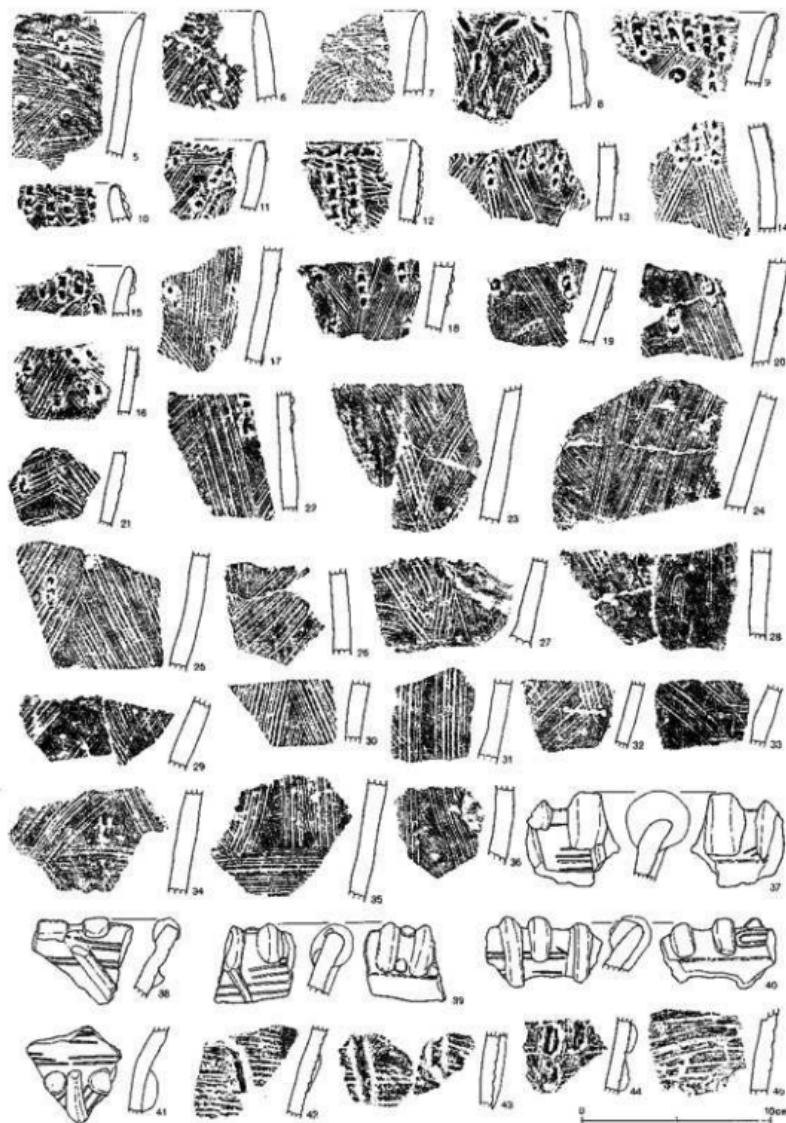
第V群9類（第14図68～70）

印刻を有する資料である。68は棒状区画を有する口唇下に印刻列を有する。口唇内面に粘土帶が貼付され突出する。69～70は胴部破片である。条線文による文様の連接部や空白部に印刻が施される。

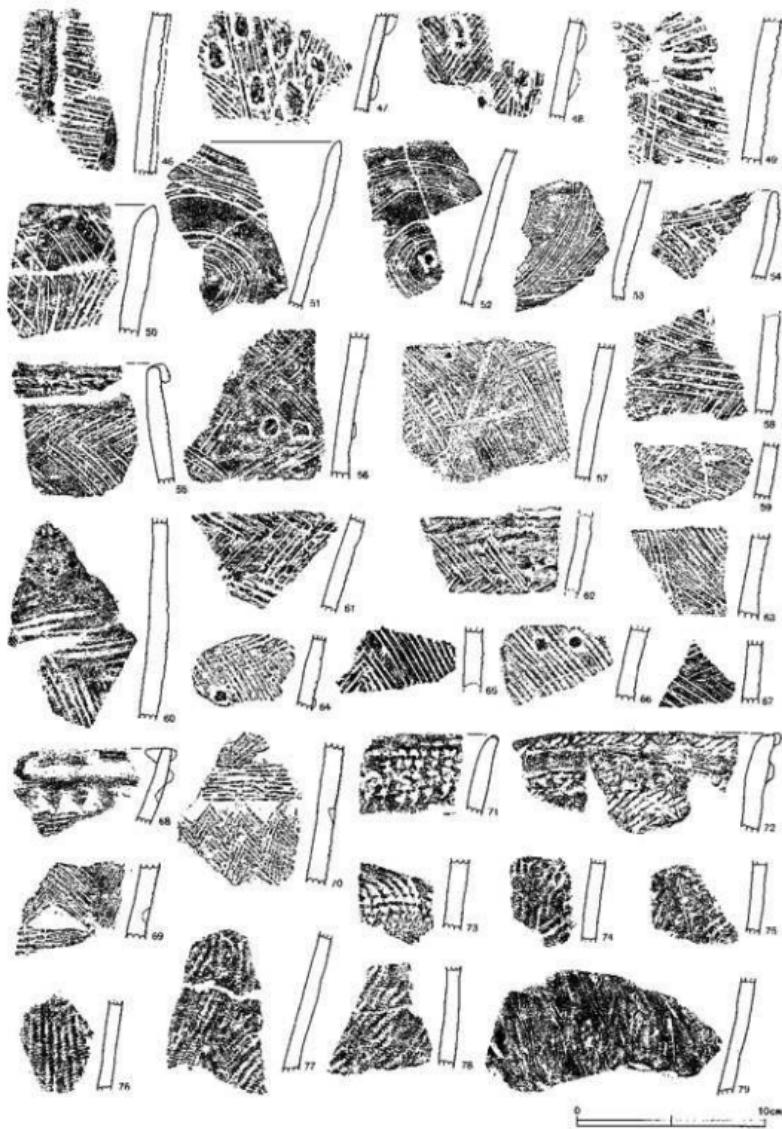
第V群10類（第14図71、73）

所謂「興津式土器」である。アナグラ属の貝殻腹縁による波状文施文を特徴とする。また、波状文と連続押捺文を組み合わせた資料も存在する。本類は、胎土に砂粒を多く含み、灰白色～灰褐色の色調を呈する点でほぼすべての資料が共通し、明らかに他類と異なった特徴を有している。

第V群11類（第14図72、74～78）



第13図 第4号住居跡出土土器(2)



第14図 第4号住居跡出土土器(3)

縄文が施文された資料を一括した。原体の種類により2分される。

a種 (第14図72)

無節斜縄文の資料である。口唇部に2段の隆帯を持つ深鉢形土器である。器面には原体しが施文されている。

b種 (第14図74~78)

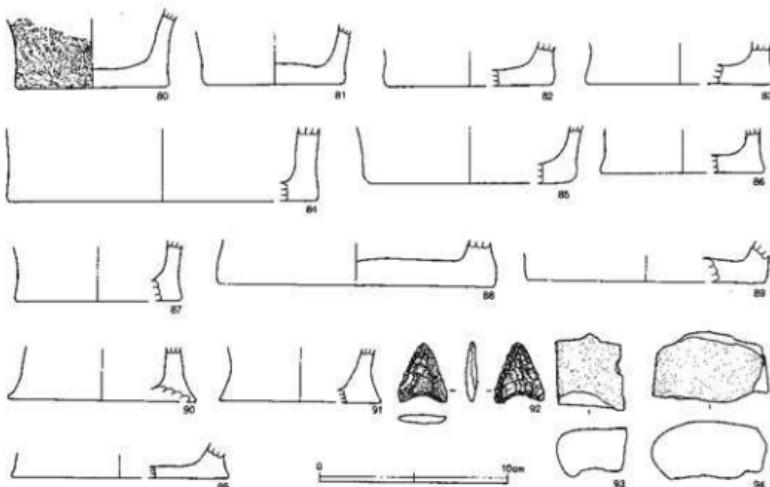
単節斜縄文の資料である。図示した資料は0段3条の原体が施文されており、同種の原体を施文する資料は、包含層中にもあまり例を見ないことから、第4号住居跡に特徴的な資料と言える。施文には72の如く、条方向が縱位や斜行するものがあり、縄文により沈線文様と同等の効果を図った可能性も考えられる。

第V群12類 (第12図4、第14図79)

無文の資料である。器面にはヘラ状工具による擦痕が明瞭である。第12図4は、横位にヘラ状工具による器面整形が施され、稜線状に整形痕を残した特徴的な資料である。推定最大径26cm、現存高12cを測る。

第V群13類 (第15図80~91)

底部を一括した。形態には底部から外反気味に立ち上がるもの、底部直上で内湾気味となるものがある。型式学上では前者から後者への変遷が想定される。75にはLRの縄文が施文されている。他は全て無文である。



第15図 第4号住居跡出土土器(4)・石器

第4号住居跡出土石器（第15図92～94）

石鎌（第15図92）

本住居跡からは1点出土した。黒曜石製で表面に自然面を残すが、裏面では周辺剥離も含め、剥離が丁寧である。

磨石（第15図93～94）

何れも欠損品である。共に現存部位では摩耗痕が観察される。

2. 土壙と出土遺物

在家遺跡からは、縄文時代に属すると考えられる土壙が22基検出された。土壙の分布は、馬の背状の舌状台地の中央部、僅かな平坦面に集中する傾向が窺える。土壙には、破碎された集石が充填された所謂「集石土壙」ないしは「集石炉」と呼称されるものも検出されているが、本項では一括して土壙として扱い、その都度説明を加えた。なお、各土壙の計測値は第1表に掲載した。

第1号土壙

C-2グリッドで検出された。全体に破碎された小砾を含む。小砾は土壙の覆土中位から上面に堆積し、斜面部に構築されたためか、流出した状況が窺える。覆土内には、焼土・炭化物等の顕著な堆積は観察されない。砾は火熱をうけて破碎されたと考えられ、赤変したものも存在する。

第2号土壙

B-2グリッド南西端で検出され、第1号土壙と隣接している。本土壙も第1号土壙と同様に、橢円形を呈する。覆土内には破碎砾が僅かに含まれるが、本土壙に伴うものではなく、他からの流れ込みであろう。遺物は出土していない。

第3号土壙

B-2グリッドで検出された。平面長橢円形を呈し、地形の傾斜に即して、東から西側へと傾斜をもつ断面形を呈する。掘り込みは極めて浅く、覆土も流出した形跡が窺える。本土壙からは、諸磯C式土器が少量検出された。

第4号土壙

C-3グリッドで検出された、縄文時代中期に属する土壙である。本土壙は、包含層上面において既に遺物が出土していたため、遺物分布を確認するとともに、遺構の精査に努めた。遺物は土器片のみで、重層するような出土状況を呈しており、遺物の取り上げ後にさらに精査を行い、土壙プランを検出した。土壙上面は包含層との識別が困難であった。確認された土壙は、橢円形で浅い掘り込みを有するに過ぎない。本土壙からは、第VII群（勝坂式終末）に属する土器が纏まっており、同一時期の所産と考えられる。勝坂式終末段階の様相を示す良好な一括資料と言えよう。出土土器に接合関係は窺えない。

第4号土壤出土土器（第18図20～30、第19図31～45）

出土土器は勝坂式終末期に限定されている。隆帯文を基調とする土器群、沈線文を基調とする土器群とに大別され、さらに文様帶・施文の相違により細分される。

第VII群1類a種（第18図20～25）

円筒形容の土器群であり、文様は隆帯で円形ないしは渦巻状の主文様に接して沈線が付随するほか、主文様間に沈線が充填施文される土器群である。隆帯上には刻みが加えられる。

第VII群1類b種（第18図26～27、30）

口縁部に隆帯による樹目状の区画文を有する土器群である。内面が「く」状に屈曲し、キャリバー形の器形を呈するものと思われる。隆帯は断面三角形を呈する。

第VII群1類C種（第18図28、第19図36～42）

地文に繩文を有する隆帯文の土器群である。隆帯両側に比較的幅広い沈線を有し、a種のように主文様間に充填が希薄である。隆帯上には刻みを有するもの、沈線が加えられるものがある。第19図39は横S状の隆帯文で、中央部に沈線が施文され、一部に交互刺突が加えられている。

第VIII群2類（第18図29、第19図31～35）

沈線文が施文される土器群である。何れも縦区画を基調としており、充填手法も希薄である。

第5号土壤

C-3～4グリッドで検出された。平面形は隅丸方形で、底面は概ね平坦である。掘り込みは浅く覆土も2層のみである。遺物は諸磧C式土器が少量出土している。

第5号土壤出土土器（第26図1～2）

共に胸部破片である。1は櫛歯状工具による縦位の矢羽状文、2は半截竹管による施文がなされている。前者は第V群1類に、後者は同群2類に該当しよう。

第6号土壤

D-4グリッド北西隅で検出された。平面精円形を呈し、掘り込みも浅く、覆土は暗褐色土一層のみである。遺物は十三墓菩提式土器が少量出土している。

第6号土壤出土土器（第18図7～10）

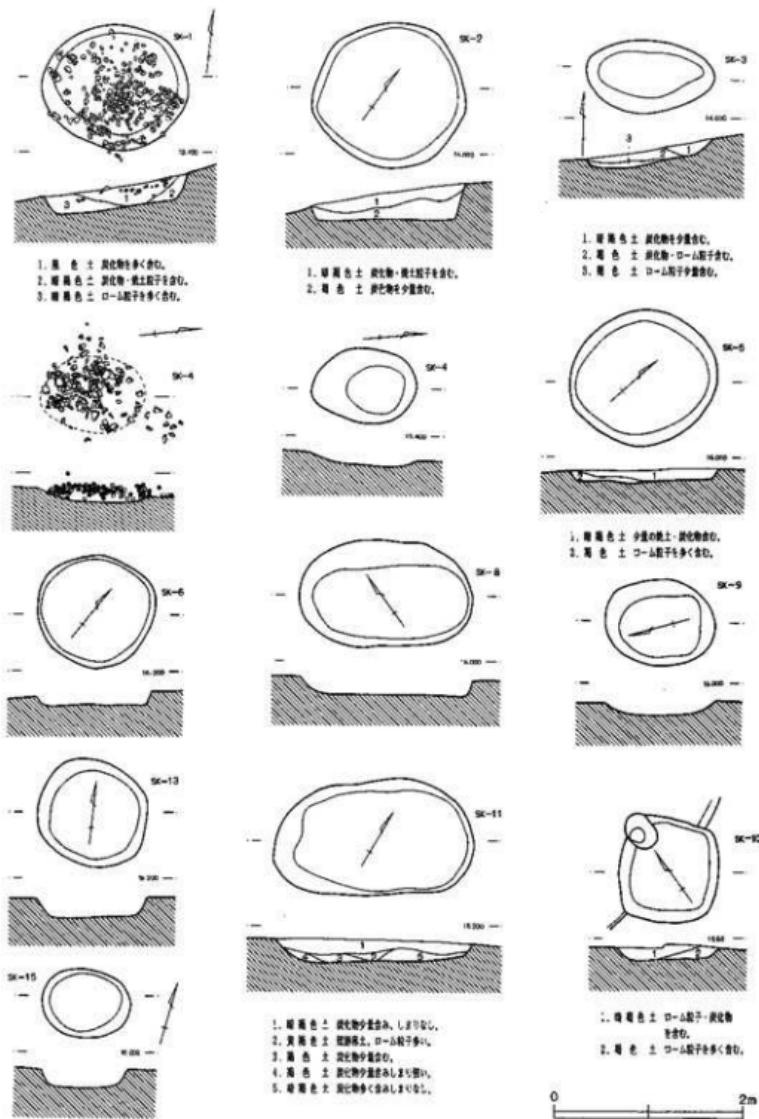
7～8は同一個体で、口縁部に鋸齒文を交互に施文した結節浮線文を有する。地文はない。第V群7類に相当する。9～10は繩文施文の資料で、9はRLとLRによる羽状繩文が施文されている。

第8号土壤

D-E-4グリッドで検出された。平面形は長梢円形を呈し、北～西壁側が緩く立ち上がる。底面は平坦である。遺物は磨石破片が一点出土したのみである。

第8号土壤出土石器（第18図6）

磨石破片である。両側面が面取り状を呈しており、表面中央部に弱い窪みを有する。



第16図 土壌実測図(1)

第9号土壙

D-4グリッド南東隅で検出された。平面橢円形を呈し、浅い皿状の掘り込みを有する。遺物は出土していない。

第10号土壙

E-4グリッドで検出された。本土壙は第4号住居跡の南壁と柱穴を破壊して構築されている。平面形が方形を呈し、底面は概ね平坦である。覆土からは諸磯C式の土器片が少量出土しているが本土壙に伴うものではなく、重複関係にある住居跡覆土からの流れ込みであろう。

第11号土壙

D-5グリッド北西隅で検出された。平面形が長楕円形を呈し、掘り込みもやや深く覆土も安定している本土壙からは、諸磯C式土器が少量出土した。

第11号土壙出土土器（第18図3～5）

本土壙から出土した土器は全て第V群に属し、3が同群2類、4が10類、5が11類に属する。4は文様がアナグラ属の貝殻压痕により、描出されている。5は縄文地上に結節沈線文を有する。

第12号土壙

D-5グリッドで検出された。本土壙周囲には、第13～17号土壙が近接している。平面橢円形を呈し、底面は西側に緩く傾斜する。掘り込みがやや深く覆土も安定している。遺物は第V群土器が少量出土した。

第12号土壙出土土器（第18図11～14）

第V群土器で構成され、13～14が同群1～2類、他は同群11類である。11は羽状縄文が施文されている。

第13号土壙

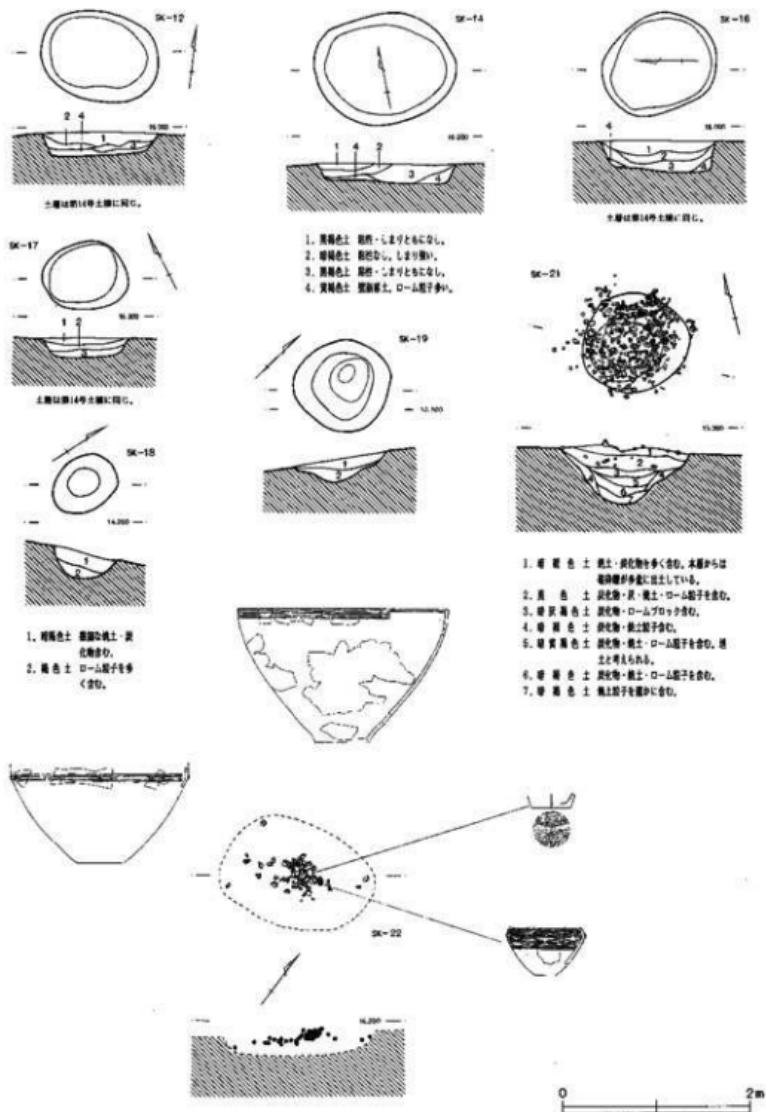
D-5グリッドで検出された。平面橢円形を呈し、覆土は暗褐色土一層のみである。遺物は出土していない。

第14号土壙

D-5グリッドで検出された。平面橢円形を呈し、底面は概ね平坦で垂直に近い立ち上がりを有する。掘り込みがやや深く覆土も安定している。覆土内からは第VI群（五領ヶ台式）土器が出土している。

第14号土壙出土土器（第18図15～17）

結節を有する縄文施文の土器である。胎土に霞母粒を含み、五領ヶ台式の胸部であろう。原体は15・17がLR、16がRLである。



第17図 土壤実測図(2)

第15号土壙

D-5グリッドで検出された。平面橢円形を呈し、底面は概ね平坦で垂直に近い立ち上がりを有する。覆土は暗褐色土一層のみである。遺物は出土していない。

第16号土壙

D-5グリッドで検出された。平面橢円形を呈し、底面は中央部でやや深くなる。垂直に近い立ち上がりを有し、覆土は安定した自然堆積の状態を呈している。本土壙からは第VI群土器が少量出土している。

第16号土壙出土土器（第18図18）

18は縄文地上に半截竹管による幾何学的な文様が描かれる。

第17号土壙

D-5グリッド南東隅で検出された。平面橢円形を呈し、覆土は安定した自然堆積の状態を呈している。遺物は出土していない。

第18号土壙

B-5グリッド南西隅・北側急斜面に位置し、第19号土壙と近接している。平面橢円形を呈する小型の土壙である。

第18号土壙出土土器（第18図19）

19は口唇下に、隆帯が貼付され、下部から刺突が加えられている。前期最末に属するものと思われる。

第19号土壙

B-6グリッド南西隅で検出された。平面橢円形を呈し、中央部で一段の窪みを有する。遺物は出土していない。

第20号土壙

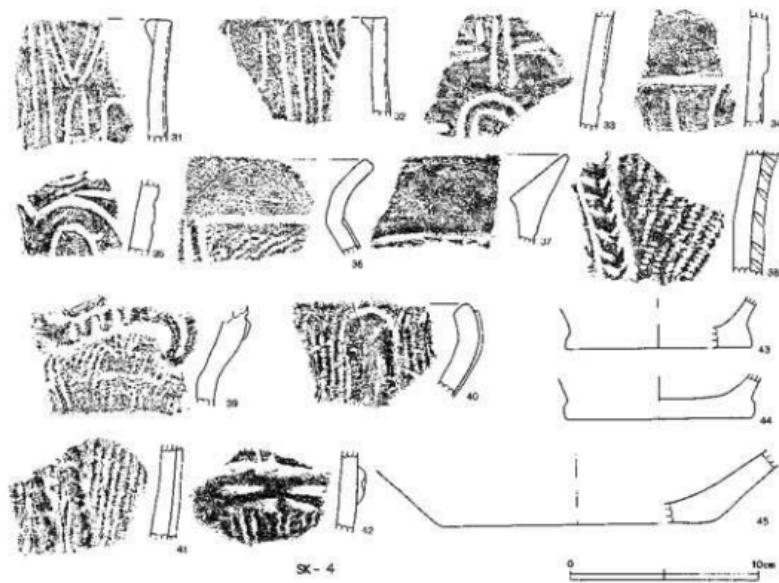
B-C-3グリッドで検出された。本土壙は第6号炉穴を破壊して構築された集石土壙である。土層観察から、平面形態が橢円形を呈していたものと想定される。集石は火熱を受けた破碎砾であり、覆土上面に堆積していた。覆土には焼土・炭化物等は含まれていない。

第21号土壙

本土壙は、第2号住居跡の地床炉の直上に構築された集石土壙である。第2号住居跡の廃絶後に床面上に覆土が浅く堆積した状況において、本土壙が構築されたものと推定される。覆土第6～7層は炉跡に伴うものであり、第5層にはローム粒・ロームブロックが多く含まれることから、土壙の構築に先立ち、埋土が行われた可能性がある。覆土第1層に多量の砾が含まれており、いずれも火熱をうけて破碎されていた。覆土も他の集石土壙と異なり、多量の炭化物が含まれており、集石



第18図 土壤出土土器・石器(1)



第19図 土壌出土器(2)

炉の可能性が考えられる。疊以外に、諸磯C式土器が僅かに含まれていた程度であり、時期決定し難い。なお、本土壌の覆土第2・3層を脂肪酸分析・プラントオパール分析に共した。分析結果は、第VI章に掲載した。

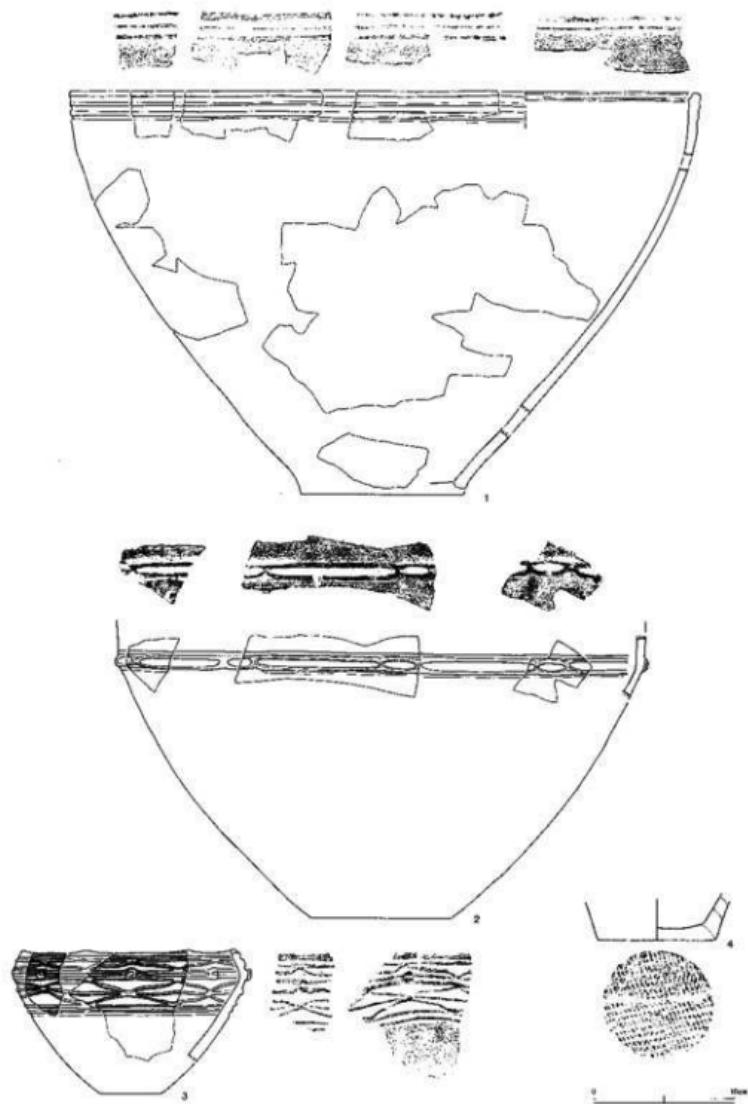
第22号土壌

本土壌はE-3グリッドにおいて検出された。包含層の調査中に、大洞A式土器が出土したため土器の分布を確認したところ、土器は長径1.6m×短径0.6mの範囲に限定して出土することが明らかとなった。土器は水平・垂直分布ともに集中する傾向が窺える。従って、土器群は土壌に伴って遺存していたものと判断した。土器の取り上げ後に、造構の精査を実施したが、ローム面で造構の痕跡を確認することはできなかった。土器が含まれていた土層は、縄文時代前期の包含層であり、土質に差異を認めることはできなかったが、造構は包含層中に形成されていたものと考えられる。

出土土器は大型鉢形土器2個体、小型鉢形土器1個体、壺形土器と思われる底部破片の計4個体からなり、何れも器形が全周するものはない。

第22号出土器（第20図）

第20図2は鉢形土器と考えられる。口縁部は比較的幅の広い無文帶を有し、口唇び文様帶を有する可能性もある。現存部は肩部のみで、粘土帯を貼付し、中央部に沈線が加えられた長短の枠状文を有する。枠状文の接点は、やや隆起する。砂粒を少量含むが、極めて精選された胎土である。器内外面には、共にヘラ状工具による丁寧な整形が施されている。色調は、外面が暗灰褐色～灰褐色を



第20図 土壌出土土器(3)

呈し炭化物が付着した部分が観察される。内面は灰褐色で、黒斑を有している。推定口径37cmを測る。

同図1は2よりも一周り大きめの鉢形土器である。文様は口唇部に限られ、三状の浅い沈線が横走する。内面にも一状の浅い沈線が横走し、沈線下に断面三角形の稜をもつ。胎土は砂粒を多く含むが精選されている。色調は外面が灰黄褐色、内面が灰褐色で黒斑を有する。整形は内外面共にヘラ状工具によるミガキが施されている。法量は推定で、口径45cm、器高28cm、底径12cmである。

同図3は、浮線網状文を有する小型鉢形土器である。口縁部文様帶上半で内折し、この部分に小突起を有する隆帯文を配することにより文様帶を上下に分割している。口唇部には器面に配された突起と交互に8単位の山形小突起を有する。文様は、印刻手法により作出された浮線網状文であり、極めて精緻な作りである。文様帶には赤色塗彩が施されている。胎土は砂粒を含むが精選されている色調は外面黒色、内面暗褐色である。整形は内外面ともミガキが施されている。法量は推定で、口径18cm、最大径20cm、器高10cmである。なお、現存高は7.7cmである。

同図4は底部破片である。器厚は1.5cmと厚く、接合部で破損している。網代痕が明瞭に残されている。胎土は砂粒を含むが精選されている。色調は灰黄褐色を呈する。底径8.3cm、現存高3.9cmを測る。

第1表 土壙一覧表

番号	掲載図	グリッド	規 模	長軸方向	備 考
1	16	C-1~2	153 × 133	—	覆土上面に破碎砾が集中
2	16	B~C-1~2	156 × 155	—	
3	16	B-2	150 × 75	N-95°-W	
4	16	C--3	110 × 76	N-7°-E	縄文中期の土器片が充填。底部のみの形状
5	16	C-3	158 × 146	—	
6	16	D-4	122 × 118	—	
7	42	D-4	154 × 118	N-63°-E	中世の土壤。片口鉢と古錢が出土
8	16	D-4	184 × 113	N-53°-W	
9	16	D-4	120 × 95	N-16°-E	
10	16	E-4	108 × 106	—	
11	16	D-5	212 × 128	N-60°-E	
12	17	D-5	126 × 96	N-83°-E	
13	16	D-5	124 × 112	—	
14	17	D-5	150 × 120	N-82°-W	
15	16	D-5	92 × 72	N-82°-E	
16	17	D--5	126 × 103	N-35°-W	
17	17	D-5	95 × 74	—	
18	17	B-6	72 × 59	—	
19	17	B-5	104 × 98	—	
20	21	C-3	80 × 70	—	
21	17	D--3	106 × 100	—	破碎砾が充填。集中炉か
22	17	D~E-3	160 × 112	N-78°-E	形状は推定

3. 炉穴

在家遺跡からは、総数7基の縄文時代早期に属する炉穴が検出された。台地の南斜面部に集中する傾向が窺える。第1号～5号炉穴はE-4グリッドに位置している。

第1号炉穴

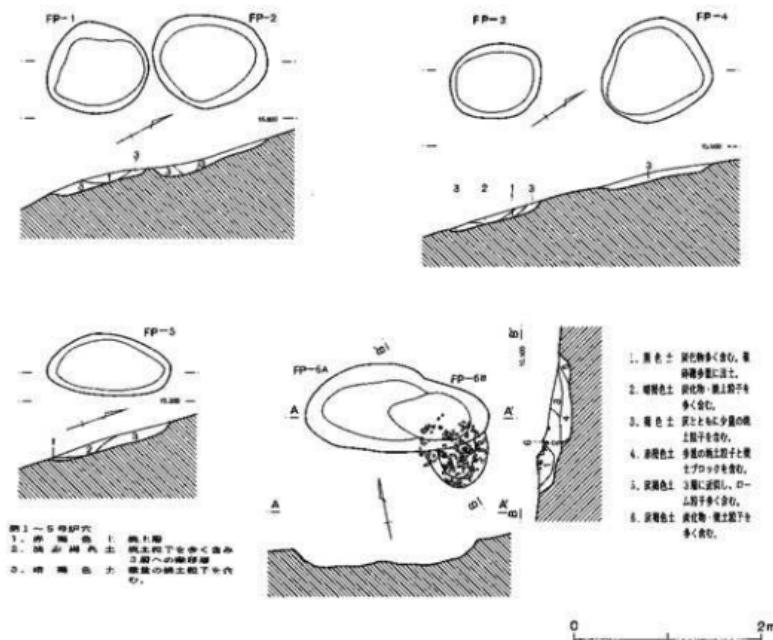
面形は不整橢円形を呈し、南端部に焼土の分布が確認された。全体に浅い掘り込みである。遺物は出土していない。

第2・3号炉穴

近接して検出された。平面形は共に不整橢円形を呈し、第3号炉穴がやや大型である。第3号炉穴は、南半部で緩く落ち込んでいる。共に遺物は出土していない。

第4・5号炉穴

共に南北に近接している。平面形態は4号炉穴が隔丸方形に近く、5号は不整橢円形を呈する。



第21図 炉穴実測図

掘り込みが極めて浅く、4号炉穴で、中央部に少量の焼土堆積が認められた。共に遺物は出土していない。

第6a・6b号炉穴

B-3グリッドで検出された。2基の重複からなり、6a号を切って6b号炉穴が構築されている。共に平面楕円形を呈し、底面には弱い段をもつ。焼土の堆積は6b号炉穴で顕著である。共に、遺物は出土していない。

第2表 炉跡一覧表

番号	掲載図	グリッド	規 模	長軸方向	備 考
1	21	E-4	110 × 108	—	1、2号炉穴は近接
2	21	E-4	123 × 100	N-33°-E	
3	21	E-4	97 × 78	N-30°-E	3、4号炉穴は近接
4	21	E-4	116 × 104	—	
5	21	E-4	142 × 63	N-28°-E	
6	21	B-3	195 × 92	N-78°-W	2基の重複。20号土壙に一部が破壊されている

4. グリッド出土遺物

土 器

在家遺跡では、調査が台地の先端部に限定されていたにもかかわらず、包含層からは、縄文時代早期を始めとして、遺跡の中心となる前期末さらに晩期にいたる多彩な資料が出土した。本項では各時代の遺物についてその詳細に触れることとする。なお、土器群の分類については、凡例において触れているので参照願いたい。

第I群土器（第23図1～13）

燃糸文土器である。本群は台地の略平坦部から緩斜面部にかけて散漫な分布を示しており、特に集中する傾向は窺えない。1は口唇下部に指頭による押圧が加えられ、口唇上が面取りされ、縄文が横走施文されている。2の口唇部は肥厚せず緩く外反する。胴部施文は8が無筋Rによる縦走施文、13が右傾する絹状体と縦走縄文が併施文される。他は全て縄文による縦走施文である。全体に灰白色を呈し、砂粒を多く含んでいる。

第II群土器（第23図14～18）

沈線文を本群とした。14～15、17は同一個体である。右傾・縦走する鋭い並行沈線によ文様描出される。口唇部は内削ぎ状を呈している。15、18はヘラ状工具により右傾する沈線が描出されている。17は、或いは15の胴下部に相当するものかも知れない。

第III群上器(第22図、第23図19~36、第24図37~55)

条痕文系土器を本群とした。本土器群は台地中央部から緩斜面部(B~D-3、E-4グリッド)においてまとまりを示している(第22図)。土器の分布状況は炉穴の集中区と同一であり、他区での分布が極めて散漫である点は興味深い。従って、炉穴の時期も本群土器と重複するものであろう。

出土土器は、条痕文のみが施文されるもの(1類)と、微隆起線と沈線が組み合わされたもの(2類)とがある。1類は口唇が内削ぎ状を呈し、第23図19の如く、やや凹線状を呈するものがある。条痕は胴上半部で横走ないしは右傾し、第24図42、45のごとく、胴下部から底部にかけては、内面では縦走施文された資料が観察される。

2類は第23図20、22のごとく、口縁部文様帯が屈曲部を挟んで、2段に構成されている。文様帯区画と主幹文様が微隆起線で描出され、接点に円形刺突が加えられる。主幹文様間の充填には、比較的幅広く浅い沈線が施文されている。全て少量の纖維を含むが、焼成は良好で堅緻である。野島式木~鶴ヶ島台式初頭に比定されよう。

第IV群土器(第24図56~61)

前期前半から中葉までの資料を本群に一括した。時期的にさらに分類され、1類は黒浜式に、2類は諸磯a~b式に比定される。

1類(第24図57~60)

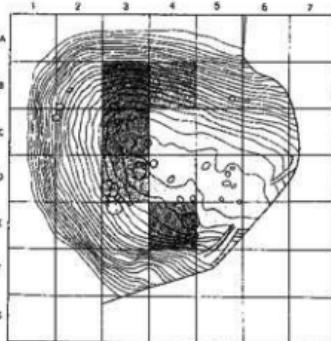
全て纖維含有の土器群である。57はRLとLRの原体により羽状施文される。58~60は単方向施文である。施文原体は全て0段3条である。

2a類(第24図56)

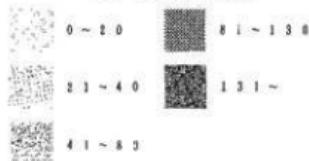
並行沈線間に同一施文具により爪形文が施文される資料である。地文には浅くまばらな縄文RLが施文されている。纖維は含まない。

2b類(第24図61)

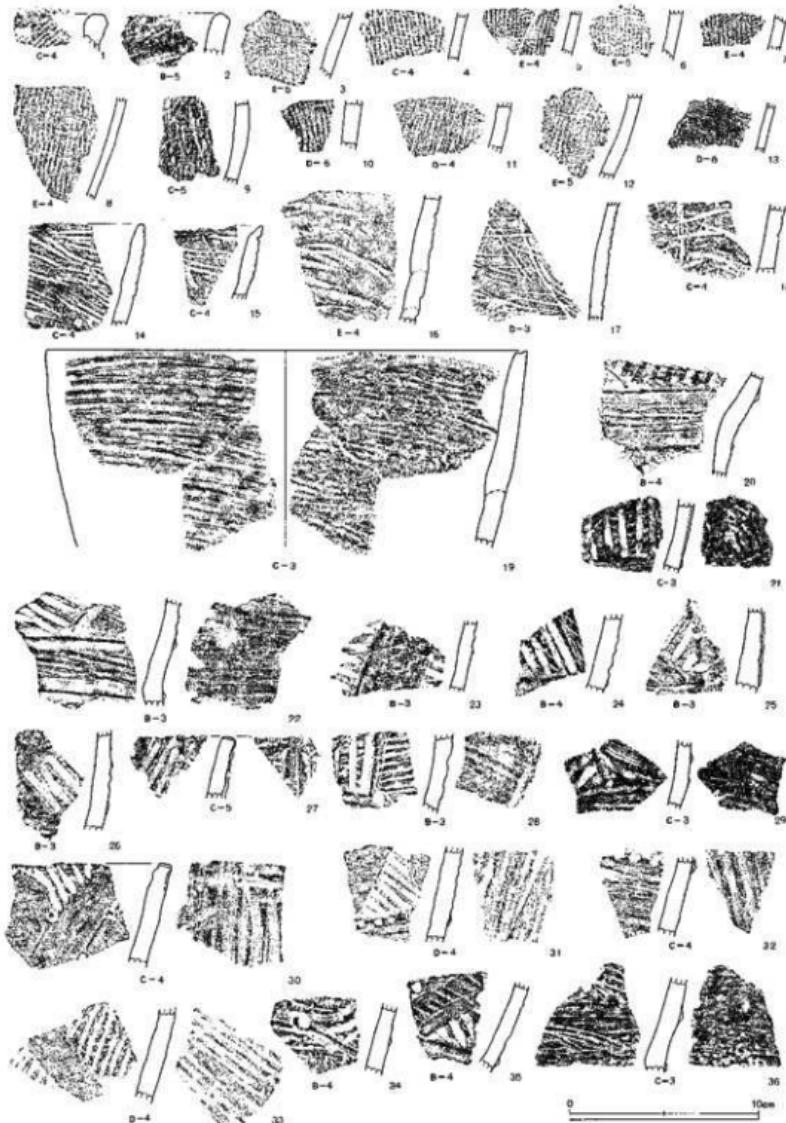
浮線文の資料である。器面の色調が淡褐色であるのに対し、浮線は灰白色を呈し、際立った差異を示している。また、胎土も器側面には砂粒が多く含まれるのに対し、浮線は精選された粘土を用いており、当初から意図的に色調の差異を狙ったものと考えられる。浮線は棒状の粘土紐の貼付による。器面にはRL縄文が施文されている。



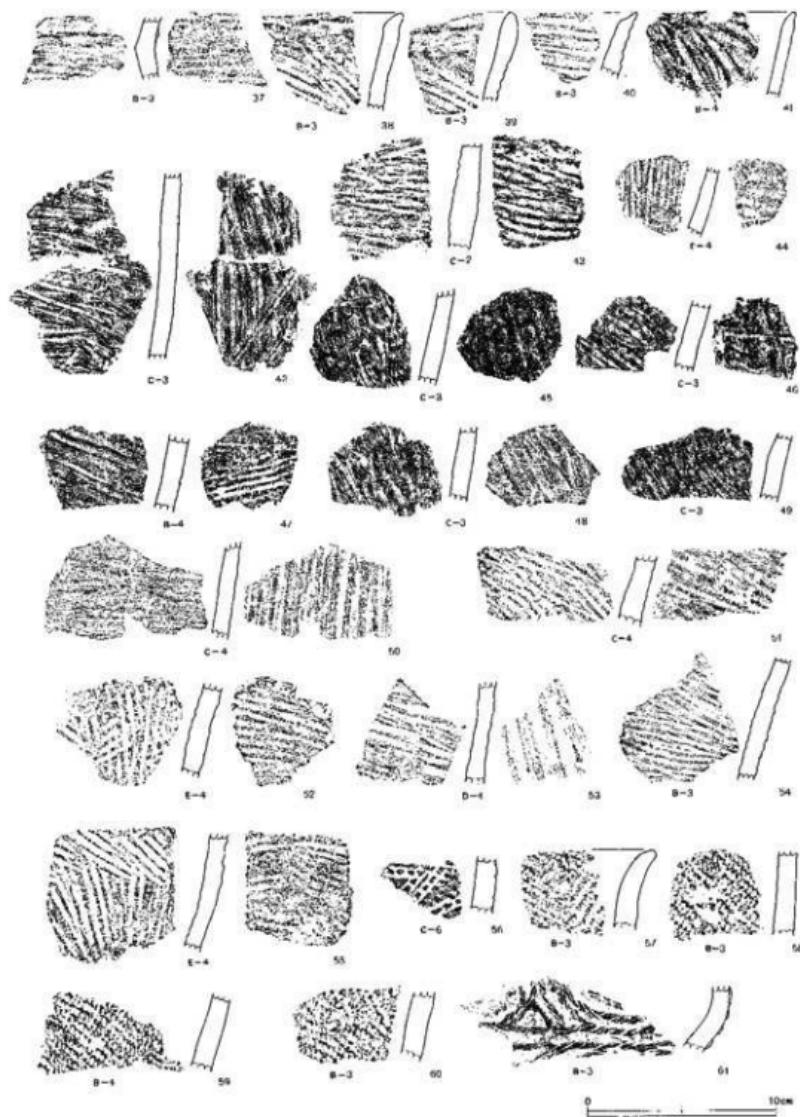
第II群(条痕文系)上器分布



第22図 条痕文系土器分布図



第23図 グリッド出土土器（早前期1）



第24図 グリッド出土土器（早前期2）

第V群土器（第25図～第35図）

本群は、在家遺跡の主体をなす土器群であり、遺構内及び包含層から最もまとまった出土状態を呈している。第V群土器の分布状態を第25図に示した。全体の出土状況は、台地の平坦部で最も濃密であり、主に遺構が検出された台地の肩部から斜面部にかけて、暫時分布が希薄となっている。また、台地の南斜面部において分布が濃密であり、西～北斜面部では土器の出土が極めて希薄で、この傾向は遺構の分布とも重複する。なお、土器の記載に関して、分類可能な底部は、各類ごとに提示し、分類が不明瞭なものについては、最後に13類として一括提示した。

第V群1類（第26図1、第27図～第28図）

第1類土器は、地文に主に条線が多用される土器群である。施文の特徴により、a～h類まで8分類が可能である。包含層からはa種を除く各種が出土した。

b種（第27図9～10）

口唇部に小型の貼付文を有する土器群である。9は2個一对の貼付文である。貼付文は1では口唇部から横位の沈線間に限定されている。10は1に比較し、やや長めである。何れの貼付文も幅狭で、断面三角形を呈する。

c種（第27図12）

口唇にハ状に、以下に縦長の貼付文を有する土器である。貼付文はb種のそれに形態が近く小型である。本種は、他に第4号住居跡で1例出土したのみである。

d種（第26図1、27図11、13～29）

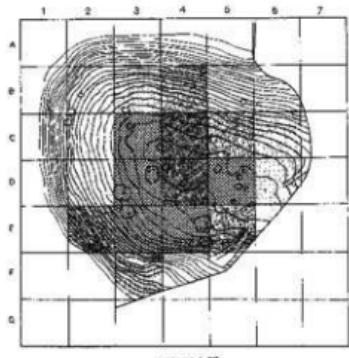
条線地上に結節浮線文（以下浮線文と記載）が貼付された土器群である。浮線文の構成は、口唇部の地文条線に規制された幅狭い部分と、胴部とになり、口唇部では、横方向に貼付されたものと、縦位に貼付されたものがある。概して浮線文の幅が広めで、19～20を除き浮線上に加えられる結節は、浮線文の幅を超えないものが多いようである。器形は、11、13～26が口縁が内湾し、胴部に最大径をもつ深鉢型土器である。25は弱い波状口縁を呈している。第26図1、第27図27～30は口唇下で強く外半する深鉢型土器である。第26図1は器形復元された資料で、法量は推定で、口径10.5cm、最大径11cm、現存高11.5cmを測る。口唇上にも浮線文を有し、小波状を呈するが如くである。

e種（第27図41）

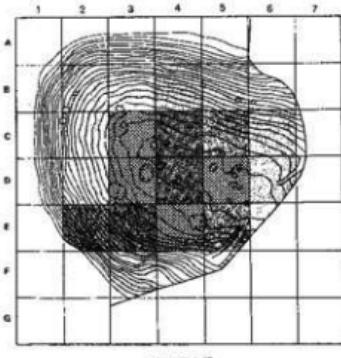
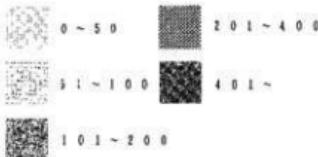
円形貼付文を要素として持つ土器である。口唇部に貼付される縦位の浮線文は、地文である横位の条線文幅に等しく、d種と後述するf種との中間的な様相である。また、縦位の貼付文が文様帶としての区画をなさない点は、d種に近い要素と言えよう。口唇部の縦位浮線文は密接して貼付され、結節の状態もd種と同様である。円形貼付文は口唇下にあり、胴部の浮線文の端部に1～2条おきに交互に貼付されている。貼付文上には刺突が加えられている。

f種（第27図30～40）

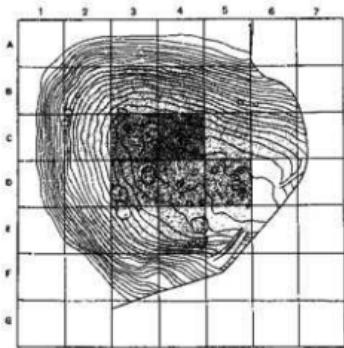
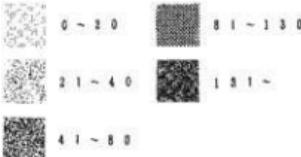
口唇部の地文条線文が幅広く、その上に貼付される浮線文は斜行し、鋸歯状のモチーフを構成している。同様のモチーフはd種にも存在するが、幅広い地文の有無で明瞭な相違が認められる。口唇上に貼付された粘土紐上にも結節が施され、小波状を呈している。30、32、40は同一個体と思われる。34～35、37～39は器形屈曲部に横位の条線や浮線文を有し、口縁部文様帶を構成している。



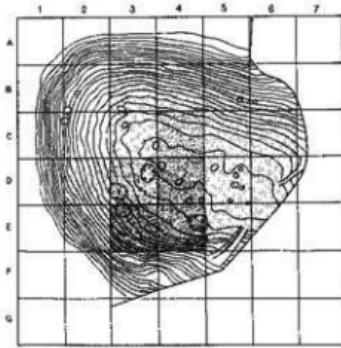
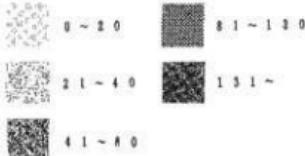
第V群土器



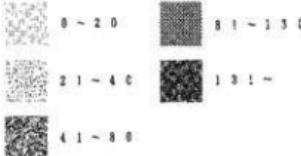
第1群土器



第2群土器



第7群土器



第25図 グリッド出土第V群土器分布図

或いは、時間的により後続する段階の資料と考えられる。他の資料は直線的に開く深鉢型土器であり、文様帯構成をもたないものとであろう。

g種（第27図42～43）

器面に断面三角形の小型の貼付文を有する資料である。器形は口唇が直立ないしはやや外反する深鉢形土器である。地文条線文は口唇部の幅が狭く、構成はd、e種に近いものがある。また、貼付文の構成は後述する第2類にも近似していると言える。

h種（第27図44～第28図54～56）

浮線文や貼付文を持たず、条線文のみで文様構成される土器群である。この場合、条線文は地文ではなく、主文様としての効果を有している。文様構成は口唇部に横位の条線を有するものと、口唇から矢羽条のモチーフが描かれるものがある。前者の文様構成は、特にd～e種の地文として描出される条線文に等しい。55には円形貼付文がある。器形は口唇が弱い外反ないしは内湾する深鉢型土器である。条線文は丁寧に施文されたものが多い。

第28図57～97は1類土器の胴部破片である。施文の状態から、58～84は1類d種に該当するものと思われる。85～86は1類g種に相当するものであろう。87～97は1類h種に相当する胴部破片であろう。

第V群2類（第26図2、第29図～第30図130～164）

棒状や耳たぶ状の貼付文を有する土器群である。本類は施文の形態によりa～fに分類される。

a種（第29図98～110、112、114～115）

幅広い口縁部文様帶を有し、多くは口唇内面が肥厚し、この部分も文様帶を構成している。便宜上、器面の文様帶を1b帶、口唇内面の文様帶を1a帶としておく。1b帶は地文に横位の条線ないしは半割竹管文を有し、その上に断面三角形ないしは薄鉢形の懸垂隆帶を貼付している。多くは器外面口唇部から内面1a帶にかけて扁平で幅広の貼付文が交互に位置し、103～106のように円形貼付文を有するものも存在する。1a帶は地文として斜行沈線が施文されることが一般的である。102、115は屈曲部を有し、胴部文様帶を構成しているが、104のように底部から外反気味に開く深鉢型土器が多いようである。

b種（第29図111）

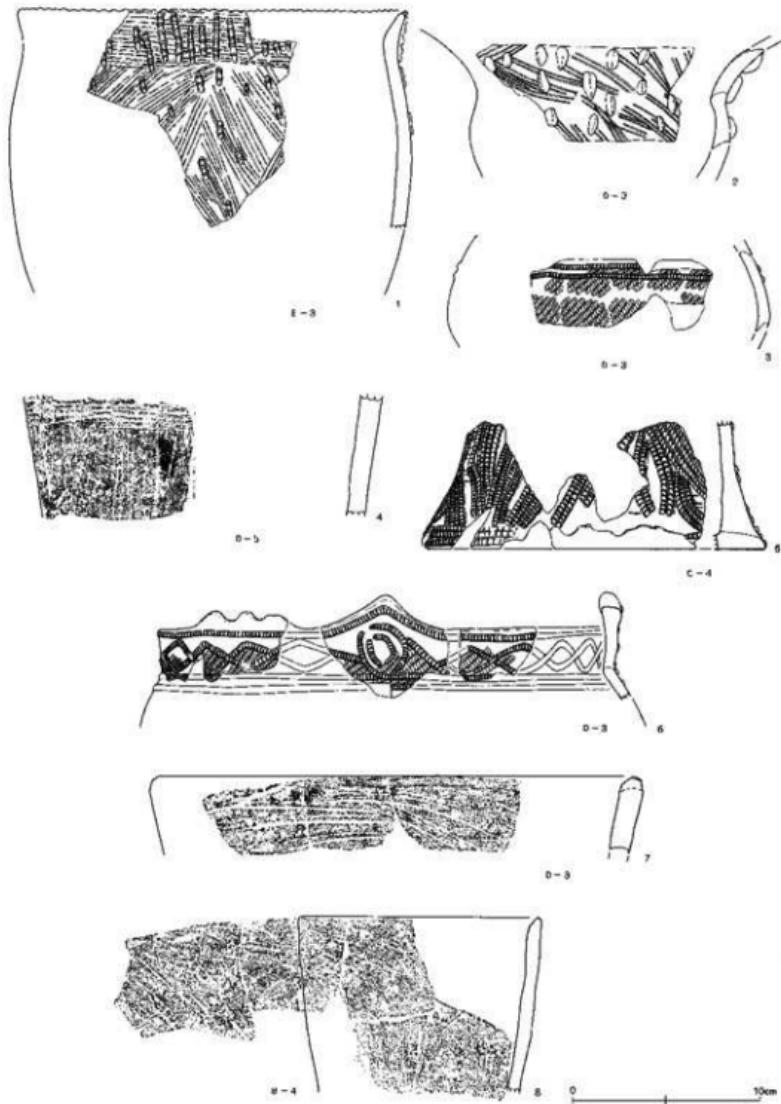
構成はa種に近似するが1a帶を持たず、器外面の懸垂隆帶に代わり、並行沈線が垂下する資料である。口唇上に比較的小型の貼付文を有する。本例のみの出土である。

c種（第29図113）

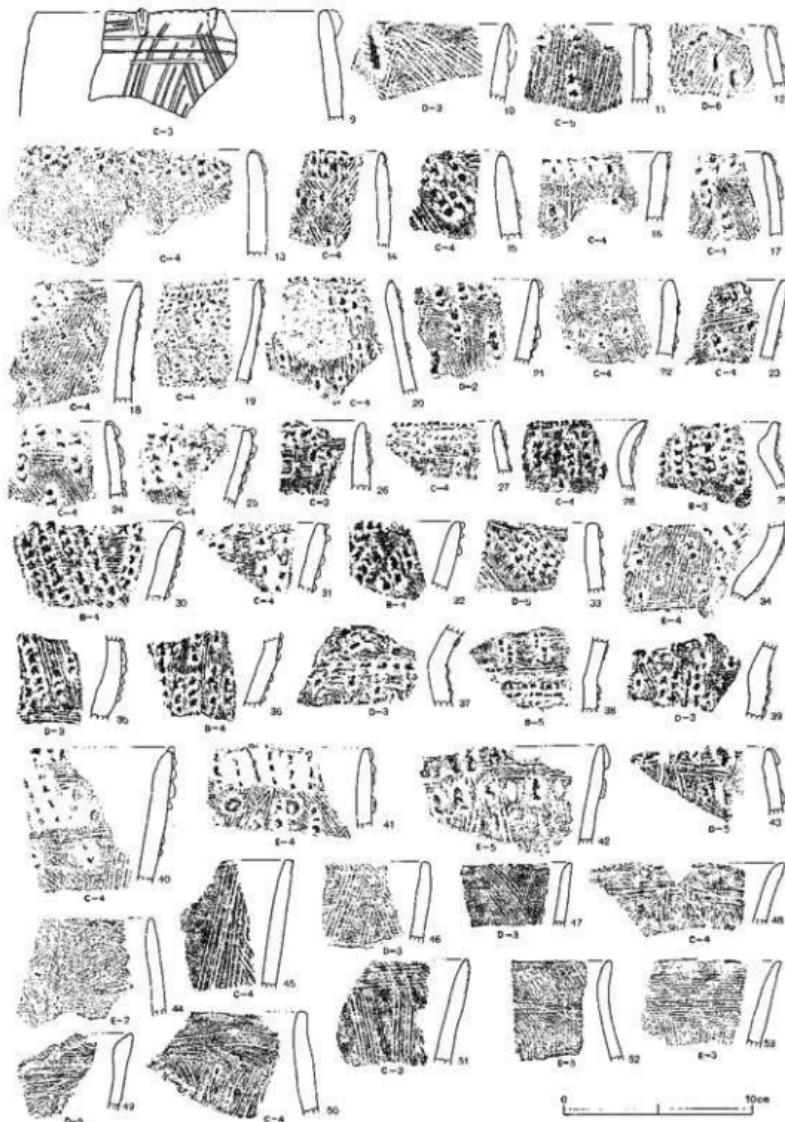
器面に2本一対の隆帶が垂下する資料である。断面形が内湾気味であり、地文が傾斜していることから、或いは波状口縁を呈するものかもしれない。隆帶は断面三角形であり、半割竹管により結節状に表現されている。時期的に下降する可能性も考えられる。

d種（第26図2、第29図116～119）

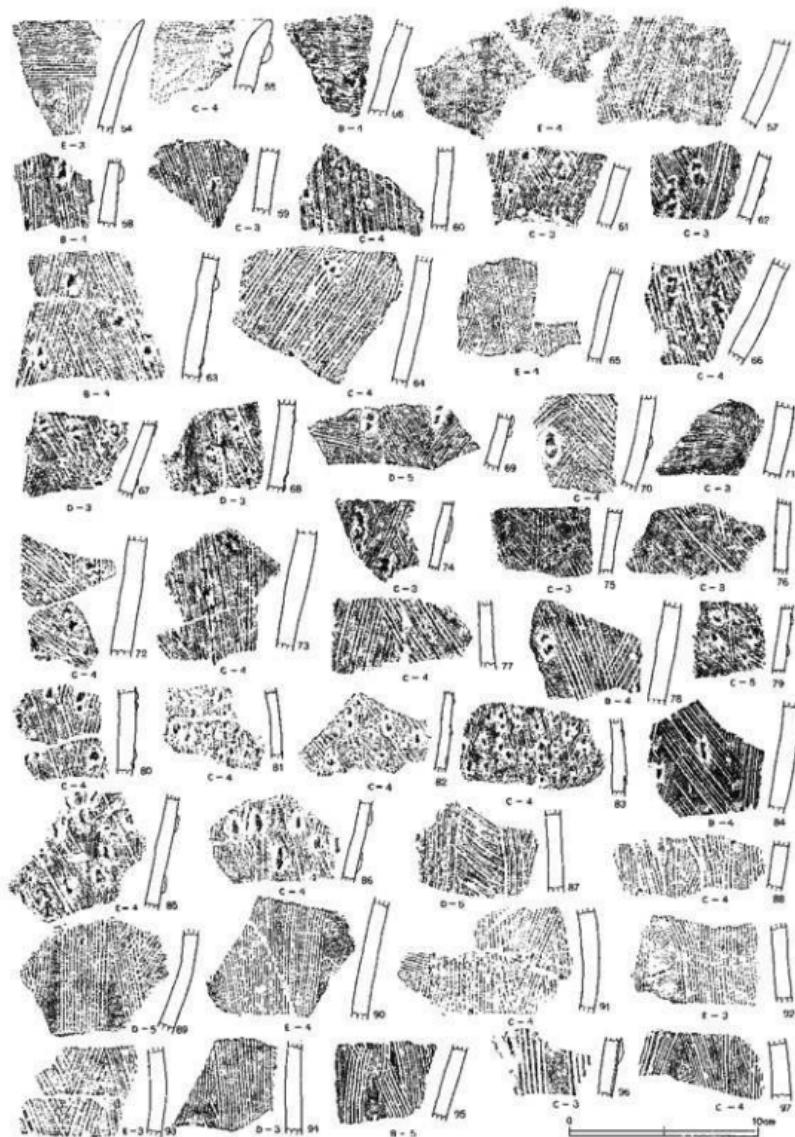
器面に小型で断面三角形の隆帶が貼付された土器群である。第26図2に典型例を見る。丸みを持った胴部と強く外反する口縁部が特徴的である。隆帶は第1類g種に近いが、さらに肥厚の度合を



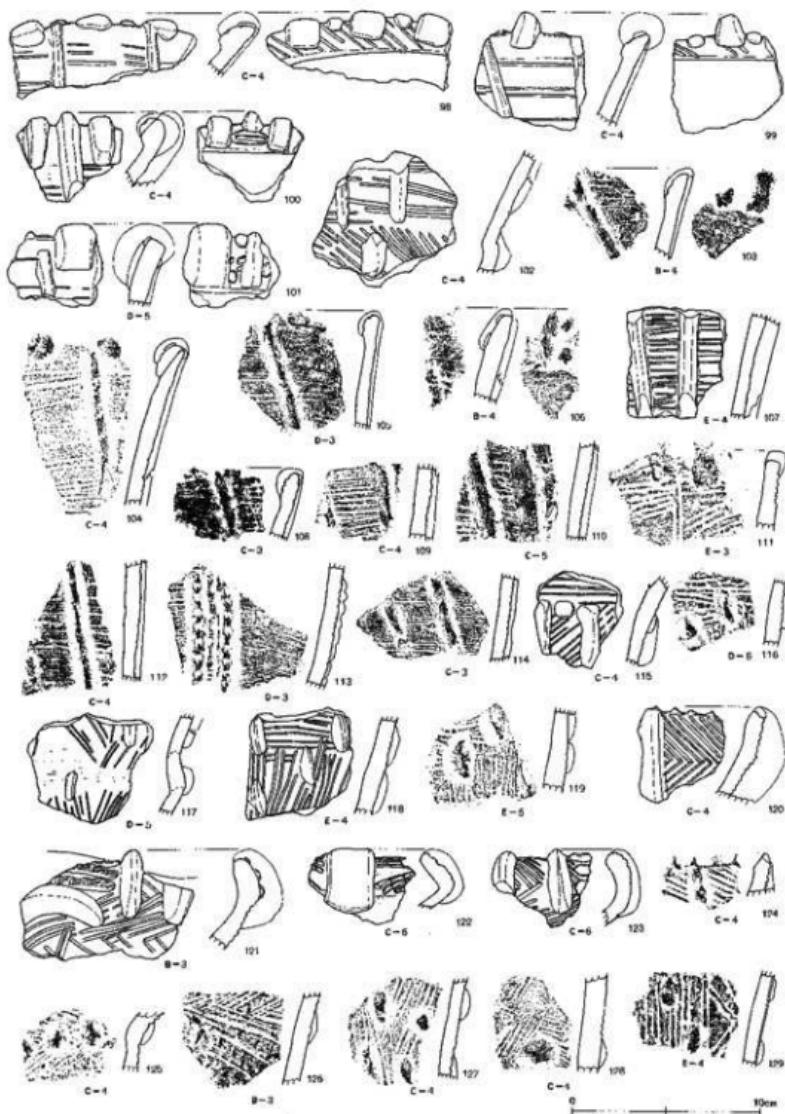
第26図 グリッド出土土器（第V群1）



第27図 グリッド出土土器（第V群2）



第28図 グリッド出土土器 (第V群3)



第29図 グリッド出土土器（第V群4）

増す。地文は半截竹管による横位の矢羽状文である。推定で最大径17cm、現存高5cmを測る。第29図116～119も同種土器群であろう。

e種（第29図120、124）

器面に耳たぶ状の貼付文を有する土器群である。口唇上は連続押捺され、小波状を呈している。地文は半截竹管の重複施文による横位の矢羽状文である。断面形はf種に近似している。

f種（第29図121～123）

内窓あるいは内折する口縁部に耳たぶ状や扁平板状の貼付文を有する土器群である。2類a種に比較し、出土量が極端に少ない。地文は横位の矢羽状沈線であり、121は波状口縁を呈するものと思われる。型式学的には121～122の内折部がa種の1a帶に変化したこととも考えられる。

第26図4、第29図125～第30図130～158に2類土器の胴部破片を一括した。地文上に円形貼付文を有するもの、さらには刺突が加えられたものがある。144～147は2個一対の貼付文を有し、さらに半截竹管による連続押捺が加えられる点で、他とは異なる。この点では後述する第8類土器と近似した特徴を有し、型式学的に第2類に後続する時期かと考えられる。また、154～158も同様に後続する可能性がある。

第30図159～164は、第2類と考えられる底部を一括した。底部から直線的に開くもの、底部直上ですぼまるものがある。

第V群3類（第30図165～168）

文様帯が胴部一帯構成の土器群である。小破片のため全容が定かではないが、文様帯上下が区画されるらしい。施文されるモチーフは、鋸歯文を呈するもの、第2類等の胴部地文に近いものなどがある。第4号住居跡出土土器2類（第12図1）も同様の系統上有るものと考えられる。

第V群4類（第30図169～第31図172～176）

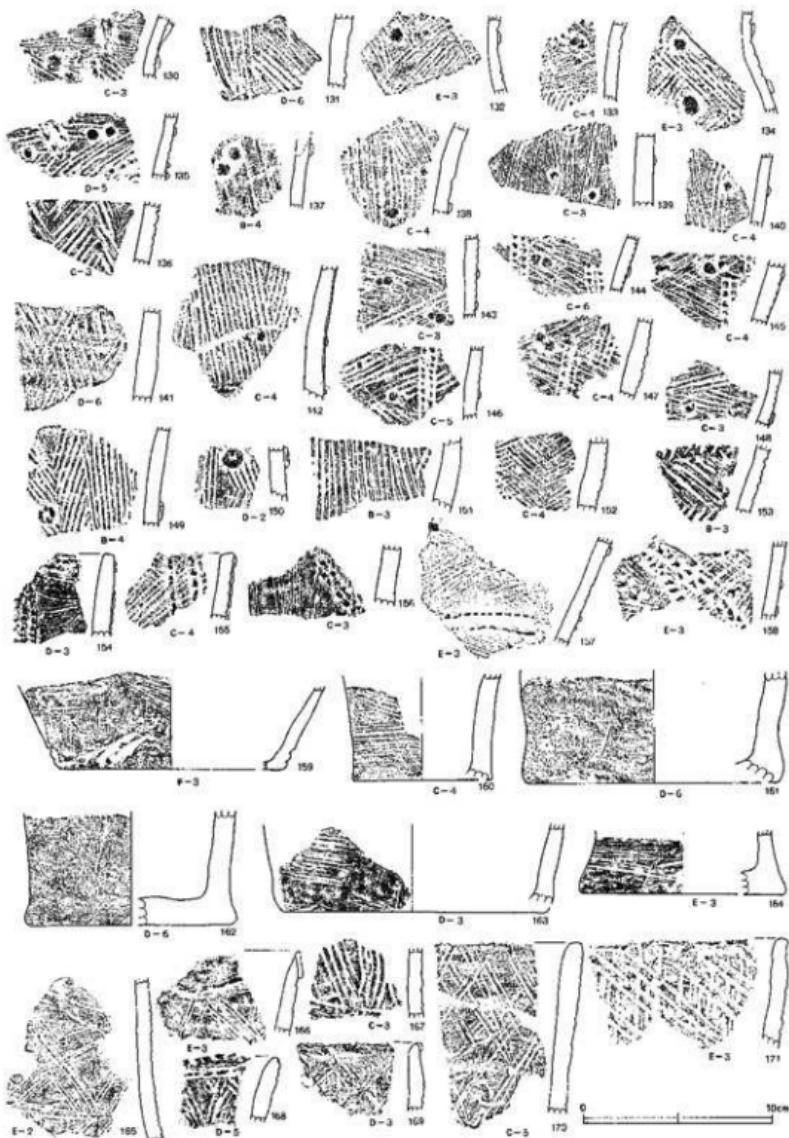
格子目状や、縦位の矢羽状沈線文を有する土器群である。包含層からは後者のみが出土した。文様は、同一方向の沈線で器面を全周した後に、異方向の沈線を施文し、格子目状に描出したものである。169、171は同一個体である。胎土・整形は第2類に極めて近い。

第V群5類（第31図177～195）

結節浮線により曲線的なモチーフを描く土器群である。提示した資料は波状口縁を有し、波頂部を中心として左右対象形の文様構成を有するようである。施文の特徴により2分類される。結節浮線文は、粘土紐よりもやや幅の広い工具を用いており、粘土紐両側に器面に達する結節が作出されている。土器群の特徴から、a種からb種への変遷が想定されるが、近接した時間差であろう。また、結節浮線文の描出手法から、第5類から第6類への変遷はスムーズに辿ることができよう。

a種（第31図183、185、189～190、194～195）

波状口縁を呈し、口縁部が緩やかに外反する深鉢型土器である。波頂部を中心とした左右対象の渦巻ないしは同心円状の文様が右傾する浮線文により連結されている。185、195から、胴部にも口



第30図 グリッド出土土器（第V群5）

縁部と同様の文様を有するものと考えられる。口唇端はやや丸味を有する。浮線文は b 種ほど間隔が密でなく、器面に達する結節が加えられるものの、条線は明瞭に残されている。

b 種 (第31図177～182、184、186～188、191～193)

緩い波状口線を呈し、波頂部を中心として左右対象の渦巻ないしは同心円状の文様構成を有すると思われる土器群である。文様空白部には、二個一対の小型の円形貼付文を有する。口縁部が直線的に開く深鉢型土器で、口唇端は角頭状に面取りされている。浮線は密接して貼付され、やや幅の広い半割竹管による結節が器面に接するように加えられているため、有文部では地文の条線が消失している。文様帶の上下端は三条の浮線文で区画されている。

第V群6類 (第26図5、第31図196～207)

文様が四条一単位の結節浮線文や結節沈線文で表現された土器群である。文様描出手法の相違により a～b 種に分類される。

a 種 (第26図5、第31図205～208)

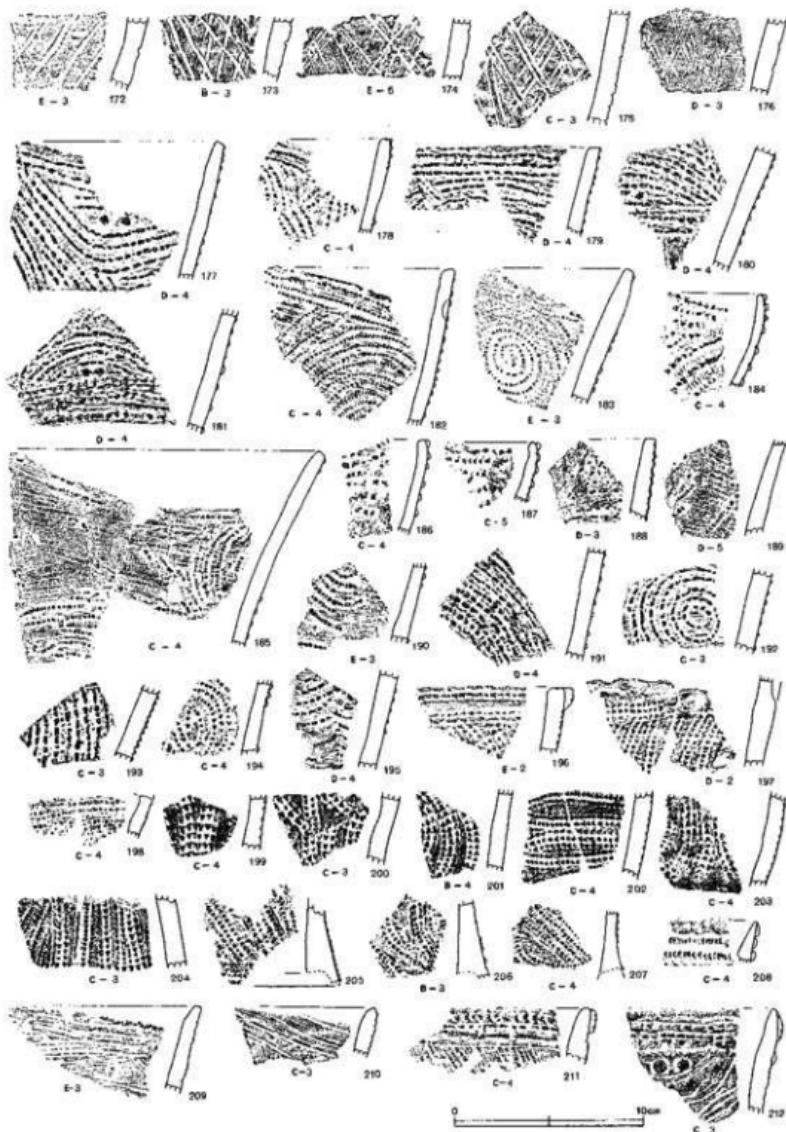
a 種の文様描出手法は、第V群5類にほぼ等しいものと言えるが、浮線文は全体に幅が広く密接し、器面と浮線文との差異がより明瞭となっている。文様描出手法の差はあるものの、後述する b 種により近い表現方法と言えよう。器面には、浮線文貼付以前に横位の条線が施文されている点は5類と同様である。図示した資料は全て同一個体である。第26図5は強く張る底部である。文様は四条一単位の浮線であり、概ね第V群2類と同様の文様構成を示すものと考えられる。底径は推定18.5cm、現存高6.5cmを測る。

b 種 (第31図196～204)

b 種は浮線文を用いず、器面整形後に結節沈線文で文様描出手法される土器群である。器面整形には第V群1～6a類のように条線文が地文として施されず、後述する第V群7群土器と器面整形が極めて類似している。第V群5～6a類と同様に、文様の施文単位は四条を一単位としている。小破片のため、文様構成を把握するには至らないが、202と他の破片を比較する限り、文様構成には、第V群2類に近い構成と、後述する第V群7類 (第31図209～第32図213～228) に特徴的な、弧線を配する構成に近いものがある。

第V群7類 (第33図256～275)

文様が沈線により描出される土器群である。第31図212～第32図213、215～222は同一個体と思われる。文様は弧線と直線文の組み合わせからなり、胴部に横位の沈線が施文されることから、文様帯が分帯されるようである。文様施文の空白部には、二個一対の円形貼付文を有する。貼付文のありかたは、第V群5類a種に近似するが、さらに扁平である。胎土には雲母粒が含まれ、内面整形と共に、第V群6類b種に極めて近い様相を呈する。施文される沈線も四条を一単位とする重複施文であり、第V群6類b種の結節沈線を、単純な並行沈線に置換すると第V群7類が成立する。しかし、第V群6類b種には円形貼付文は施されず、この点では第V群5類b種に近い様相を呈している。



第31図 グリッド出土土器（第V群6）

第V群8類（第26図6、第32図229～第33図243～275）

縄文地上に、主に結節浮線文で文様が描出される土器群である。所謂「十三菩提式土器」に相当する土器群である。波状口縁と平縁がある。234～235は内折する口唇部を有し、この部分が文様帶（1a帯）を構成している。波状口縁を呈する他の資料に1a帯ではなく1b帯のみで構成される。1b帯には二～四条を一単位とする鋸歯状の結節浮線文を有し、概して文様帶が幅狭く構成される傾向にある。第26図6は器形復元された資料である。4単位に波状口縁で、白曲状の突起を有する。波頂下の重張状モチーフと鋸歯の交差による菱形状の結節浮線文で構成される。口径は推定で23cm、現存高5.5cmを測る。平縁の土器群では、鋸歯状の結節浮線文を有し、217、219のように縦区画の要素をもつものがある。胸部は221～223のように結節浮線文が横走するものと、225～232、234のように横走する結節浮線文間に鋸歯状の粘土紐が貼付されるものとがある。両者は或いは部位による要素の相違かもしれない。226は曲線的な結節浮線文を有する資料であるが、器形は定かでない。238～241は扁平な隆帯上に押捺が加えられた土器群である。242～244は同類の底部である。いずれも底上部ですぼまり、結節浮線文が垂下している。

第V群9類（第33図276～278）

三角印刻を有する土器群である。何れも平縁で同一個体である。密接施文された鋸歯状沈線間に印刻が施されている。鋸歯状沈線は9条を1単位とし、1単位間の間隔がやや開いて施文されている。

第V群10類（第26図7、第33図279～第34図292～306）

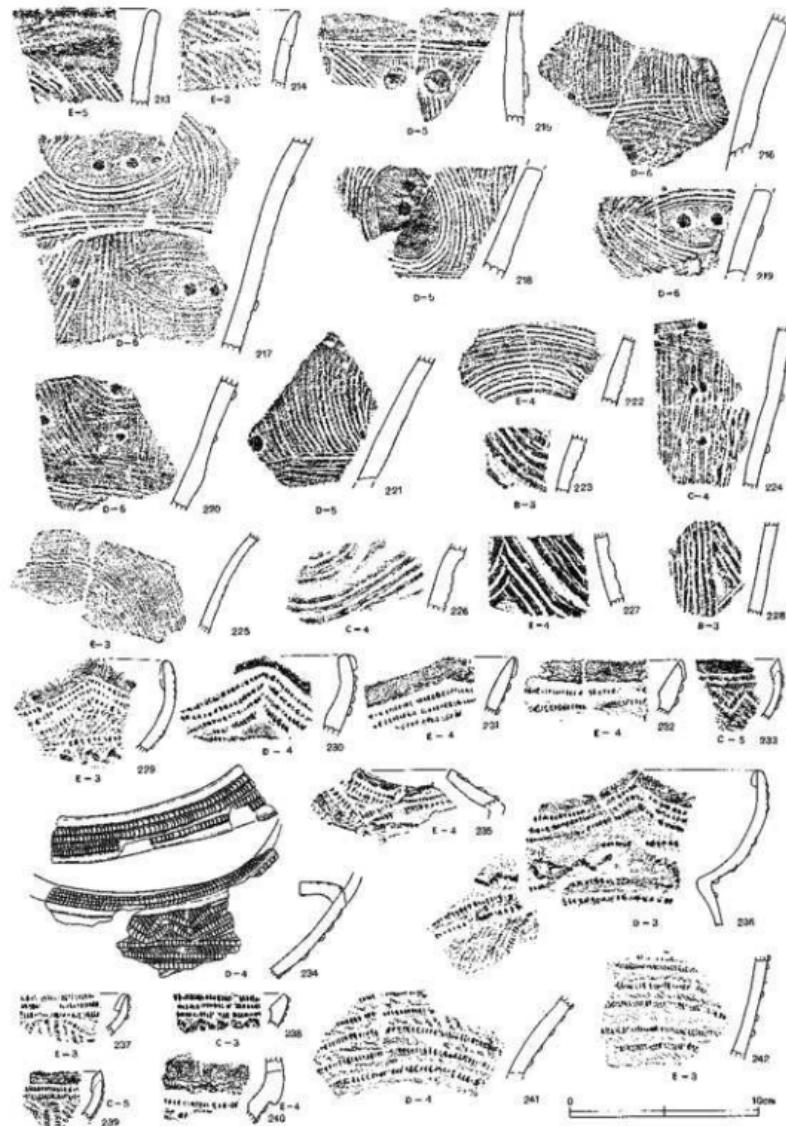
興津式土器である。大宮台地では比較的まとまった出土量と言えよう。器形復元された資料が少ないため、文様要素による分類に頗らざるを得ないが、器形は、弱い波状口縁を呈するものと、平縁とに別れるようである。口唇部は直口縁と折り返し口縁がある。折り返し口縁には283～284のように2段の刺突が施されるものと、290のように条線が施文される粗製的な土器群とがある。第26図7は器形復元された資料である。直口縁であるが、器面には粗い条線が施文されている。口径26cm、器高4cmを測る。

279～282、286～289、291～305、307～309はアナグラ属の貝殻により文様施文された土器群である。主に殻頂部を用いて横帯を描き、腹縁部により横帯間に連続波状文を描いている。本土器群は胎土に砂粒が多く含まれ全体に灰黄褐色を呈しており、諸磯C式土器とは明瞭に識別される。

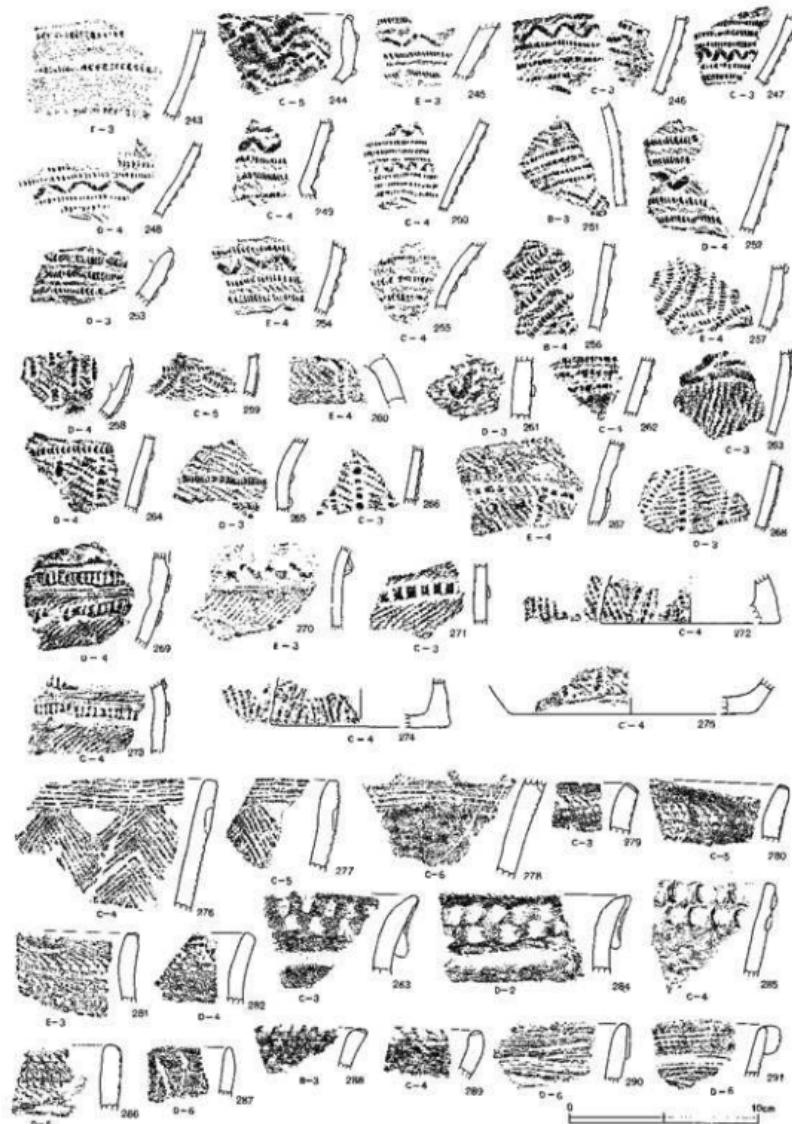
第V群11類（第34図307～344）

縄文が施文された土器群を一括した。施文原体には0段3条を用いるものが多く、図示した資料中で2条の原体を用いているものは317～318、324～325、329、331の6点である。施文方向には燃りを異にした原体を用いて間隔の狭い羽状縄文が構成される資料が多く存在するが、全て非結束である。また結節による所謂「綾絡文」を有する資料は第V群土器には存在しないようである。

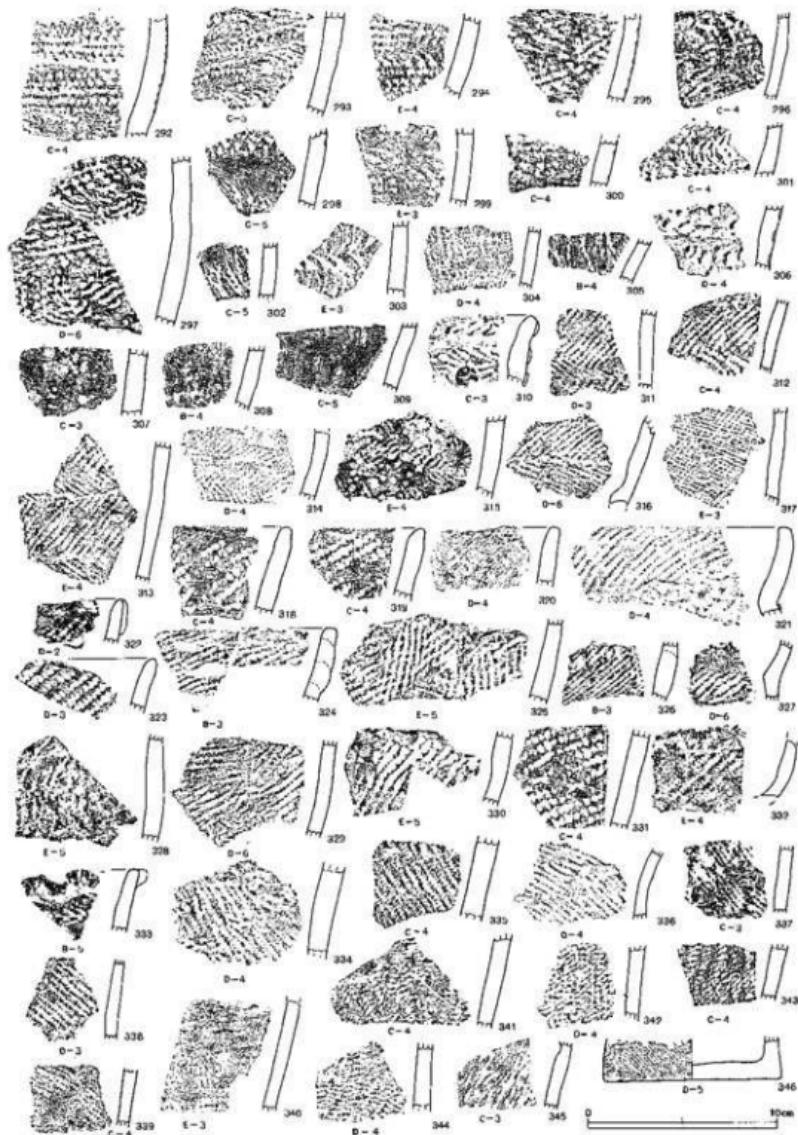
322～323、326～328、338は、胎土に砂粒を多く含み、色調が灰黄褐色を呈している。第V群10類に極めて近い土器群である。



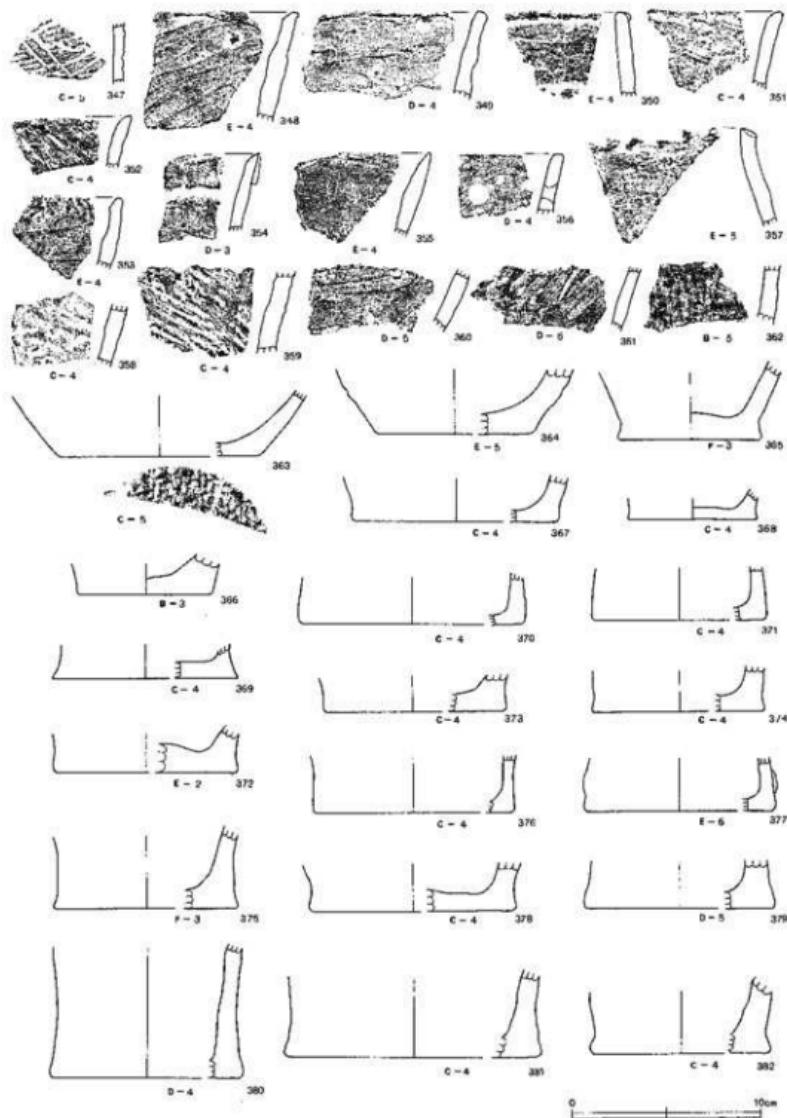
第32図 グリッド出土土器（第V群7）



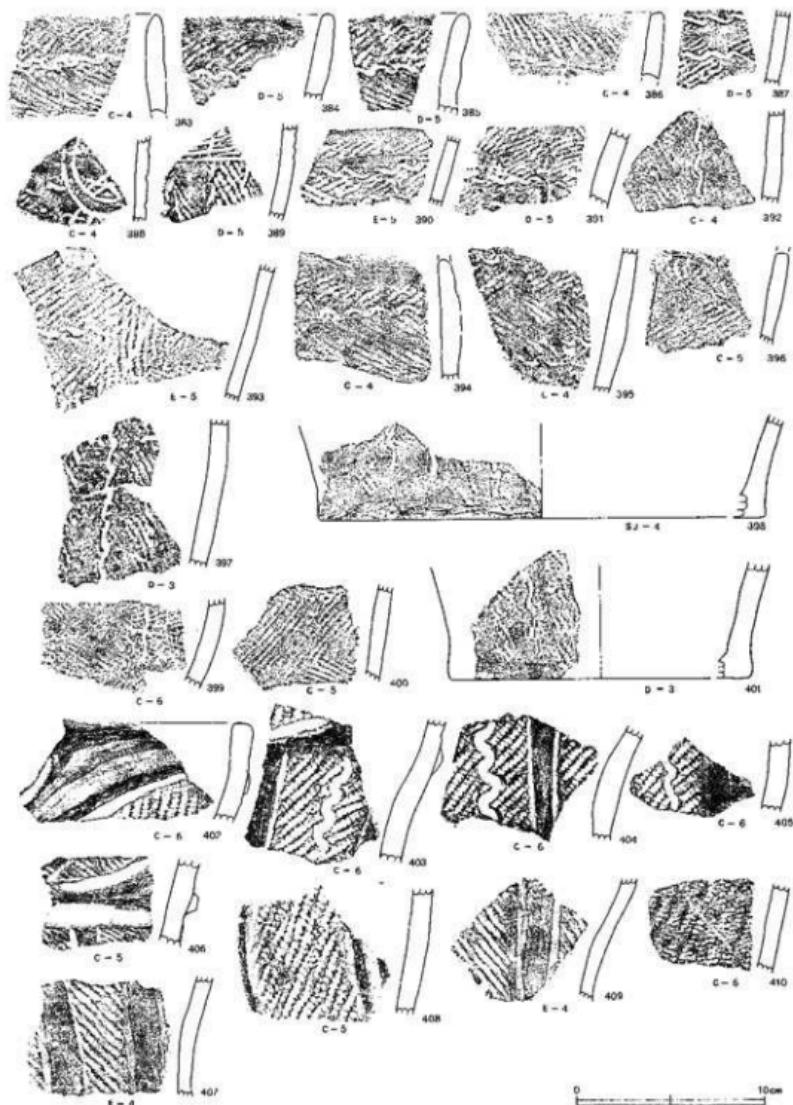
第33図 グリッド出土土器 (第V群8)



第34図 グリッド出土土器（第V群9）



第35図 グリッド出土土器（第V群10）



第36図 グリッド出土土器（第VI・VIII群）

第V群12類 (第35図345)

L Rの繩文地上に、並行沈線による推定菱形の文様が描かれる資料である。1例のみの資料であり即断はできないが、大木5式に類似した資料とも考えられる。胎土には砂粒が多く含まれ、色調も褐色を呈するなど、諸職C式に近い様相をもっている。

第V群13類 (第35図346～360)

器外面の整形がヘラ状工具により段状あるいは凹線状になされる土器群である。内面は、同一工具により横位のナデ整形が施されている。胎土には砂粒が多く含まれる。色調には褐色を呈するものと、灰黄褐色を呈するものがある。

第V群14類 (第35図361～380)

無文の底部を一括して本類とした。形態には、底部から外反氣味にひらくもの、底部直上が直立氣味であるもの、胴下部で強くすぼまり、開き氣味に底部に至るものがある。恐らく第V群2類を中心とした土器群に包括されるものと考えられる。361は網代痕を有する。

第VI群土器 (第36図381～399)

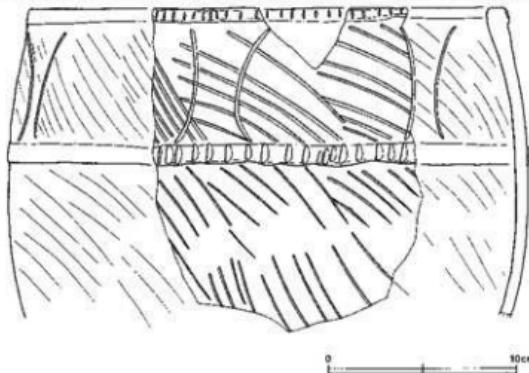
五領ヶ台式土器である。有文土器は386～387の2点のみで、他は全て繩文施文の土器群である。器面には綾絡文が横走するものと縦走するものがある。繩文は羽状構成され、撚りの細かなものが多い。全て単節である。胎土には金色を呈する雲母が多く含まれている。本土器群はD～E-3～5グリッドに分布の中心をもっている。

第VII群土器 (第35図400～408)

加曾利E式土器を本群とした。本土器群は台地のほぼ平坦部において散発的に出土している。高縁部文様帶には渦巻文と棒状区画文を有し、胴部には幅の狭い磨消し懸垂文を有する。懸垂文間の繩文施文部には蛇行懸垂文が施文されている。加曾利E1末～E2式初頭段階に想定されよう。

第IX群土器 (第36図)

E-5グリッドで出土した安行系紐線文土器である。口唇と胴上部に粘土帯を貼付し、口縁部文様帶を作出している。粘土帯上にはヘラ状工具による刻みが加えられる。器面全体にヘラ状工具による右傾する条線が施



第37図 グリッド出土土器 (第IX群)

され、さらに推定 6 単位の対向する弧状沈線文で区画されている。口径25cm最大径27cm、現存高15.7cmをはかる。第IX群土器は本例のみである。安行 1 式に比定される。

石 器

包含層からは、草創期の有舌尖頭器を始めとして、多くの石器が出土している。出土石器の多くが欠損品であり、遺構に伴うものが極めて少ない。また、磨石に対し、石皿が極めて少ないことも特徴であろう。なお、石器の計測値は、第 3 表に一括して掲載した。

有舌尖頭器（第38図 5）

B-4 グリッドで出土した。砂岩製で、全体に風化が進行している。表面は左右から押圧剝離が施されているが、裏面は、第 I 次剝離面が残され、調整剝離も粗雑である。基部は欠損している。

石 鐵（第38図 6～15、17）

形態には正三角形に近く基部を有するもの（6）と直線的に整形されたもの（7）、凹基状を呈するもの（8）がある。両側縁が長く二等片三角形を呈し、基部を有するもの（11）、浅い凹基状を呈するもの（8～9）、抉入部が深く、長脚鐵を呈するもの（12）等がある。14は石鐵の未製品であろう。何れも時期の帰属に関して定かではない。

石 錐（第38図 2～4）

剝片の片面に整形が集中し、裏面には第 I 次剝離面が残される。4は中央部から先端部にかけて欠損している。2～3は両側縁が長い二等片三角形で、断面形が台形ないしは三角形を呈する。

スクレイパー（第38図 1、16、19～20、第39図21）

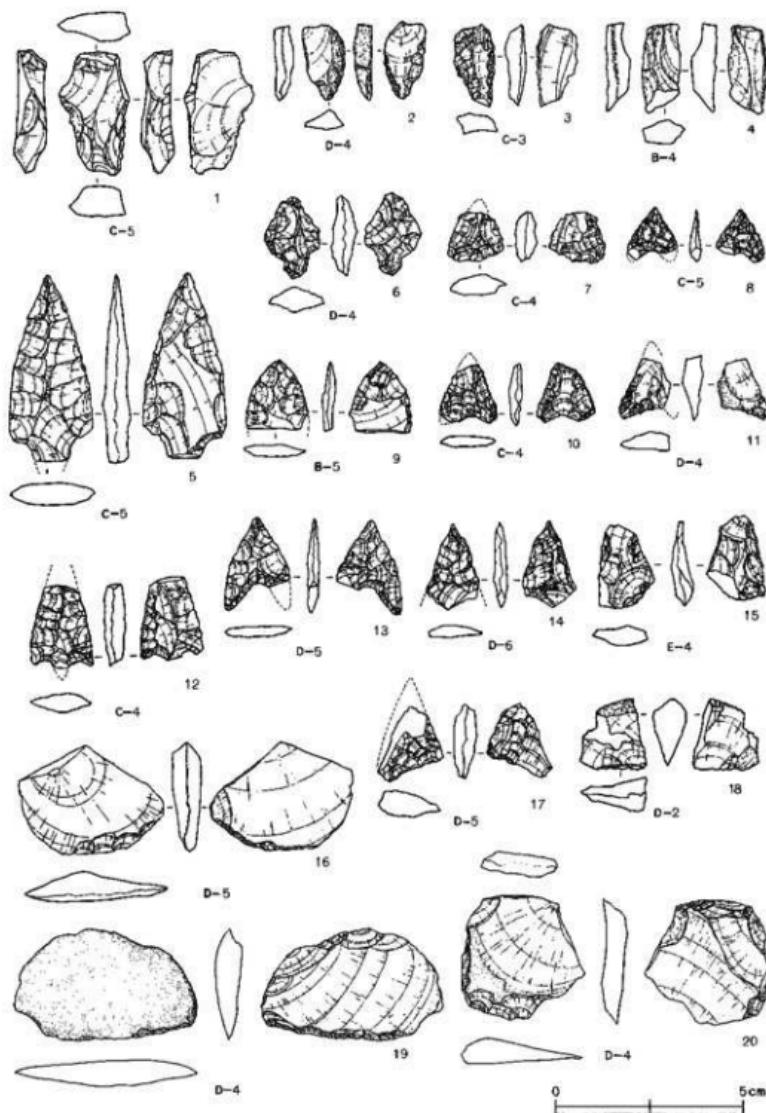
1は断面台形を呈し、片側縁に細かな調整剝離を施している。16、19～20、21は自然面を残す剝片の一部に粗い調整剝離を施している。

石 斧（第39図22～第40図）

主に硬砂岩や粘板岩を用い、短冊形や刃部が幅広い二等辺三角形に近い形状に成形されたものが大半を占める。石材には礫をそのまま用いたものと、剝片を用いたものとがある。縦断面には緩やかな湾曲をもち、両縁の中央部から基部にかけて、敲打が加えられたものが多い。また、基部や刃部が欠損しているものが大半を占めており、石斧の着柄や使用を暗示している。全体に小型の石斧が多いことも、石材供給地から離れた大宮台地の一般的な特徴であろう。石斧は、形状から前期に属するものが多いようである。

22は縱長礫の一端を剝離して刃部を作出している。23も両面に風化した主剝離面を有するものの概ね22と同様の傾向にある。2例は早期に属するものであろう。

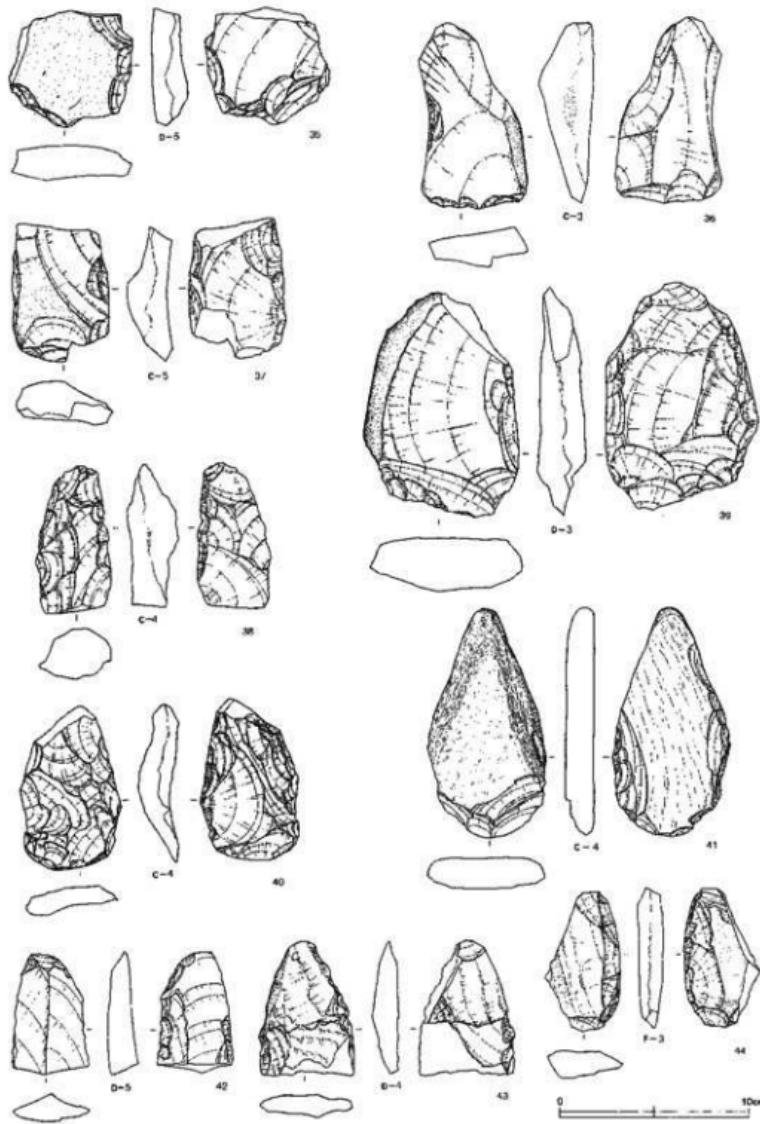
24は両面に丁寧な剝離が施され、両縁中央部に調整剝離が集中し、やや撥形に近い形状を呈して



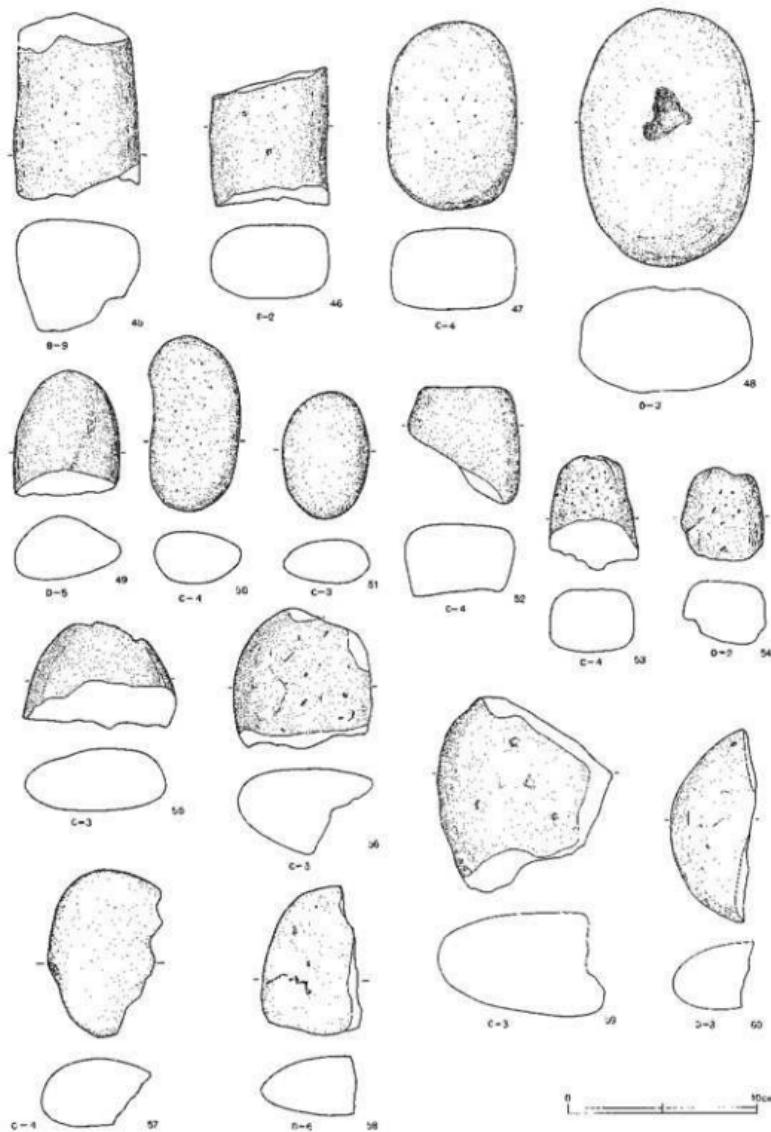
第38図 グリッド出土石器(1)



第39図 グリッド出土石器(2)



第40図 グリッド出土石器(3)



第41図 グリッド出土石器(4)

第3表 石器一覧表

番号	掲載図	種類	重さ	石 材	番号	掲載図	種類	重さ	石 材
92	15	石 錛	0.4	黒 曜 石	29	39	打製石斧	81	粘板岩
93	15	磨 石	53	砂 岩	30	39	打製石斧	95	粘板岩
94	15	磨 石	97	砂 岩	31	39	打製石斧	137	粘板岩
6	18	磨 石	4.7	砂 岩	32	39	打製石斧	90	ホルンフェルス
1	38	スクレイバー	166	黒 曜 石	33	39	打製石斧	61	ホルンフェルス
2	38	石 錛	0.9	黒 曜 石	34	39	打製石斧	10	黒雲母片岩
3	38	石 錛	1.2	黒 曜 石	35	40	打製石斧	95	粘板岩
4	38	石 錛	1.4	黒 曜 石	36	40	打製石斧	131	砂 岩
5	38	有舌尖頭器	5.3	ホルンフェルス	37	40	打製石斧	104	粘板岩
6	38	石 錛	1.4	チャート	38	40	打製石斧	134	ホルンフェルス
7	38	石 錛	0.9	黒 曜 石	39	40	打製石斧	359	砂 岩
8	38	石 錛	0.3	黒 曜 石	40	40	打製石斧	84	粘板岩
9	38	石 錛	0.9	チャート	41	40	打製石斧	162	結晶片岩
10	38	石 錛	0.6	黒 曜 石	42	40	打製石斧	32	砂 岩
11	38	石 錛	0.7	黒 曜 石	43	40	打製石斧	42	ホルンフェルス
12	38	石 錛	2.1	チャート	44	40	打製石斧	53	砂 岩
13	38	石 錛	0.9	チャート	45	41	磨 石	523	花崗岩
14	38	石 錛	0.8	黒 曜 石	46	41	磨 石	322	花崗岩
15	38	石 錛	1.3	黒 曜 石	47	41	磨 石	543	安山岩
16	38	スクレイバー	7.4	チャート	48	41	磨 石	1143	安山岩
17	38	石 錛	1.3	黒 曜 石	49	41	磨 石	95	安山岩
18	38	石 錛	1.9	黒 曜 石	50	41	磨 石	166	安山岩
19	38	スクレイバー	88	ホルンフェルス	51	41	磨 石	155	砂 岩
20	38	スクレイバー	54	砂 岩	52	41	磨 石	173	安山岩
21	38	スクレイバー	54	ホルンフェルス	53	41	磨 石	108	安山岩
22	39	打製石斧	138	ホルンフェルス	54	41	磨 石	87	安山岩
23	39	打製石斧	195	粘板岩	55	41	磨 石	134	安山岩
24	39	打製石斧	104	粘板岩	56	41	磨 石	275	安山岩
25	39	打製石斧	117	ホルンフェルス	57	41	磨 石	208	安山岩
26	39	打製石斧	57	粘板岩	58	41	磨 石	108	安山岩
27	39	打製石斧	41	結晶片岩	59	41	磨 石	634	安山岩
28	39	打製石斧	61	粘板岩	60	41	磨 石	183	安山岩

いる。石斧には、25、28~29、30、41のように片面に自然面を大きく残したものがあり、この種の石斧は、形状を問わず概して整形が粗い傾向にある。

磨 石 (第41図)

石材には砂岩・花崗岩・多孔質安山岩を用いたものが多い。磨石には49~51のように、石材を加工せずそのまま用いられたものと、45~48、59のように敲打により形状が整えられたものがある。59には敲打痕が明瞭に残されている。45~48は使用が進み、全体に滑らかな状態を呈している。47~48は阿側縁が用いられ、面取り状を呈している。磨石には、51のように端部に敲打痕を残し、敲石として使用されたものもある。

V. 中~近世の遺構と遺物

在家遺跡からは、若干の中~近世の遺構が検出された。上尾市が実施した第Ⅰ次調査では第Ⅱ次調査区の東側に広がる台地平坦面に、同時期の溝等が多数検出されており、第Ⅱ次調査で検出された遺構は、それらの西端に位置するものであろう。

1. 土 壤

D-4グリッドで検出された。第7号土壤である。平面形は梢円形を呈し、最深部で確認面から20cmの浅い掘り込みを有し、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は2層が確認され、第1層中に、片口鉢が埋設されていた。鉢の底部からは2枚の古銭が検出された。

土壤出土遺物 (第43~44図)

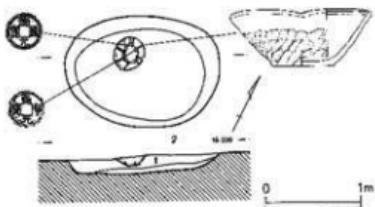
第44図は、土壤に埋設されていた片口鉢である。底部から胴中位にかけて斜方向の指頭による圧痕が顕著に残る。口唇部から胴中位にかけては圧痕上に横位のナデ整形が加えられる。口唇部から器内面は横位のナデ整形が施される。

胎土は小礫・砂粒を多く含む。色調は外面が黒色、内面が灰黄色を呈する。口径29cm、底径12cm、器高12cmを測る。

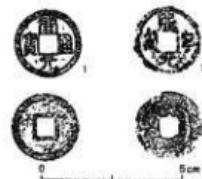
第43図1~2は、鉢の底部から検出された古銭である。1は開通元宝で、闊縁であり元の字の左が跳ねている。2は熙寧元宝である。

2. 溝

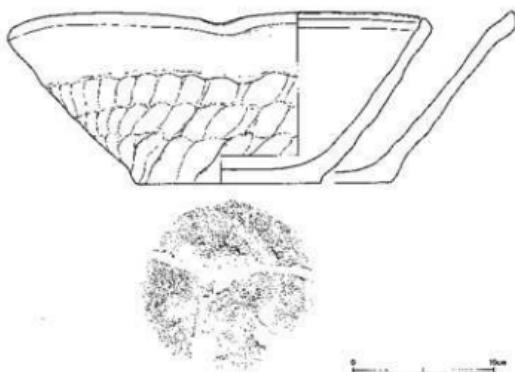
調査区東端で検出された。共に台地の南北を縦断するような位置にあり、硬化面が認められることから、或いは切通し状の道であった可能性がある。



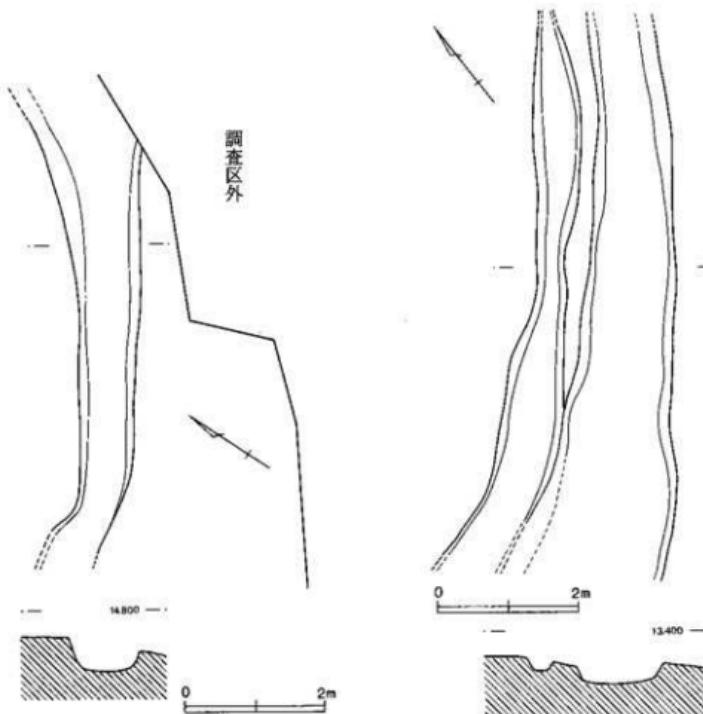
第42図 中世土壤実測図



第43図 中世土壤出土古銭



第44図 中世土壤出土陶器



第45図 清実測図(1)

第46図 清実測図(2)

第1号溝（第45図）

D-6グリッドで検出された。両端が消失している。幅1.4~0.8mで確認面からの深さは0.4~0.2m程である。覆土は暗褐色土一層のみである。

第2・3号溝（第46図）

主にE-4グリッドで検出された。南北端が消失している。第2号溝は、幅0.8m前後で、確認面からの深さは0.2m程度である。第3号溝は、幅1.0~2.0mで、確認面からの深さは0.3m程度である。

VI. 分析結果

はじめに

1. 分析資料
2. 燃料材に関する検討
3. 集石土壌の脂質分析について

はじめに

在家遺跡は、上尾市大字平方字在家に所在し、北西に延びる舌状台地上に立地する。発掘調査の結果、繩文時代前期諸磯式期の集落が確認され、集石土壌も検出されている。これまでの考古学的研究からは、集石土壌の機能として野外での調理施設説や炉説などが唱えられている。

今回の分析調査では、この集石土壌（第21号土壌）の性格や燃料材（主としてイネ科植物）を検討するための自然科学的な情報を得ることを目的として掲げ、分析手法として植物珪酸体分析と脂質分析を選択した。植物珪酸体分析を選択したのは、集石土壌内で草本類などが燃料材として利用されれば、燃焼後の灰に比較的熱に強い植物珪酸体が残留しやすいと考えられるためである。また、植物珪酸体は植物、特にイネ科植物の種類（Taxa）ごとに特有な形質を持つことから、燃料材として利用されたイネ科植物が推定できる。一方、脂質分析を選択したのは集石土壌が調理施設であった場合、調理の対象となった動物・植物がそれぞれ特有な脂肪酸やステロールを持ち、動植物体が土壤中に埋没しても比較的長い期間に安定して残留するとされるからである。脂質分析は、埼玉大学教養部小池裕子助教授に協力を頂いた。その結果は、3章に掲げた。なお、分析点数は植物珪酸体分析が2点、脂肪酸分析が3点である。

1. 分析試料

試料は、発掘担当者により集石が集中する1層の下位の2・3層から6点（No①～⑥）採取された。ただし、これらの平面的・層位的な相互位置関係は明確にされていない。

これらの試料のうち、植物珪酸体分析用試料としてNo①・⑥、脂肪酸分析用試料としてNo①・②・⑥をそれぞれ選択した。

2. 燃料材に関する検討

2-1. 植物珪酸体分析の分析方法と結果の表示方法

試料中の植物珪酸体は、過酸化水素（H₂O₂）・塩酸（HCl）処理→超音波処理（70w, 250KHz, 1分間）→沈定法→重液分離法（臭化亜鉛、比重2.3）の順に物理・化学処理を行って分離・濃集する。これを封入（封入剤：ブリュウラックス）し、プレパラートを作成して、400倍の光学顕微鏡下で全面を走査する。その間に、出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪

酸体と呼ぶ)を近藤・佐瀬(1986)の分類に基づいて同定・計数する。今回は、特にイネ科葉部短細胞列や葉身機動細胞列といった組織片に注目して分析を行った。これは、炉などで草本類の燃料材が用いられるとき灰中に植物珪酸体が組織片の形で残留している例(佐瀬, 1982; 大越, 1985)が多いためである。

検出された植物珪酸体の出現傾向から燃料材として利用されていたイネ科植物について検討するために、植物珪酸体組成図(第47図)を作成した。各種類(Taxa)の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の各珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求めた。なお、両試料ともに機動細胞珪酸体の計測数が100個未満であり組織が歪曲されている恐れがあるため、植物珪酸体組成を求めず出現した種類を+で示すことにめた。

2-2. 植物珪酸体の産状

計数結果および両試料の植物珪酸体組成を第4表と第47図に示す。イネ科葉部起源の植物珪酸体は短細胞珪酸体が多く検出されるものの、機動細胞珪酸体が50個前後と少ない。保存状態は、短細胞珪酸体で良好であるが、機動細胞珪酸体では不良であり表面に多数の小孔(溶食痕)が生じているものが認められる。

両試料では、タケ亜科の短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体が多く検出する傾向が認められる。このほかに、キビ族・ウシクサ族(スキ属)・イチゴツナギ亜科が認められる。No⑥では、ヨシ属の短細胞珪酸体も認められる。ただし、これらの植物珪酸体は単体で認められ、短細胞列あるいは機動細胞列といった組織片では認められない。

2-3. 燃料材の存在について

両試料からは、タケ亜科・キビ族・ウシクサ族・イチゴツナギ亜科などの植物珪酸体が検出される。これらの種類は、ヨシ属を除いて、台地上にも生育できる。また、燃焼後の灰中に多数認められることの多い組織片が全く認められなかった。以上の点を考慮すれば、検出された種類が燃焼材として利用されていたことは考えにくい。当時の遺構が現在と同様に台地上に立地していたとすれば、検出された種類が遺構の周辺に育成し、それらに由来する植物珪酸体が土壤中に混入していたことも考えられる。したがって、検出された植物珪酸体は土壤が構築された際に混入したものと考えられる。ただし、ヨシ属は湿潤的な場所に生育することが多い。人為的影響の有無が明確でないものの、当時の台地上に湿潤的な場所がなければ検出されたヨシ属が何らかの要因により台地上の遺構内に混入したと考えられる。以上、今回の分析結果は燃料材の存在を示唆するものとはならなかつた。

ところで、集石土壌内で構成礫を加熱するために火が用いられたと仮定すれば、燃料材が集石の上あるいは周囲に置かれたことが予想できる。また、その場合には燃焼した跡の灰が片づけられたとしても、集石周辺に灰が残留すると思われる。今回、植物珪酸体分析で検討した試料は2・3層から採取されている。したがって、燃料材の存在を検討する上では2・3層ではなく、むしろ集石が集中する1層を調査対象とする必要があろう。また、土層内の植物珪酸体の濃集状況を把握する

ためにも、平面的・層位的な相互位置関係を明確にして試料を採取する必要がある。

2-4. 引用文献

- 近藤鉢三・佐瀬隆 (1986) 「植物珪酸体分析、その特性と応用」『第四紀研究25』P.31-64.
- 大越昌子 (1985) 「プラント・オパール分析」『平賀遺跡群発掘調査報告書』P.803-815, 平賀遺跡調査会
- 佐瀬 隆 (1982) 「古墳時代住居址の炉に関する焼土について—植物起源粒子の植物珪酸体から見て—」P.303-308, 多摩ニュータウン遺跡、東京都埋蔵文化財センター調査報告書 (第2集)。

3. 在家遺跡出土の集石土壤の脂質分析について

小池裕子 (埼玉大学教養部)

3-1. 分析試料

埼玉県上尾市平方に所在する在家遺跡第II次調査において発掘された第21号土壤は、繩文時代前期諸畿C期とみられる集石土壤で、破碎焼石を含む層は炭化物・灰を含み集石使用状況を再現するには良好な遺構と考えられた。そこでこの第21号土壤覆土第2・3層から採取された土壤サンプルNo①・②・⑥ (分析番号Na572-1・2・3) において脂質分析をおこなった。

3-2. 分析方法

試料からの脂質抽出法および精製法は常法(小池, 1990)により、クロロホルム-メタノール(2:1)を用い超音波抽出を行い、得られた全脂質を計量した。全脂質のほぼ半量の試料に5%HCl-MeOHを加えメチル化し、ヘキサン-ジュチルエーテル-酢酸(80:30:1)を用いて薄層上で展開し、遊離脂肪酸部位とステロール部位を採取し濃縮して検出試料とした。

脂肪酸分析には20%DEGSカラムを、ステロール分析には2%OV-17カラムを用い、標準試料の検出時間を基準にして、図3に示した22種の脂肪酸および7種のステロールを同定した。

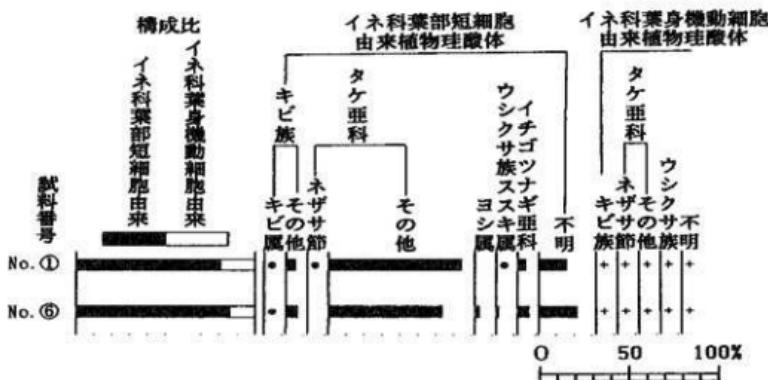
3-3. 脂質抽出率について

今回分析した土壤サンプルNo①・②・⑥から抽出された全脂質重量はそれぞれ23.45, 38.08, 58.25mgで、抽出率はそれぞれ9.98, 16.72, 27.33mg/100g 試料であった。ともに分析には充分な脂質量で、また土壤サンプルの中でもかなり高い抽出率を示した。

分析された土壤サンプルは、第21号土壤覆土第2・3層から平面的に3点を採取したとのことであったが、それらの脂質抽出率は土壤サンプルNo①の10mg/100g 試料から土壤サンプルNo⑥の27mg/100g 試料まで約3倍の差がみられた。

第4表 第21号土壤覆土試料
植物珪酸体分析結果

種類(Taxa)	試料番号	No①	No⑥
イネ科葉部短細胞珪酸体			
キビ族キビ属	2	1	
キビ族(その他)	13	16	
タケ亞科ネザサ節	1	--	
タケ亞科(その他)	199	160	
ヨシ属	--	4	
ウシクサ族ススキ属	1	3	
イチゴツナギ亞科	12	16	
不明キビ型	11	29	
不明ヒゲシバ型	14	15	
不明ダンチク型	15	9	
イネ科葉身機動細胞珪酸体			
キビ族	1	2	
タケ亞科ネザサ節	1		
タケ亞科(その他)	39	24	
ウシクサ族	2	4	
不明	19	11	
合計			
イネ科葉部短細胞珪酸体	268	253	
イネ科葉身機動細胞珪酸体	62	42	
計測数	330	295	



第47図 植物珪酸体組成

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体はイネ科葉部短細胞珪酸体総数、イネ科葉身機動細胞珪酸体はイネ科葉身機動細胞珪酸体総数をそれぞれ基準として百分率で算出した。なお、●は1%未満をあらわす。+は、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数が100個未満の試料において出現した種類をあらわす。

3-4. 脂肪酸組成について

今回分析した土壤サンプルの脂肪酸組成とステロール組成を図3に示す。一般に土壤の脂肪酸組成は、C22～C28付近までの高級飽和脂肪酸を高頻度に含むのを特徴としている。このような土壤型の高級飽和脂肪酸は、対象土壤試料に共通して認められたが、その頻度は一般土壤に比べて少なく、中級脂肪酸を主体にしていた。

各試料における中級脂肪酸の組成には共通性がみられ、C18:1・C16:1・C16:0・C14:1がいずれもやや多い傾向がみられた。C18のなかではいずれの試料においてもC18:1がC18:0より多く、またC18:2はC18:0よりすくなかった。

飽和脂肪酸の系列ではC16:0がもっとも多く、C18:0 > C24:0 > C26:0 > C28:0 > C22:0 > C20:0、あるいはC26:0 > C24:0 > C18:0 > C22:0 > C28:0 > C20:0の順であった。また奇数の飽和脂肪酸はさほど多くはなかった。

なお、水産物に特有な高級不飽和脂肪酸のC20:4・C20:5やC22:6は、これらの試料では検出されなかった。

3-5. ステロール組成について

3点の土壤サンプルはともに類似のステロール組成を示し、植物性ステロールの β -シットステロールがもっとも高く約20%を占めた。同じ植物ステロールではスティグマステロールが約10%前後でそれに続き、カンペステロールは3～4%で比較的少なかった。動物性ステロールのコレステロールも安定して検出され、ともに8～10%出現していた。

一般に土壤試料では、ステロール分解産物のコレスタンなどの飽和型ステロールが主体を占めるが、今回の分析試料では、コレスタンなど土壤型ステロールは検出されなかった。

3-6. 考察

第21号土壤覆土の3点の土壤サンプルは脂肪酸組成・ステロール組成とともに共通したパターンを示した。脂肪酸組成では土壤型の高級飽和脂肪酸より中級脂肪酸が優位を占め、またステロールでもコレスタンなどが検出されなかったことから、これらの土壤サンプルから抽出された脂質には、集石土壤に関連すると予想される動植物起源の脂質が、かなりの量残存していたと思われる。

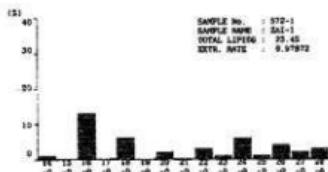
この残存脂質は、ステロール組成において β -シットステロールなど植物ステロールがコレステロールに比べ多く、またこの覆土層に炭化物が多く検出されていることから、燃料にもちいられた植物による脂質の存在がまず考えられる。脂肪酸組成においてC18:1がC18:0より多く検出されたことは、主体となる脂質が動物質であることより植物質である可能性が高いこと、またC16とC14の系列が比較的多かったことはその植物質が熱などで変成を受けた可能性を示唆している。

しかしながらコレステロールが10%前後安定して検出されたことは、動物性脂質が相当量存在していたものと推定される。

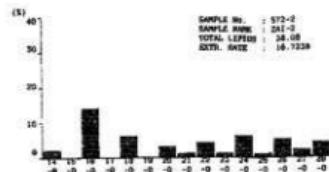
3-7. 引用文献

- 小池裕子・土屋朋子 (1988) 「水産動物の脂肪酸組成について」『埼玉大学紀要(自然科学編)』24 : 55-72
- 小池裕子 (1990) 「糞石とGC-MAS」『CACSFORUM』10 : 28-30
- 小池裕子 (1991) 「有用植物のステロール組成について」『埼玉大学紀要(自然科学編)』26 : 13-29

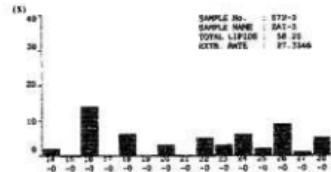
No. ①



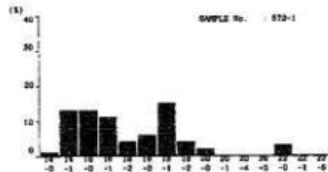
No. ②



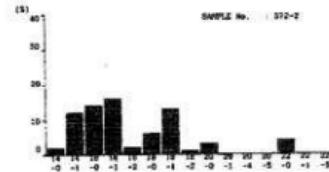
No. ③



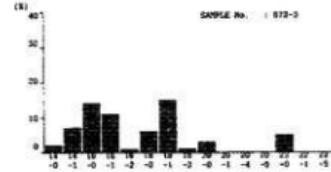
SAMPLE No.: 572-1



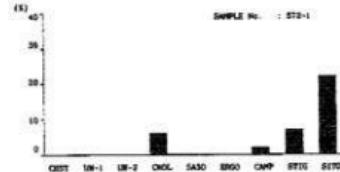
SAMPLE No.: 572-2



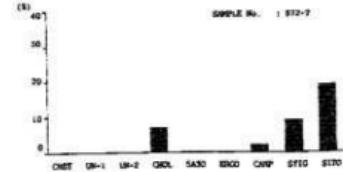
SAMPLE No.: 572-3



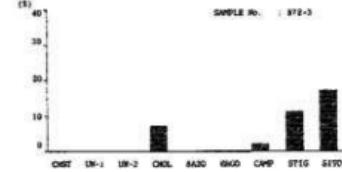
SAMPLE No.: 572-1



SAMPLE No.: 572-2



SAMPLE No.: 572-3



第48図 脂肪酸組成とステロール組成

VII. 結語

1. 在家遺跡出土土器について

在家遺跡からは早期を始めとして前期から晩期にいたる多彩な土器群が出土した。本章では、そのうち第V群—諸磯C式、第X群—千網式土器について簡単に触れておきたい。

第V群土器について

第V群土器は諸磯C式から十三善題式土器が包括されるが、本章では住居跡や包含層からまとまつた出土をみた諸磯C式土器について簡単なまとめを行っておきたい。

第V群土器は第1類から第9類に分類されるが、諸磯C式に比定される土器群は第1～6類である。型式学的には諸磯C式の直前段階に相当する資料から諸磯C式の終末段階までが含まれる。資料の分析から第I段階から第V段階までを設定した。

I. 第V群土器の分類と概要

第I段階

諸磯C式の直前段階に比定される土器群である。第1類a～b種が本段階に相当する。施文される文様は諸磯B式に特徴的な櫛齒状工具による間隔の狭い横分帶間に鋸齒文が施文されるもので、a種には口唇から竹管文が垂下する。b種には口唇に小突起が貼付される。何れも平線か弱い波状線が基本である。

第2a段階

第2段階は從来諸磯C式古段階に比定されている土器群である。本段階は土器変遷上、大きく3期に区分することができる。第2a段階は諸磯C式の最古段階に比定される土器群である。第1類c種の一部、e種、g～h種が本段階に相当する資料と考えられる。土器群は大きく2分することができる。則ち、口唇下を廻る横位条線帶と以下に描かれる縦区画を基調とした施文構成を持ち、粘土紐の貼付が加えられるものと、そうでない一群である。前者には第1類c種の一部、e種、g種が、後者には第1類h種が該当する。前者には口縁部文様帶として、口唇から密接して垂下する細長い粘土紐上に半截竹管状工具による刻みが加えられるほか、円形貼付文上にも刺突が加えられている。後者は前者の貼付文による加飾の要素を全て取り除いた土器群と言えよう。この段階以降に顯著となる刻みをもつ粘土紐の系譜は現在のところ不明瞭であるが、第1段階に別系統であった貼付文と器面への刺突が同化した結果とも考えられる。

第2b段階

貼付文が発達し大型化する段階の土器群である。所謂下島式に代表されるようないわば飾られた土器が主体となる段階といえる。本段階に比定される土器群には第2類d、f種が該当する。

第2類d種は器面に断面三角や蒲鉾型の貼付文を有する土器群である。第2類f種は、「く」の字

状に屈曲する口縁部を持ち、地文である矢羽状沈線に耳たぶ状や板状の貼付文を有する土器群である。貼付文の在りかたからは、d種からf種へとの時間的な傾斜が考えられるが微妙である。

胸部以下が判然としないが、第1段階にみられる縦区画を基調とした文様構成をもつものであろう。また、胸部に縱長や円形の貼付文をもつものも存在するようである。

第2c段階

在家遺跡のなかで特徴的な土器群である。型式学的に第2b段階に後出する様相を呈しているため1段階を設定した。本段階に比定される土器群は、第2類a、d、e種である。

器形は口縁部が直線的に開く深鉢形土器であり、前段階第2類d、f種の屈曲の強い器形とは対象的である。むしろ第1段階の第1類e、h種との共通性が強いようである。この傾向からすれば第2類d、f種とはむしろ系統を異にするとも考えられよう。

第2類a種の特徴は口唇内面の文様帶である。内面の肥厚部に斜行沈線が描かれ、その上に板状あるいは耳たぶ状の貼付文を有し、小型の円形貼付文もみられる。外面には内面の貼付文と交互に、地文の横位条線上に細長い隆帯が貼付されている。口唇上から内面にかけての貼付文は大型の傾向があり、第2類f種に近い様相を示している。口唇内面の文様帶は第2類f種の口縁部文様帶に相当し、器外面の文様帶は第1類e種に相当する。前段階との時間差は微妙であり、極めて近接した時期の所産と考えられる。

第3段階

器面に2箇一対の円形貼付文を有する土器群である。本段階に比定される資料は第2類c種の一部、及び第7類土器の一部である。第7類の胸部文様は横位の矢羽状や格子目状文を基調としており、文様上に2箇一対の円形貼付文が附されている。第2類c種は多数条の隆帯が垂下し、隆帯幅よりも広い工具により連続押捺を加えることにより、結節浮線文を作出している。前段階の土器群の竹管文が、やや太い隆帯上に隆帯幅よりも狭い竹管文を加えていたことと対象的である。

第4段階

結節浮線文により曲線的な文様が描かれる土器群である。本段階に比定される資料は第5類a、b種、第6類及び第7類土器の一部である。第5類a種は直線的な結節浮線文を基調とした文様構成を有しており、第5類b種が曲線的な結節浮線文であることと比較し、やや趣を異にしている。断片的であるが、第5類a種には、文様空白部に2箇一対の円形貼付文が附されており、第7類の一部、第6類土器にも同様の貼付文が観察される。第5類b種には貼付文も見られないことから、若干の時間差を有するものと考えられる。何れも平縁と波状縁がある。第4号住居跡出土土器（第12図1）は、4単位の波状口縁で、縦区画の文様を有している。本来文様は胸部に展開されるもので、口縁部に施文される文様とは異なるようである。波状口縁が第2段階までは見られないことや、沈線の一部が結節化していることから、本資料は第4段階の所産と考えられる。

第5類b種は波頂部を中心として対向する弧状の結節浮線文が描かれ、胸部にも同様の文様構成をもつものが存在する。第6類土器は沈線文の資料であるが、文様描出のありかたは第5類a種と同様である。

第5段階

諸磯C式最終末～十三番題式古段階に比定される土器群である。文様描出には3～4条の密接した結節浮線文により、地と文様との陰影が明瞭である土器群（第6類a種）と、結節沈線文により同様の効果が図られた土器群（第6類b種）とがある。文様構成は第4段階の系統上にあり、比較的スムーズな変遷を辿ることができる。次段階には器面に沈線文を施し、文様空白部に印刻が施された第9類土器、さらには第6類a種の系統上にある第7類土器が位置付けられるものと考えられる。

II. 地域的な比較検討

近年、諸磯C式土器の報告例が比較的充実しつつある。ここでは、在家遺跡の分析を基に、関東地方南西部（大宮・武藏野台地、多摩丘陵～山梨県にかかる地域）と北関東（群馬県を中心に新潟県、福島県の一部）の両地域から出土した諸磯C式土器について、その系統・変遷について簡単に触れてみたい。尚、本項では、諸磯C式土器の第3段階までについて触れることにしたい。

1. 関東地方南西部～甲信地方における変遷（第49図）

第1段階は諸磯C式直前段階と考えられる土器群である。器形は口縁が強くひらく深鉢形土器で口唇部が「く」の字状に屈曲する三輪南遺跡出土例（第49図1）のような器形も散見される。この種の器形は諸磯B3式に特徴的であり、その系統上にある器形であろう。一方、西原C遺跡出土の単純にひらく深鉢（第49図3～4）は、前者の口唇屈曲部を省略したものである。すでに指摘されるように、諸磯B式においても、基本形態である四单位波状線と、波状部を省略した平縁の土器群^(註1)が存在しており、諸磯C式直前段階においてもかかる系統を順守しているといえよう。

しかし、波状口縁が急速に消失し、平口縁の資料以外に見るべき器形が存在しない点に、諸磯C式に急速に傾斜していった様相をみることができる。口唇端部には、比較的綫長や円形を呈する貼付文を有している。前者には単純な貼付のみのものと、貼付上に刻みが加えられるものがある。後者に刻みや刺突が加えられるものは存在しないようである。また、この段階には形態の異なった貼付文が共存する事例がないようであり、両者の系統差が問題となるところである。^(註2)

胸部の間隔の狭い横帯区画構成は、諸磯B式と同様であるが、群馬県糸井宮前例（第50図4）のごとく、諸磯C式の胸部文様構成の基本である縱区画を基調とした土器群も出現しているようである。

第2a段階が諸磯C式土器の基本形の完成期といえる。この段階が関東地方南西部と群馬県を中心とした地域との差異となる段階と考える。続く第2b段階は関東地方南西部にあっては主体的な存在ではなく、花鳥山（第49図5）の系統上の土器が主体となっているようである。在家遺跡の分析からも同様の傾向が把握されており、概期の周辺遺跡を検索しても極く僅かな出土例が知られるのみである。一方、群馬県を中心とした北関東地域では、第2b段階が遺跡の規模・出土遺物ともに極めて纏まっており、関東地方南西部とは好対照を示しており第2a段階からの系統差を如実に示していると考える。関東地方南西部で展開した諸磯C式土器は貼付文を肥大・発達させる方向性を持たず、むしろ西原C遺跡（第49図6）・花鳥山遺跡包含層出土土器（第49図5）の系統上

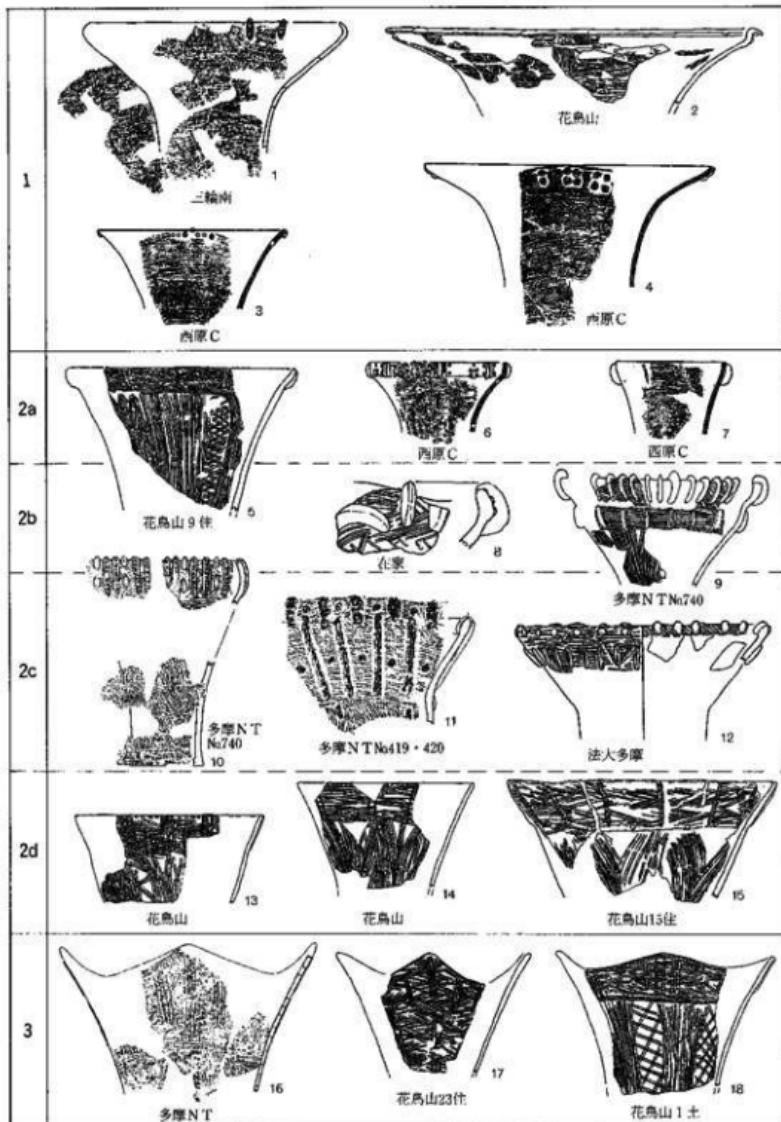
に位置し、口縁部文様帯を幅広くとり、貼付文を垂下させる方向性を有していたと考えられる。しかしながら、在家遺跡の第2 b段階の資料にもあるとおり(第49図8)、縦長貼付文自体にも肥大化したものが存在することから、両者の並行・影響関係が指摘されるところである。一部は第2 b段階に含まれることも考えられる。

第2 c段階は2 a段階からの系統上に位置する土器群である。第49図10は多摩ニュータウンNo406遺跡出土土器であるが、口縁部文様帯に貼付された垂下する隆带上に竹管文が加えられている。地文が矢羽状沈線であり、口縁部も緩い内湾傾向を示すことから時期的にはやや古い様相を呈しているとも考えられる。

同図11~12は口唇内面に肥厚帯を持ち、いわば内面文様帯を構成している。文様帯の成立に関し

第5表 分類対象表

段階	分類	掲載土器
1	第1類a種	第13図5~7
	第1類b種	第26図9~10
2 a	第1類e種	第13図9、第26図40~41
	第1類g種	第26図42~43、第27図81~83、85~86
	第1類c種	第25図1
	第1類h種	第13図34~36、第26図44~53、第27図54~56、87~97
2 b	第2類d種	第14図47~48、第25図2、第28図117~119、125~129
	第2類f種	第28図120~124、第29図134、149~150
2 c	第2類a種	第13図37~45、第14図46~49、第28図98~110、112
	第2類b種	第28図111
	第2類e種	第28図120~124
3	第2類c種	第28図113、第29図135、143~148、154~158
	第7類	第14図56~66
4	第2類	第12図1
	第5類b種	第30図177~182、191~193
	第6類	第14図51~54
	第7類	第32図256~268、271
	第5類a種	第30図183~190、194~195
5	第6類a種	第25図5、第30図205~207
	第6類b種	第25図196~204



第49図 関東地方南西部における土器変遷

ては、例えば第50図11～12・15のような、口縁部が強く内湾し、段状の文様帯を有する土器群の影響が想定される。この種の土器群では、横位の条線帯は脣部文様帯の上端区画であり、口唇の屈曲部が文様帯として認識される。従ってこの部分には貼付文も希薄である。一方第49図11～12では口縁部文様帯が幅広い。いわば横条線帯が文様帯の地文として機能しており、内面に見られる斜行・矢羽状沈線は、第50図11～12・15の屈曲した口縁部文様帯に相当すると考えられる。先に触れたように、この段階と群馬県内を中心とした第2 b段階との時間的な関係が問題であるが、第2 c段階に並行する黒熊第5遺跡出土土器（第50図16）がより後出的様相を呈していることから時間差を有するものと考えた。しかし、造構の重複関係等は確認されていないため疑問も残されている。何れにしても極めて近接した時期の所産と考えている。

関東地方南西部の土器群から比較しても両者の相違は系統差に由来する部分が多いようである。第2 c段階では、隆帯上に竹管文による押捺が加えられるものと加えられないものとの、施文上の差がある。後続する第2 d段階には所謂「結節浮線文」が顕著になり、後者の要素は第2 c段階で終息するようである。

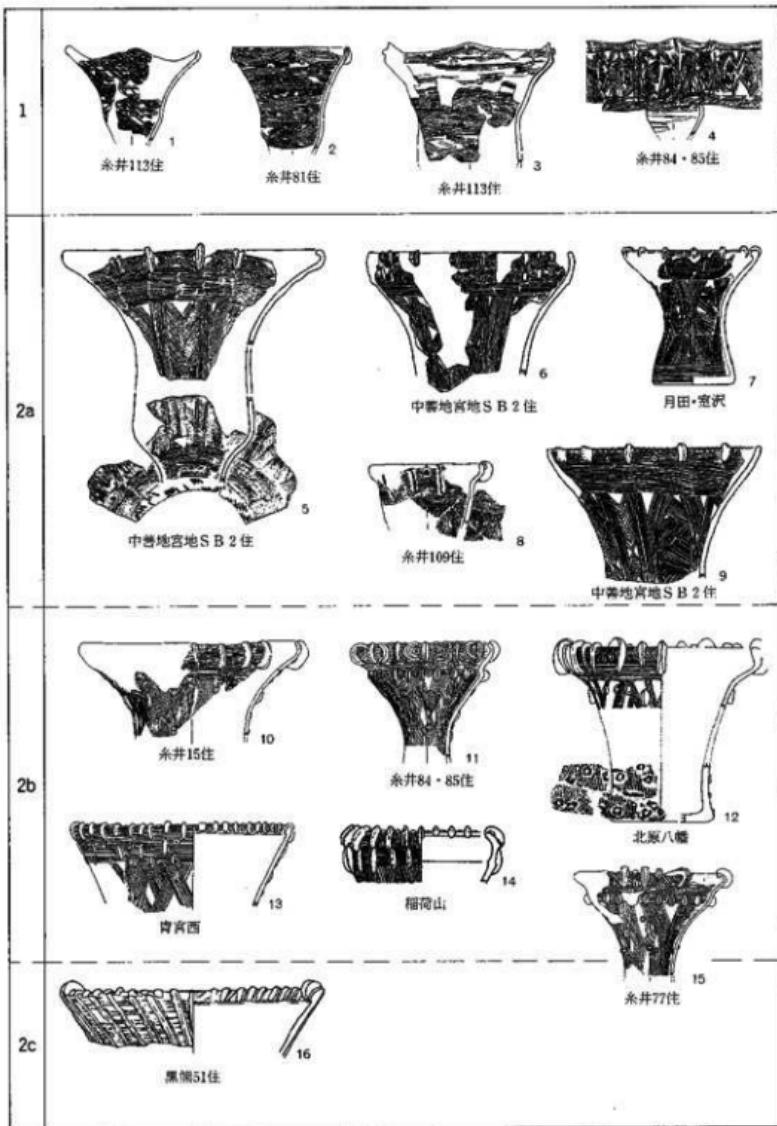
第2 d・第3段階は主に花鳥山遺跡の分析から設定した。第2 d段階では、口縁部文様帯に垂下する隆帯が幅狭くなり、3条を1単位とする隆帯が出現する。隆帯上の竹管文は隆帯幅を超えて器面に及び、結節浮線化する。この段階では口唇内面の肥厚した文様帯は消失する。前段階に近接した様相を呈し、過渡的段階であり、或いは第2 c段階に包括して考えるべきかもしれない。

第3段階は4単位の波状口縁を呈し、3条1単位の結節浮線文が垂下し、小型で2箇一対の円形貼付文を有する。極めて安定した土器群であり、広範な分布を示している。北陸地方とも影響関係を有し、蜆ヶ森2式土器の成立に関与しているようである。この段階以降を諸磯C式の新段階と考えている。4単位波状口縁の成立とともに、諸磯C式における画期といえよう。

2. 北関東地方を中心とした土器変遷（第50図）

群馬県を中心とした北関東の土器変遷は、主に糸井宮前遺跡の分析を参照した。^(註3) 第1段階は諸磯C式直前段階と考えられる土器群である。諸磯B3式の口唇端部が屈曲する波状縁とその省略である平縁の土器群があり、脣部文様には幅狭い横位条線帯を基調とするものと、第49図4のように諸磯C式の脣部文様となる縦区画を基調とする文様構成を有するものがある。口唇端の貼付文には4単位の縦長のものが多く、円形を呈するものが極く少ないようである。関東地方南部と同様に、この段階は資料的な纏まりに欠けるために、暫定的な分類である。

第2段階以降が関東地方南部との地域差が顕著となる段階と考えられる。この背景には前段階における土器群の差異が反映されているものと考えられ、第2 a段階において第49図5～7と、第50図5～7、9との差異に反映されているものと考える。群馬県内の資料では、2 a～2 b段階の差異は極めて暫移的であり、器形・貼付文の発達の度合・口縁部文様帯の屈曲の有無を細分の基準とした。第1段階との差が現状でも大きい。諸磯C式第2 a段階の土器群には、(1)口縁部文様帯の地文が、横位条線のもの、(2)矢羽状条線のもの、(3)両者を併せ持つものの3者に大別される。(1)は第50図4のように、脣部文様帯の区画としての要素が、貼付文の発達に伴い、第50図8～9のように



第50図 北関東における土器変遷

文様帶としての性格を有したものと考えられる。(2)の系統は不明な点が多いが、第49図5～6の構成を有する土器群の口縁部地文は全て矢羽根あるいは綾杉状文である。第50図1の系統のなかで探索すべきものと考えるが、系統を異にする可能性も考えられる。(3)には第50図5・7があり、横位条線帶は胴部文様帶の上端区画として機能しているようである。

第50図5は(3)の例であるが、丸みの強い口縁部文様帶上に、第49図5～6、第50図1の口縁部文様帶と同様の貼付文で構成されている。口縁部の屈曲は諸磯B～C式直前段階の「く」の字状の口唇部からの系統上有ると考えられ、胴部文様帶は諸磯C式直前段階と考えられる第50図4から口唇部文様帶の要素が胸部に移入されたものと指摘されている。^(註4) 第2a段階では関東地方南西部において、この種の器形・文様帶構成の土器群は非常に少ないようと思われる。あるいは、諸磯B式からC式への変遷過程において系統を異にしていたことも考えられよう。

第2b段階が貼付文の発達の著しい土器群である。長野県下島遺跡出土土器もこの段階に含まれる。いわば学史上諸磯C式の典型的な資料と考えられた土器群である。しかし、長野県内においては下島遺跡例のごとき土器群は非常に少なく、これをもって諸磯C式の典型例とするには無理がある。近年の資料的充実からみても、貼付文によって器面を加飾する土器群は、関東地方南部～信州方面の土器群というよりもむしろ、群馬県を中心とした北関東において発達した系統とするほうが自然である。土器群の波及には地理的要因も大きく関与している。

第50図14は笠懸村稻荷前遺跡例である。同図11の糸井宮前49号住居跡出土例と同系統にあるが貼付文が上下2段にわたっている。同図13は福島県青宮西遺跡出土例である。同地域にあっては特異な例でありむしろ関東地方南西部の系統に近い。貼付文が伸びておらず長さの短い貼付文が2段にわたっており、第50図14に近いことから、第2b段階と考えたが、時期的には下降する可能性もある。

北関東の土器群には、隆帶上に竹管で加飾する要素が当初から希薄であり、あるいはこれが隆帶の肥大・大型化を促した要因の一つであったかもしれない。逆にいえば、関東地方南西部では当初から隆帶上の加飾を順守したために貼付文の大型化とは異なる方向性を辿り、結節浮線文の発達を促したものと考えられる。

群馬県を中心とした北関東では、第2c段階に相当する資料が、黒熊第5遺跡51号住居跡出土土器(第50図16)、勝保沢遺跡(石坂他1988)以外に報告例が極めて少ないようである。先に触れたように、2b～2c段階の土器群は時間的に極めて近接したものと考えられ、あるいは同時期に含まれる可能性も考えられる。北関東では、第2b段階に至って安定した様相を示す土器群が2c段階で急速に衰退するようである。以降の土器群の展開には、関東地方南西部～甲信地域に系統変遷を示す土器群が安定して推移するようである。北関東では系統が断絶するかのようであり、僅かに新潟県北原八幡遺跡が知られるに過ぎない。以降では第3段階の土器群が出現しており、北関東2b段階の資料との系統的な脈絡を辿ることができない。

3. 総 括

以上、諸磯C式土器を地域的に関東地方南西部～甲信地域と北関東との2分して変遷を辿ってみ

た。諸磯C式土器は資料が充実しつつある今日でも依然として成立期に大きな問題を残している。諸磯B式までの資料の充実からするとまさに隔世の観は否めない。系統的にも混沌とした様相が窺える。恐らく社会的にも非常に大きな動きがあったといるべきであろう。諸磯C式第2段階以降には再び安定しつつある様相がみてとれる。この段階以降には大別2系統の変遷を指摘した。諸磯C式土器としての連続した系統変遷は、従来考えられていた中部信州地域ではなく、関東地方南西部（伊豆諸島の遺跡も含めた）に成立した系統からの変遷が大きな鍵を握っていること、この地域では、貼付文が肥大化する傾向が少なくそのことが逆に諸磯C新式への変遷を促すこと、所謂「下島式」に代表される貼付文の発達した土器群が、専ら北関東において生みだされた地域色の強い土器群で、他地域に影響を与えてはいるものの比較的短命であったこと、また諸磯C式土器の古段階（第2段階）が概ね3時期に細分される可能性について触れた。従来、諸磯C式土器として一括呼称された土器群にも地域差・系統差が存在することが明かとなった。諸磯C式新段階（第3～5段階）においては地域を超えた斎一的様相を呈することに付いて簡単に触れた。実際には1個の土器のみを取り上げても単純な系統ではなく、かなり錯綜した状況が存在しているため、変遷の概要についてのみ触れた。具体的な変遷過程・他型式との関連については、後日稿を改めたい。

註

1. 鈴木によれば、基本となる4単位波状口縁の口唇屈曲部(1a文様帶)を省略することにより平縁の土器を生み出していると指摘（鈴木1988）した。
2. 鈴木によれば諸磯C式直前段階には1a文様帶を胸部に取り込むことにより縦区画を基調とした文様帶が成立した（鈴木1988）と指摘している。
3. 関根慎二・谷藤保彦1987による。第2段階を概ね新旧の変遷を考えているようである。
4. 鈴木敏昭（1988）による。
5. 長野県における貼付文の発達の著しい土器群は、千曲川水系が関与していよう。水系毎の土器群については石原正敏の指摘（石原1989）がある。

第X群土器について

在家遺跡からは、第3号住居跡と第22号土壙から、縄文時代晩期終末に属する土器群が検出された。出土した土器群はすべて遺構に伴うものと考えられ、包含層中からは1点の出土も確認されていないことから、極めて纏まりのある一括資料と考えられる。

第22号土壙からは総数5個体の土器が検出された。うち1個体は底部のみの小破片であり、他の個体との接合関係は確認されなかったが、比較的小型の鉢形土器と思われる。

出土状態は第IV章で触れたように、狭い範囲から集中して出土しており、一括出土と認定するに足る状況である。構成された土器群は小型の浮線網状文を有する鉢形土器（内1点は底部小破片）、大型の鉢形土器3点（内1点は縫合痕を有する底部）の計5点である。

浮線文土器は口唇直下を廻る口縁部文様帶と、胸部文様帶区画が凹線状の沈線で描出され、頸部文様帶・胸部文様帶が削り出しの印刻手法による浮線文で構成されている。頸部の浮線文は端部が渦曲気味であるのに対して、胸部の浮線文は直線的な網状構成である。全体に浮線文の幅が広く、繊細な印象を受けない。肩部文様帶は所謂「眼鏡状凸帯」であり、印刻によって生じた粘土塊を器

面に盛り上げて作出している。

文様帶の作出に沈線を用いる手法は、例えば大洞C 2式からA式の比較的古い段階にかけてみられるようであり、千網式の中でも古式と考えられる土器群に多用されているようである。また、浮線文の描出手法自体も、比較的厚手的印象を受けるものから繊細な描出手法へと変化しており、器形における文様帶施文の単位が次第に大型化する傾向がある。

従って、上記の変遷觀によれば、在家遺跡第22号土壙から出土した浮線文土器は、やや古手の傾向を示すものと考えられる。

浮線文土器の変遷については今日までに各氏の研究成果があるが、主に長野県を中心とした浮線文土器を研究した石川日出志氏は、浮線文土器の変遷を第1期一大洞A古段階並行、第2期一大洞A新段階並行、第3期一大洞A'式並行の3時期に大別した。^(註1) 氏の編年觀に従えば、在家遺跡出土浮線文土器は、第2期一大洞A並行期と捕えることができよう。

浮線文(千網式)土器は現在新旧2段階に細分され、^(註2) 更に細かな検討が加えられている。在家遺跡の資料はその中間的な様相を示すようである。

在家遺跡の周辺では、関山貝塚、花見堂遺跡、星田遺跡において浮線文土器が報告されている。何れも遺構に伴うものではないが、近接した花見堂と星田遺跡では器内面沈線の有無・浮線文の描出手法において若干内容が異なるようであり、在家遺跡例はむしろ花見堂遺跡に近い内容を示すものと考えられる。両者が時間差を顕現したものか、同時期の施文・系統上の差か不鮮明であるが、星田遺跡がやや新しい様相を呈するものと考えられる。

第20図2は間隔の長短を交互に配した眼鏡状凸帯であるが、第20図3の浮線文土器と比較するとやや古い様相を持つようであり、むしろ大洞A式のそれに近似した様相を示している。

松戸市子和清水遺跡からは浮線文土器(第X群土器)が纏まって出土しており、土器群には時間差を有することが指摘され、在家遺跡の様相に酷似した土器群も含まれている。何れにしても、断片的な資料からの比較であり、在家遺跡出土土器の概要に過ぎない。今後に残された課題は大きいといえよう。

註

1. 石川氏の分類によりa1類とa2類とした同時期における浮線文描出手法の差異が指摘されている(石川1982)。
2. 薗田芳雄氏による千網谷戸遺跡出土土器群の分析(薗田1969)による。

引用・参考文献

- 我孫子昭二 1984 「小山田遺跡群IV」小山田遺跡調査会
 今村啓爾 1981 「施文順序からみた諸磲式土器の変遷」『考古学研究』第27巻第4号
 今村啓爾 1982 「諸磲式土器」「縄文文化の研究」3
 石川日出志 1986 「中部地方以西の縄文晚期浮縫文土器」『信濃』第37巻第4号
 石川日出志 1989 「豊栄市史」資料編1 考古編
 石坂 茂他 1988 「勝保沢中ノ山遺跡I」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
 石原正敏 1989 「諸磲C式土器再考」『新潟史学』第22号
 今井 宏 1984 「里田・寺ノ台」財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
 内田裕二 1976 「三宅島における縄文時代の遺構と遺物」『三宅島の埋蔵文化財』伊豆諸島考古学研究会
 石坂 茂他 1987 「下触牛伏」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
 市川 修他 1984 「塙屋・北塙屋」財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
 増田 修他 1978 「千網谷戸遺跡発掘調査報告書」桐生市教育委員会
 梅沢太久夫他 1976 「花見堂遺跡」「埼玉県土器集成」
 大川 清 1984 「小山田遺跡群IV」小山田遺跡調査会
 大川 清 1984 「小山田遺跡群V」小山田遺跡調査会
 岡田正彦他 1976 「本城一郎防市その3-1」長野県中央道埋蔵分野化財発掘調査報告書
 金原 正他 1988 「龍神平遺跡-塙尻市内のその1-」長野県中央道埋蔵分野化財発掘調査報告書
 倉田芳朗 1978 「東京・上之台遺跡」駒沢大学考古学研究室
 岩地秀夫 1989 「三輪南遺跡発掘調査報告書」三輪南地区遺跡群調査会
 鈴登 建他 1987 「月田・室沢」「群馬県史」資料編I
 鳥羽政之他 1987 「中善地宮地」「群馬県史」資料編I
 三宅敦氣他 1987 「三峰神社裏」「群馬県史」資料編I
 茂木由行 1987 「黒熊第5遺跡」「群馬県史」資料編I
 中村富夫他 1987 「大友遺址」「群馬県史」資料編I
 鬼形芳夫 1987 「新羽今平」「群馬県史」資料編I
 石坂 茂 1987 「下触牛伏」「群馬県史」資料編I
 胸形敏朗他 1973 「北原八幡遺跡」新潟県教育委員会
 小林 裕 1988 「妙正寺川No1遺跡」妙正寺川No1遺跡調査会
 庄野晴寿 1974 「関山貝塚」埼玉県教育委員会
 鈴木敏昭 1988 「諸磲b式からc式への土器変遷」「埼玉県立博物館紀要」15
 鈴木徳雄 1979 「日高町高麗公民館所蔵の千網式土器」「埼玉考古」第18号
 鈴木正博 1987 「続 大洞A2式考」「古代」第84号 早稲田大学考古学会
 鈴木加津子 1991 「安行文化の終焉(2)」「古代」第91号 早稲田大学考古学会
 闇根慎二他 1987 「糸井宮前遺跡II」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
 薗田芳雄 1972 「千網谷戸C-E S地点の調査」両毛考古学会
 田中英世他 1988 「子和清水遺跡」千葉市教育委員会
 長沢宏昌他 1989 「花鳥山遺跡・水香岳北遺跡」山梨県埋蔵文化財センター
 江里口省三 1983 「多摩ニュータウンNo419,420遺跡」東京都埋蔵文化財センター
 岩橋陽一他 1984 「多摩ニュータウンNo740遺跡」東京都埋蔵文化財センター
 中西 充他 1986 「多摩ニュータウンNo406遺跡」東京都埋蔵文化財センター
 芳賀英一 1985 「青宮西遺跡」会津高田町教育委員会
 間庭 稔他 1986 「三峰神社裏遺跡」月夜野町教育委員会
 茂木由行 1984 「黒熊遺跡群」吉井町教育委員会
 若月省吾 1981 「笠懸村稻荷山遺跡」笠懸村教育委員会

写真図版

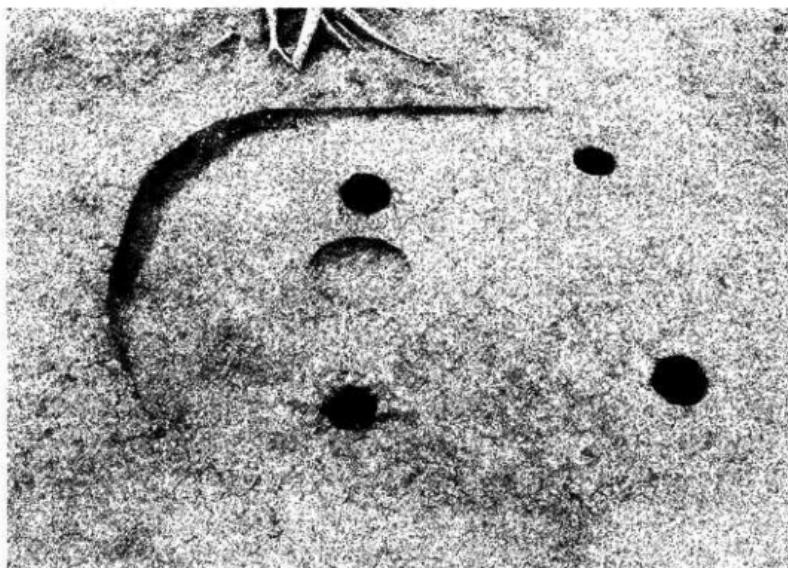


在家遺跡航空写真

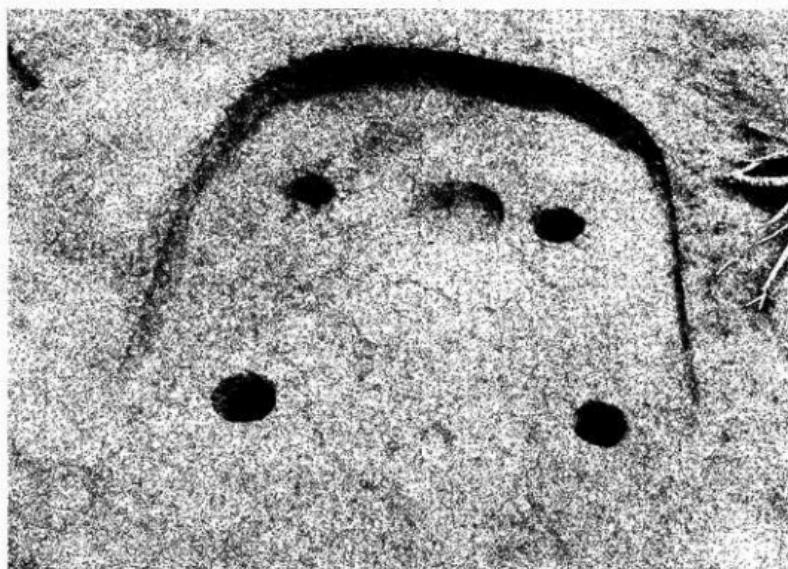


在家遺跡全景（東から）

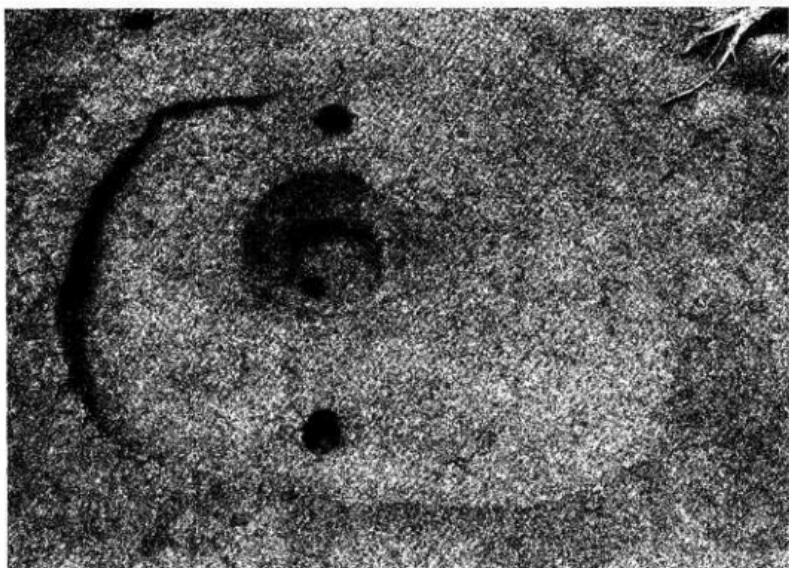
図版2



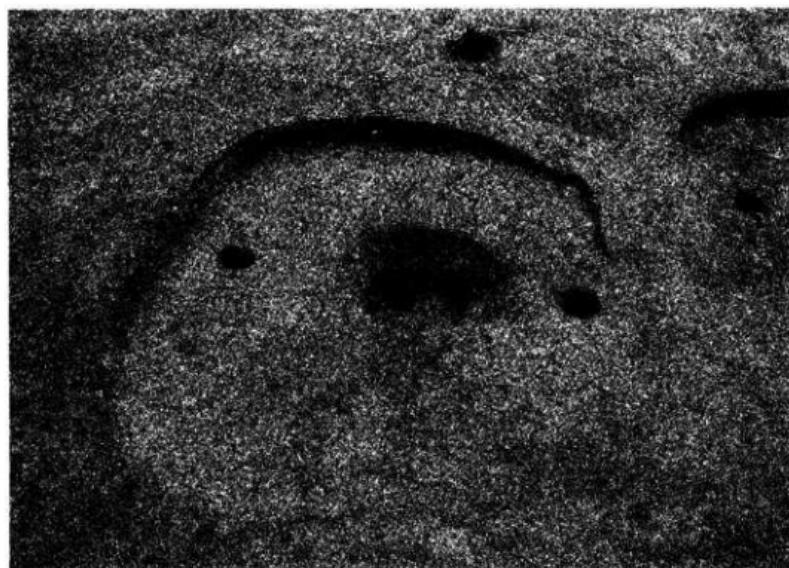
第1号住居跡（北から）



第1号住居跡（西から）

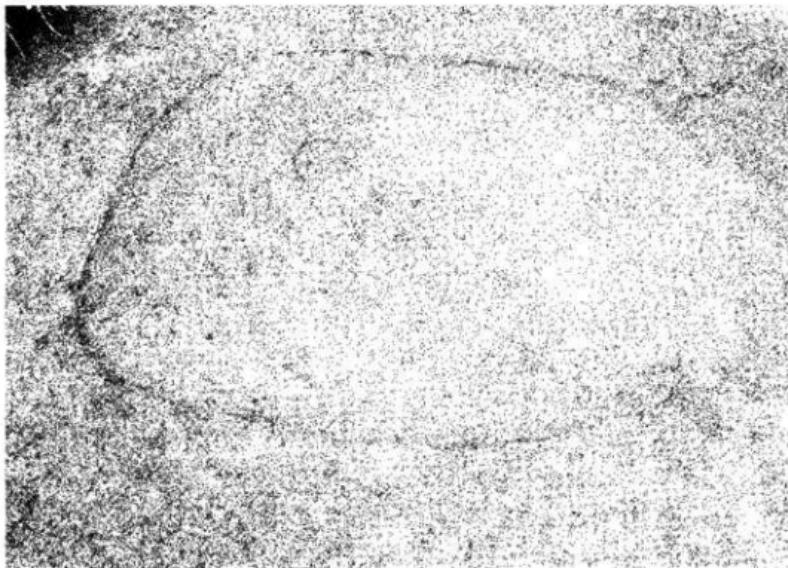


第 2 号住居跡（北から）

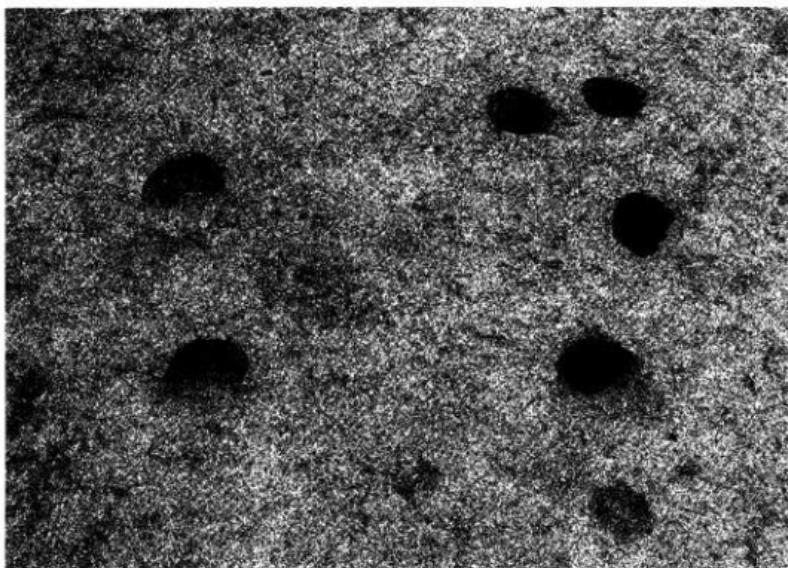


第 2 号住居跡（西から）

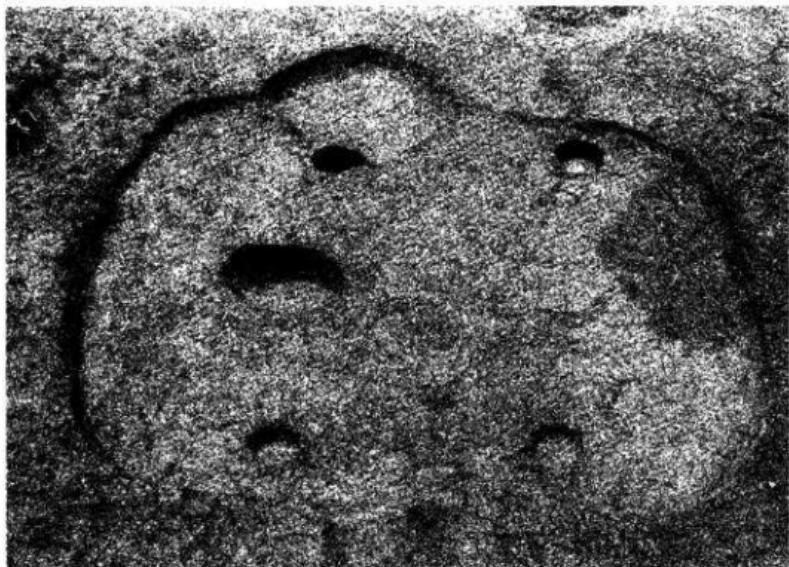
図版 4



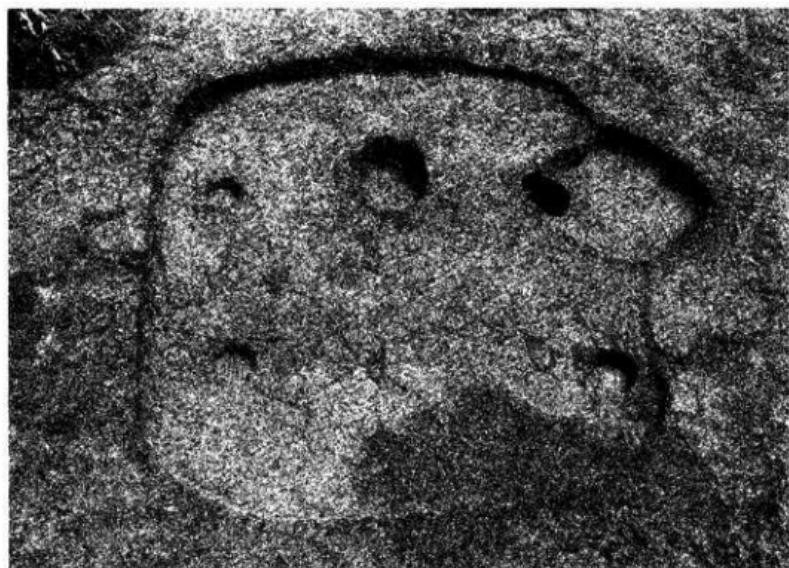
第3号住居跡（西から）



第3号住居跡（南から）



第 4 号住居跡（北から）



第 4 号住居跡（西から）

图版 6



第1号土壤出土状况



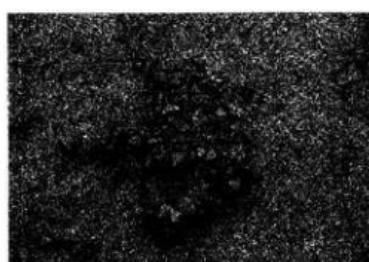
第1号土壤



第2号土壤出土状况



第2号土壤



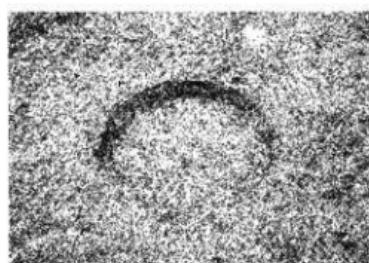
第4号土壤遗物出土状况



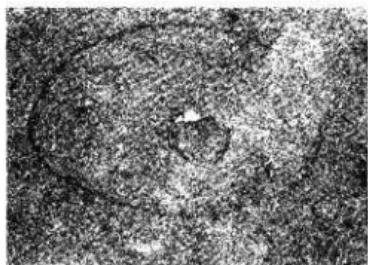
第4号土壤



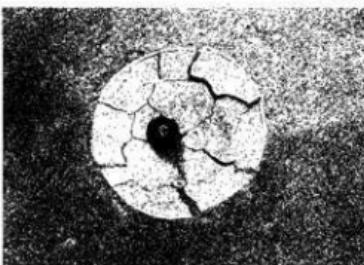
第5号土壤



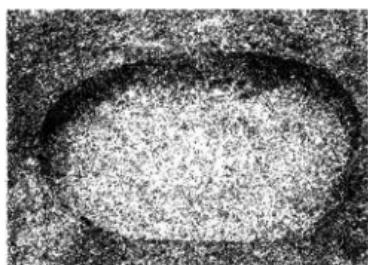
第6号土壤



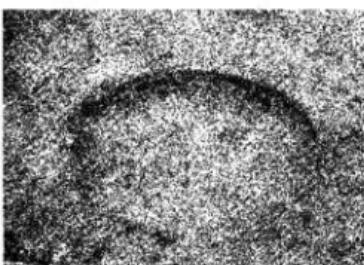
第7号土壤



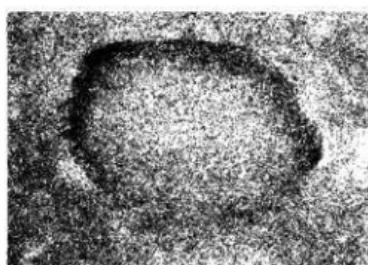
第7号土壤遺物出土状況



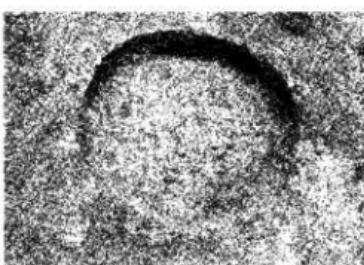
第8号土壤



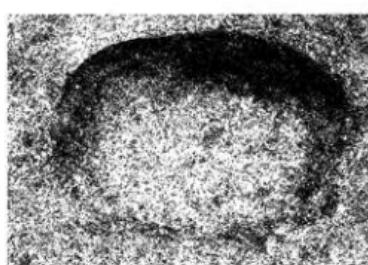
第9号土壤



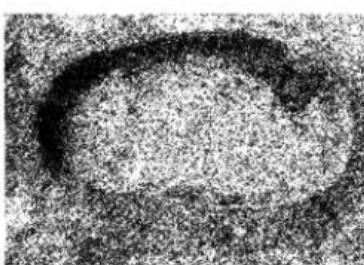
第11号土壤



第12号土壤



第13号土壤

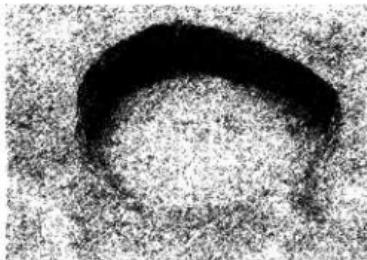


第14号土壤

图版 8



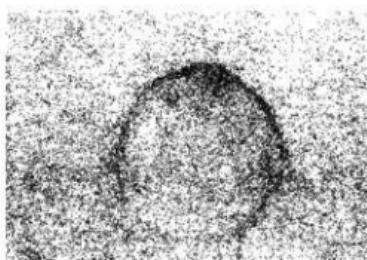
第15号土壤



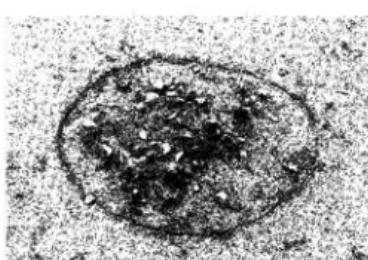
第16号土壤



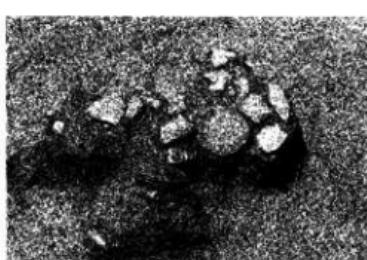
第17号土壤



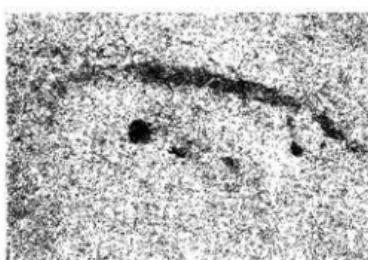
第19号土壤



第20号土壤



第22号土壤遗物出土状况



第1号炉穴



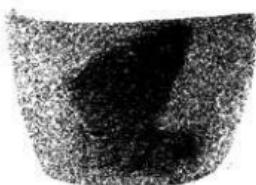
第4号炉穴



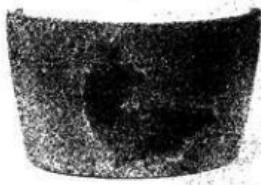
第4号住居跡出土土器



第4号住居跡出土土器



第4号住居跡出土土器



第4号住居跡出土土器



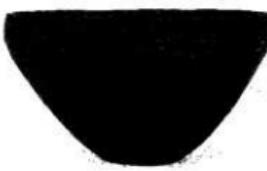
第3号住居跡出土土器



第22号土壤出土土器



第22号土壤出土土器



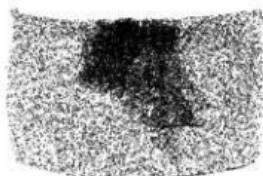
第22号土壤出土土器



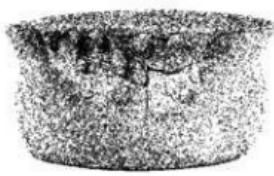
第22号土壤出土土器



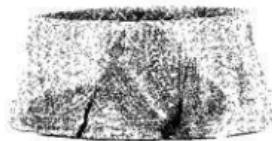
第8号土壤出土土器



グリッド出土土器



グリッド出土土器



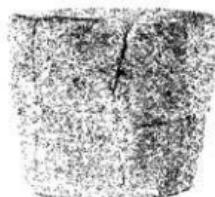
グリッド出土土器



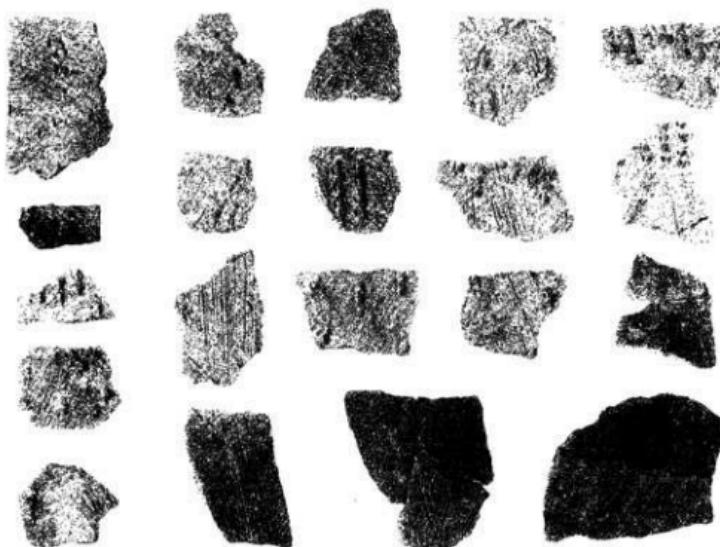
グリッド出土土器



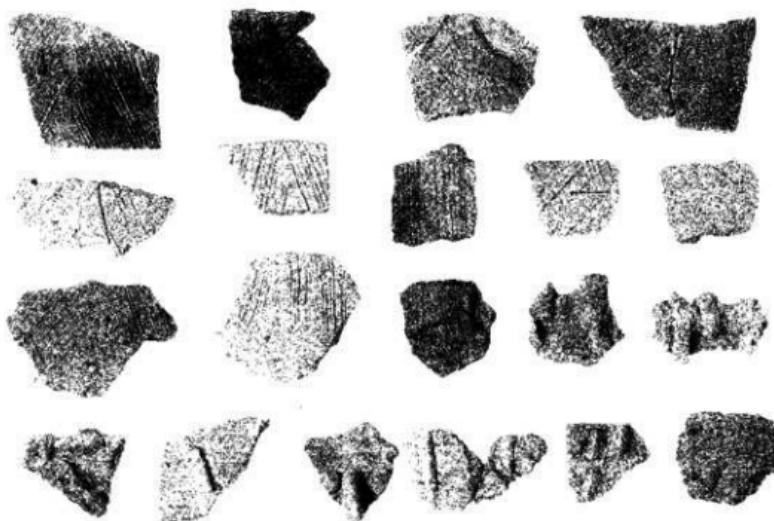
グリッド出土土器



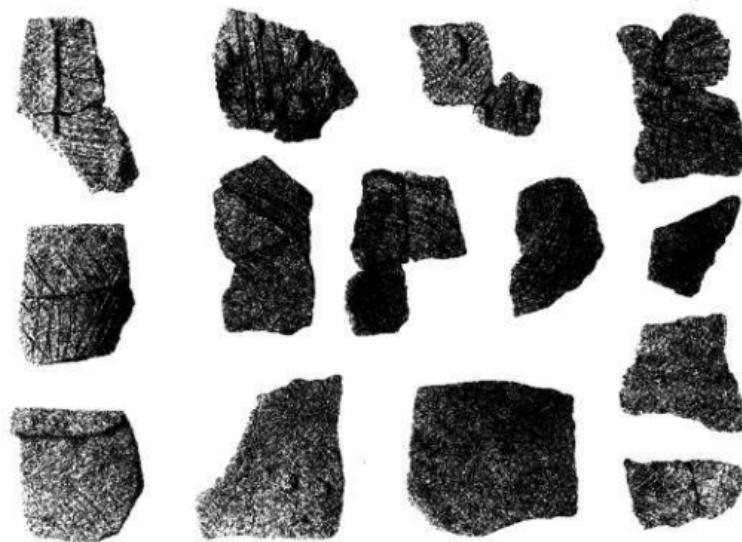
グリッド出土土器



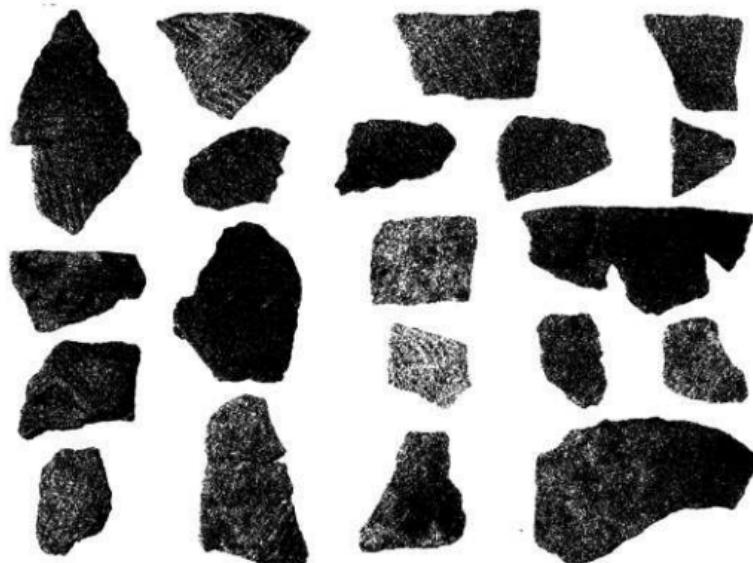
第1号住居跡出土土器(1)



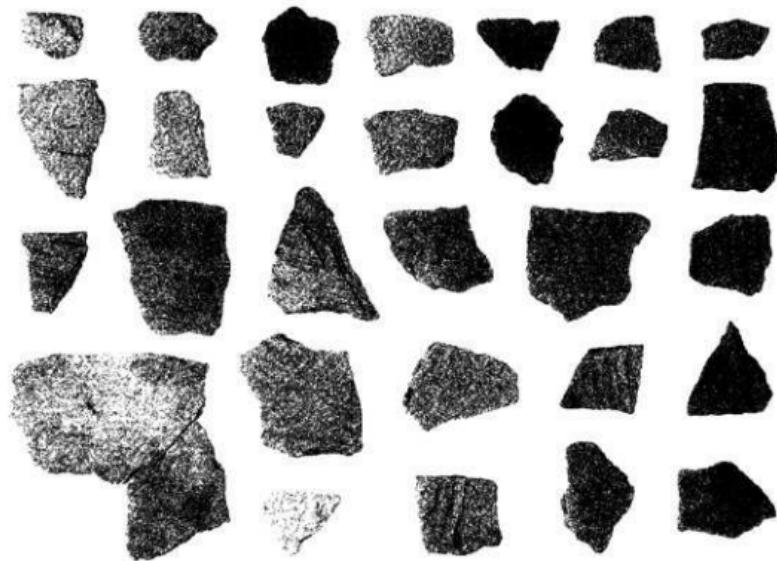
第1号住居跡出土土器(2)



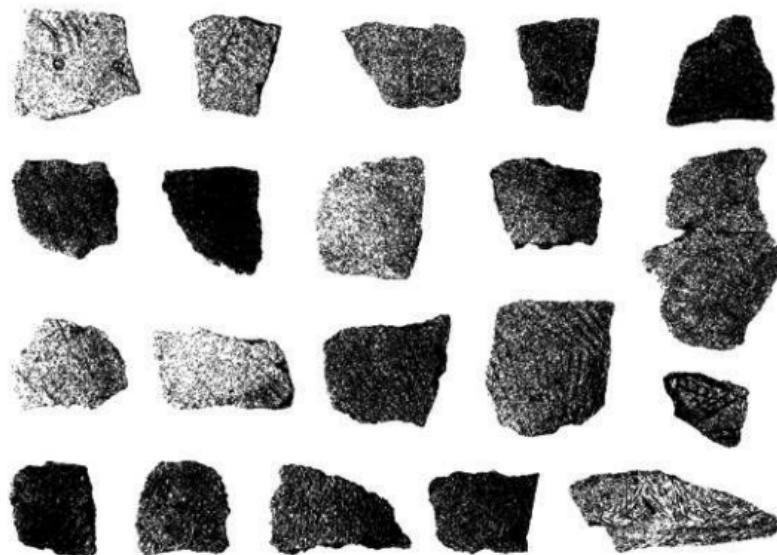
第1号住居跡出土土器(3)



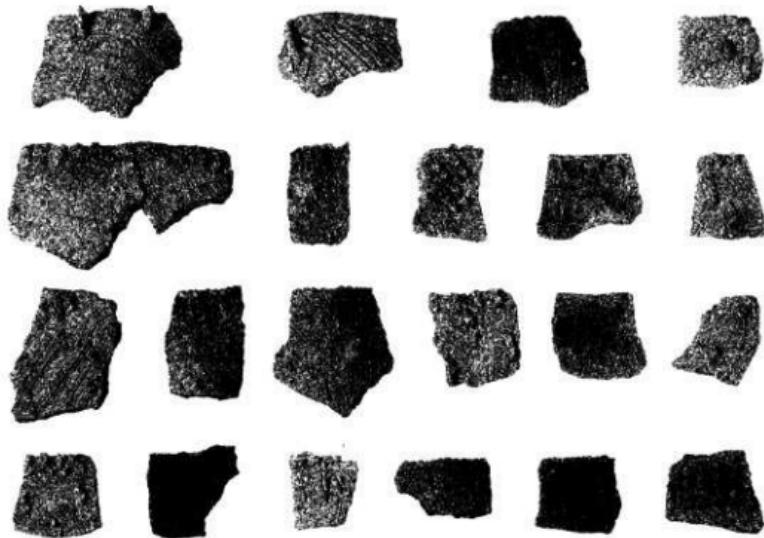
第1号住居跡出土土器(4)



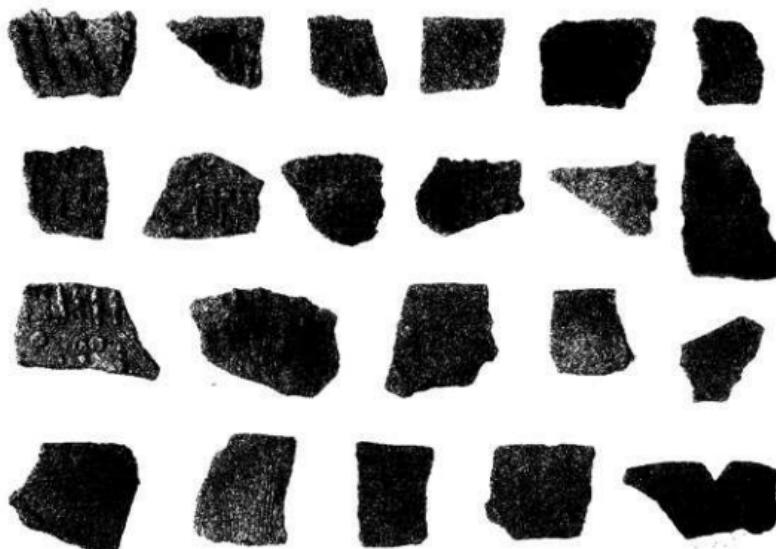
グリッド出土土器(1)



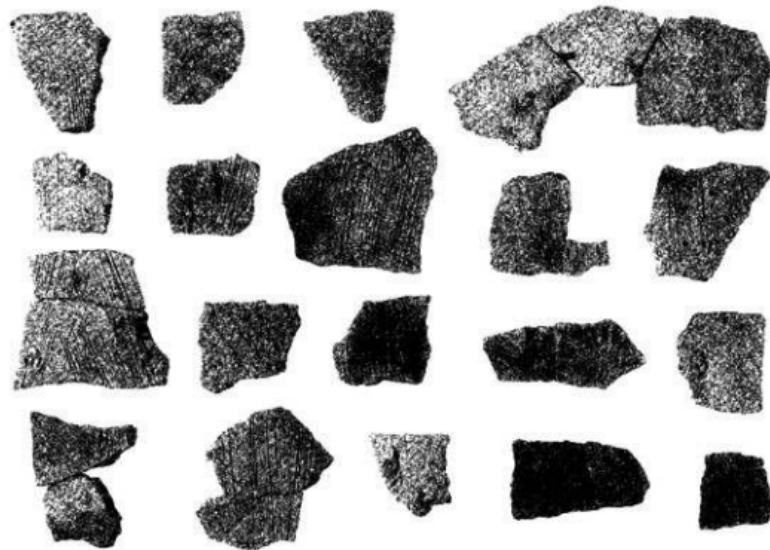
グリッド出土土器(2)



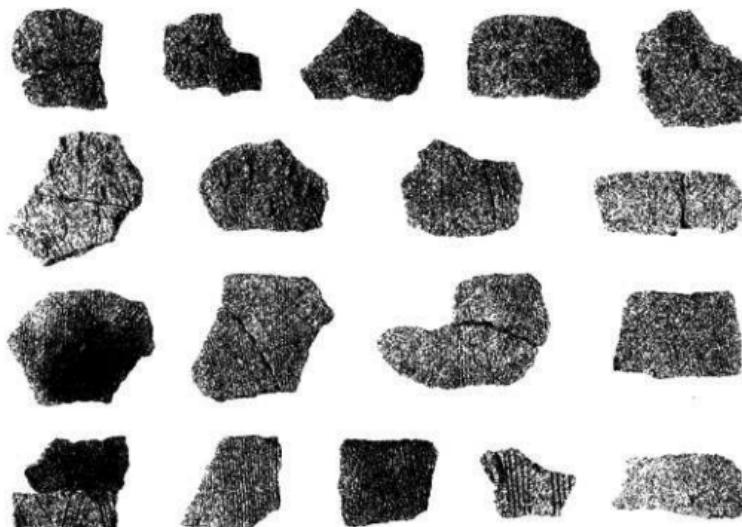
グリッド出土土器(3)



グリッド出土土器(4)

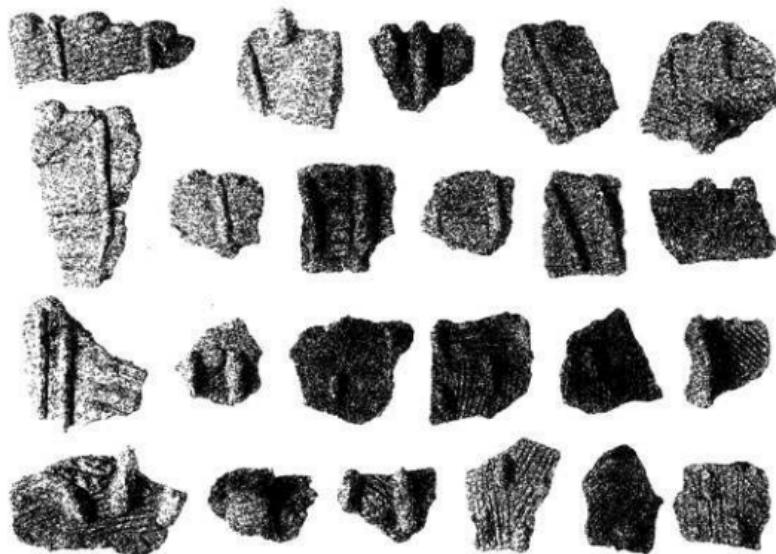


グリッド出土土器(5)

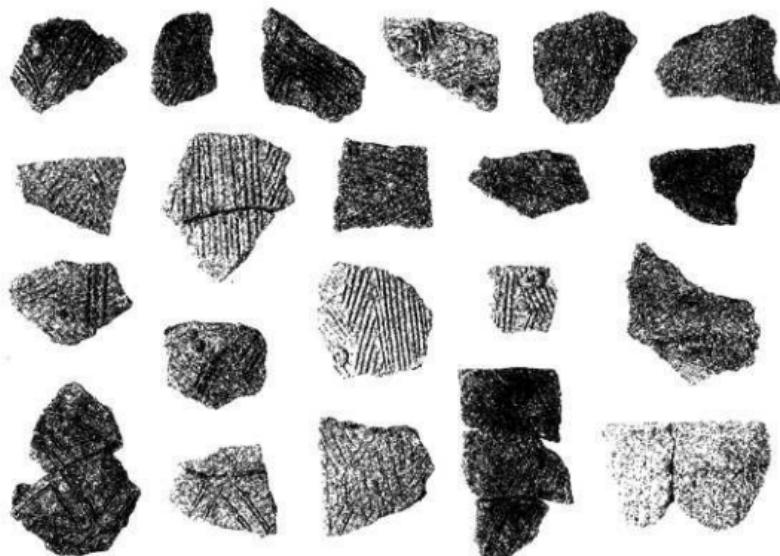


グリッド出土土器(6)

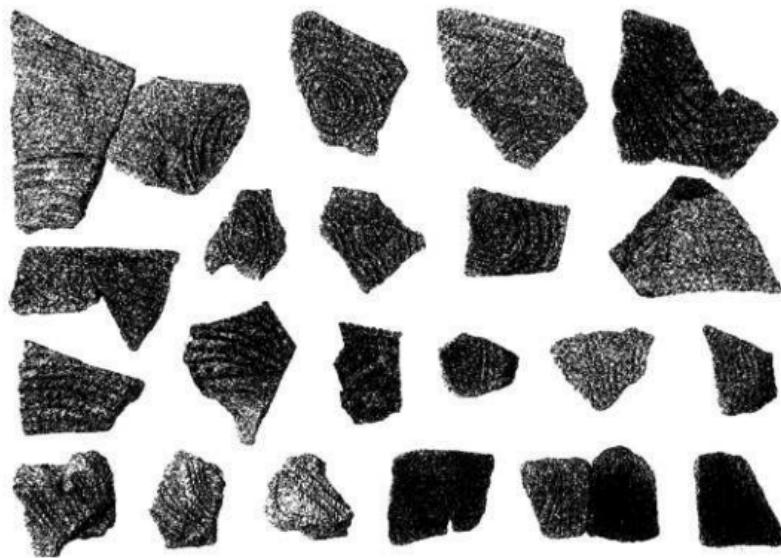
図版16



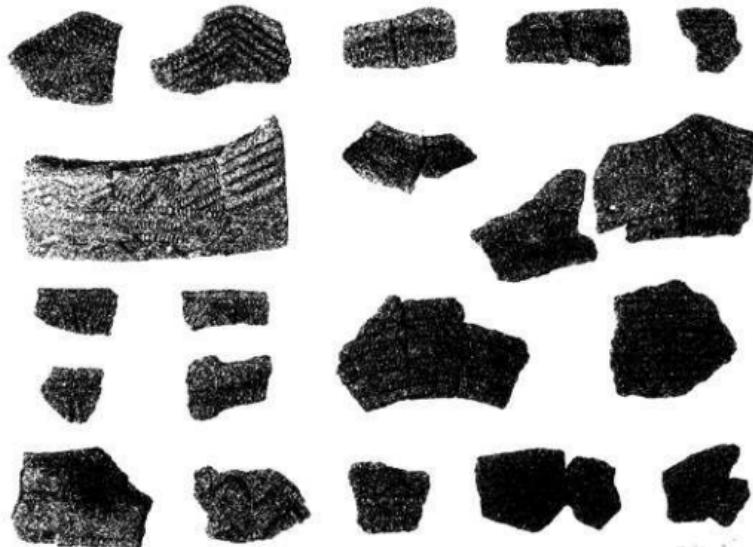
グリッド出土土器(7)



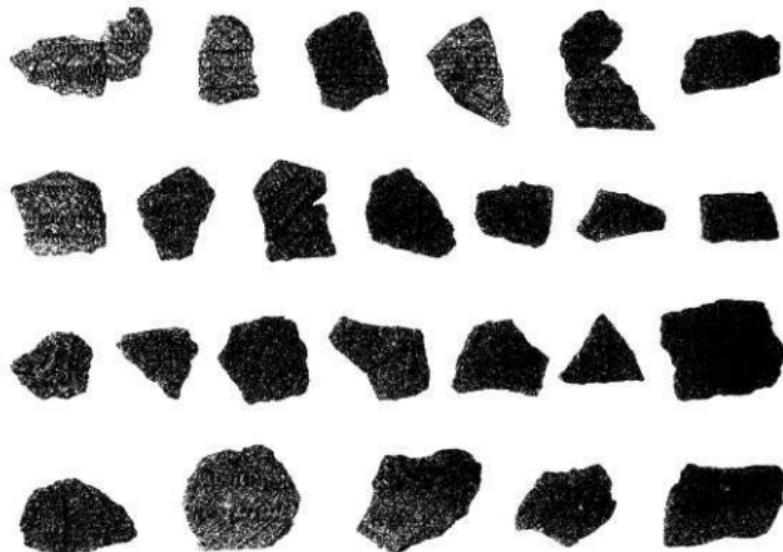
グリッド出土土器(8)



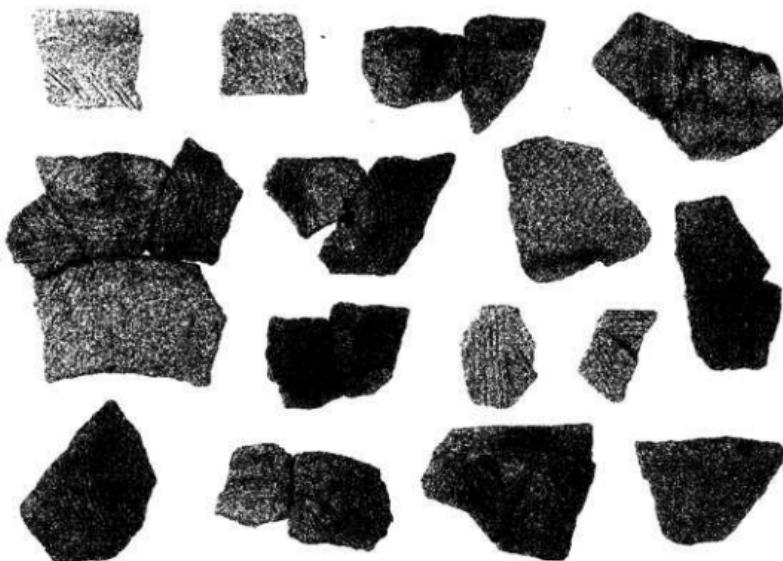
グリッド出土土器(9)



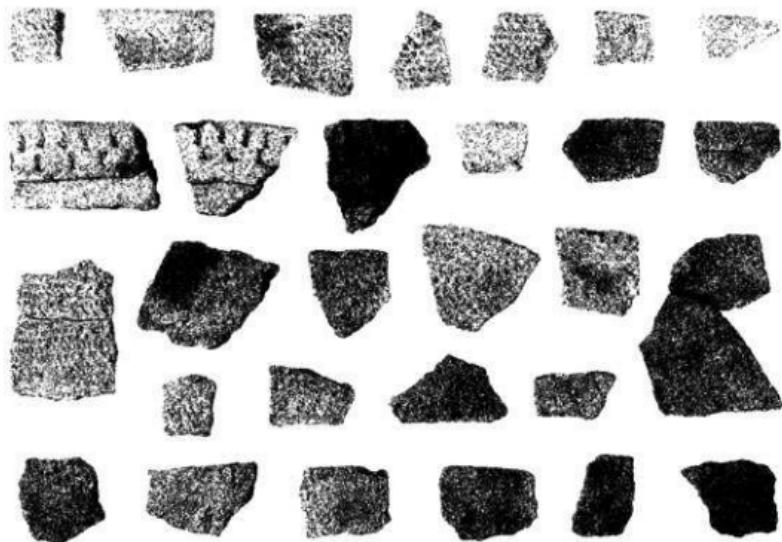
グリッド出土土器(10)



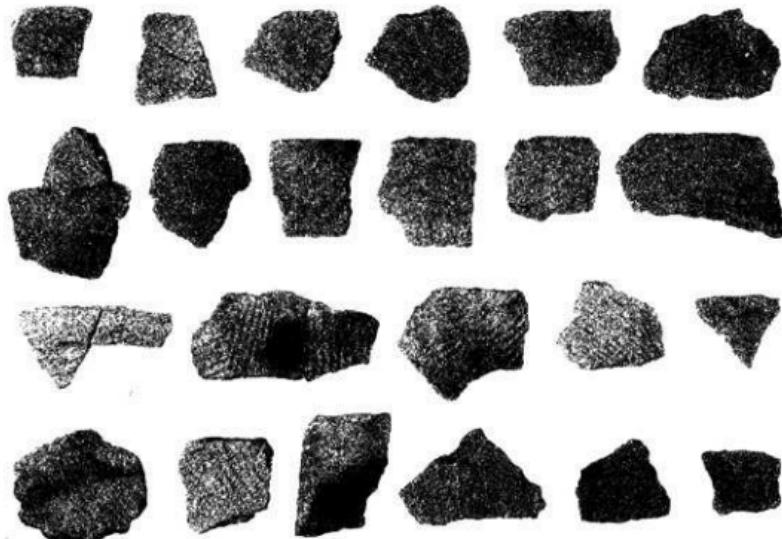
グリッド出土土器01



グリッド出土土器02



グリッド出土土器⑬



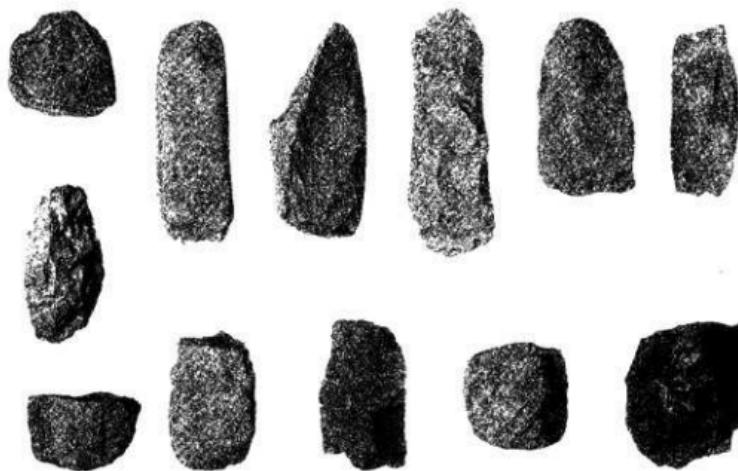
グリッド出土土器⑭



グリッド出土石器(2)



グリッド出土石器(1)

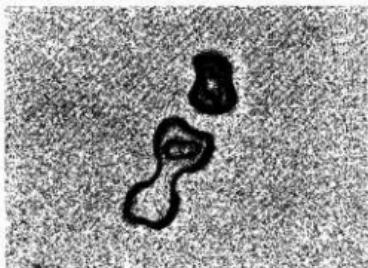


グリッド出土石器(2)



グリッド出土石器(3)

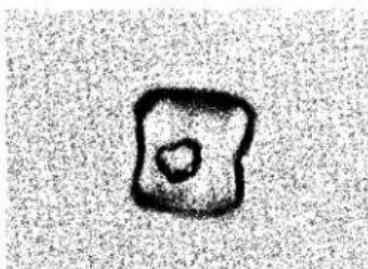
図版22



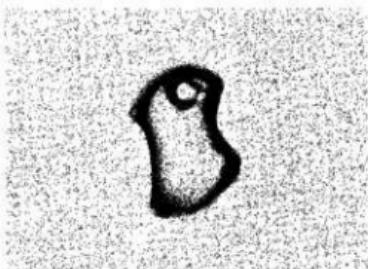
キビ族 (No.⑥)



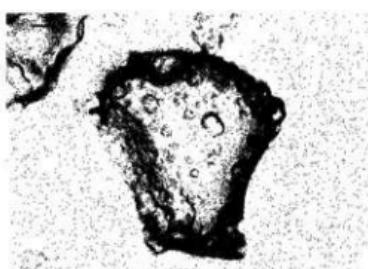
キビ族 (No.①)



タケ亞科 (No.①)



タケ亞科 (No.⑤)



タケ亞科 (No.①)



タケ亞科 (No.⑥)



イチゴツナギ亞科 (No.①)



イチゴツナギ亞科 (No.⑤)

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第107集

在 家

県営住宅丸山団地第II期工事関係埋蔵文化財発掘調査報告

平成3年7月25日 印刷

平成3年7月31日 発行

発行 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-01 大里郡大里村大字箕輪字船木884

電話 (0493) 39-3955

FAX (0493) 39-3579

印刷

望月印刷株式会社